

靈界物語 第七〇卷 山河草木 西の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十卷』天聲社

1971(昭和46)年04月22日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 花鳥山月 くわてうさんげつ

第一章 信人權 しんじんけん 〔一七六八〕

第二章 折衝戰 せつしよせん 〔一七六九〕

第三章 戀戰連笑（一七七〇）

第四章 共倒れ（一七七一）

第五章 花鳥山（一七七二）

第六章 鬼遊婆（一七七三）

第七章 妻生（一七七四）

第八章 大勝（一七七五）

第二篇 千種蠻態

第九章 針魔の森（一七七六）

第一〇章 二教聯合（一七七七）

第十一章 血臭姫（一七七八）

第十二章 大魅勒（一七七九）

第十三章 喃悶題（一七八〇）

第一四章 賓民窟ひんみんくつ 一七八一
第一五章 地位轉變ちゐてんぺん 一七八二

第三篇 理想新政りさうしんせい

第一六章 天降里あまくだり 一七八三
第一七章 春の光はる ひかり 一七八四
第一八章 鳳戀ほうれん 一七八五
第一九章 梅花團ばいくわだん 一七八六
第二〇章 千代の聲ちよ こゑ 一七八七
第二一章 三婚みこん 一七八八
第二二章 優秀美いっしうび 一七八九

附 記念撮影

序文

靈界物語も、瑞の天使大八洲彦命の御神徳と、健腕なる筆記者の熱誠とに依りまして、全七十二巻を口述し編纂し了りました。かへりみれば、山河草木第一巻すなはち六十一巻を口述し始めたのは、大正十二年の夏でありました。その間にエスペラントの講習や宣傳に次ぎ、神命による蒙古入りや、世界宗教聯合會、紅卍字會、普天教との提携、萬國信教愛善會の創立、人類愛善會の發起、天恩郷光照殿建築工事監督、其の他海外宣傳使の派遣などにて忙殺され口述するの時間もなく、三年目の今日すなはち大正十四年八月二十五日舊七月六日、ここに目出たく、山河草木第十二巻を終ることを得ました。この山河草木は他の靈界物語とは趣を異にし、讚美歌のみをつづつた巻もあり、或は時代を諷刺した巻もあり、舍身活躍より連絡したる宣傳使等の物語もあつて、山、河、草、木一度にかたまつてをります。

大正乙丑初秋

於由良港

編輯序言 本卷は御口述の順序よりすれば、第七十二卷ですけれども、發行の順番は七十卷であります。

總説

本卷は印度デカタン高原における、トルマン國の物語であります。バラモン軍の大足別の活動やスコブツエン宗の妖僧キューバーの陰謀、王妃千草姫の死骸に高姫の靈憑依して、種々雑多の醜態を演じ、數多の重臣を退け、天下を紊さむとする一條より、自ら向上主義者と稱する國土の大々的活動、民間より國難に殉じて起てる英雄ジャンクの忠實なる働き等、千變萬化の模様を、きはめて簡単に述べておきました。

目出たく七十二卷を編了するに當り、北丹分所長宣傳使嵯峨根民藏氏、新舞鶴支部長宣傳使村山政光氏および兩所の役員信徒の熱心なる斡旋盡力の下に、秋山彦の舊蹟地、由良の港の涼しき海岸において、引續き三卷を編み了つたことを大

神様の御前に感謝し、記念のため茲に記しおくことと致しました。ああ惟神靈幸
倍坐世。

大正十四年初秋 由良港 於秋田別荘

第一篇 花鳥山月

第一章 信人權（一七六八）

往古文化の中心、佛祖の出現地なる七千餘ヶ國をかためて一團となしたる印度は、淨行、刹帝利、首陀、毘舍その他各種の階級が設けられてゐた。ことに印度はバラモン教の根元地ともいふべき國である。さうしてウラル教はデカタン高原の一角に、相當に勢力を保ち、バラモン教の本城ハルナの都に向かつて、ややもすれば教線を擴張し、大黒主の根底を覆へさむとするの概があつた。ここに大黒主は宣傳將軍を四方に遣はし、殊にこの方面は大足別將軍に數千の兵を與へて、討伐のみを主たる目的にて出發せしめたのである。

さてデカタン高原内の最も土地肥えたるトルマン國は餘り大なる區域ではないが、相當に澤山な人が住んでゐる。さうして地理上の關係からウラル教を奉じて

また。トルマン國の王の名はガーデンといふ。ガーデンはウラル教を信ずるでもなく、また排斥するでもなく、祖先傳來の宗教として、弔ひの儀式にのみ用ふるくらゐの觀念を持つてゐた。しかるに國民の過半数はウラル教を奉じ、一部分はバラモン教に入り、二三分通りはスコブツエン宗に新たに入信することとなり、その勢ひは燎原を焼く火の如くであつた。ハルナの都の大黒主はバラモン教の宣傳使を遣はして、トルマン國を全部バラモンの勢力範圍になさむものと、いろいろ苦心の結果、到底バラモンの名にてはこの國の人心に投じないことを悟り、狡猾にして萬事抜目のない大黒主は、日頃手慣れおいた、寵臣のキューバーに命じ、バラモン教の名を避けて、スコブツエン宗といふ、變名同主義の宗教を築かせ、まづ第一にトルマン王を歸順せしめむと百方盡力してゐたのである。

トルマン王のガーデンには千草姫といふ王妃があり、太子はチウイン、王女はチンレイといつた。左守の司をフリーランといひ、妻モクレンとの中にテイラといふ一人娘があつた。右守の司はスマンヂーといひ妻は已に此世を去り、ハリスといふ一人の娘をもつてゐた。しかるに王をはじめ、左守右守はバラモン教はもと

より、スコブツエン宗には何ほど勧められても入信せず、體的方面の政治のみに没頭してゐたのである。ここにバラモン軍の大足別が、にはかにトルマン城の攻撃を開始した経緯について、その大略を述べてみやうと思ふ。

トルマン城を去る十數里を隔てた、ある小さき山里の古ぼけた祠の前で、二人の首陀が何事かしきりに囁きあつてゐた。春の初めとはいへど、まだ風は寒く青草の芽は去年の記念物たる長い枯草の間から細長く空を覗いてゐる。

レール「信仰的に自覺した吾々の擡頭を見て、バラモン階級の鬼畜どもは周章狼狽し、尠なからず戦慄し恐怖を感じたものとみえる。彼奴らは自分等の占有せる支配の地位たる宗教上、經濟上より顛覆しつつある己れ自身を解し、哀れ至極にも泣き面をかわき、勃興せる三五運動の大征伐に向かつて今や死物狂ひになつてゐる。溺れむとするものは毒蛇の尻尾でも生命かぎりに掴まむとするものである、

諺通りの彼奴等の狂態は、噴飯の價値以外には全くゼロだ」

マーク「さうだねー、浪速節語の屁放爺に奏任待遇を與へたり、若衆に僧服を纏はせたり、老衆に民風作興を卸賣りしたり、糞造機の似而非宗教家に思想善導の

元賣捌きを許したのを見ても、いよいよ彼奴らが境遇を暴露せるもので、思へば實に哀れな次第ではないか。これを見ても今までに虐げられた吾々三五教徒に取つては溜飲が下がるやうだ、痛快千萬だアハハハハ。しかしながら今日の場合、吾々は毫も油断はできない。なほ層一層この運動に大努力を要する天下別目の時期だ。バラモン教徒の滅亡は自業自得の結果として拱手傍觀すべきではない。自業自得の必然性を認めればこそ、かつ黜の最期屁の害毒の甚大なるを悟ればこそ、吾々は最善の戦法を選んで一刻も早く宗教戦の勝利を得るやうに、奮闘努力せなければならぬ。彼奴等のこの自業自得の收獲こそ人類史上、最大罪惡の裁判の結果で、一點の恕すべきところはないのだ。ただ吾々は彼奴らの滅亡を一日も早く断行し、促進することが寧ろ彼奴等に對してせめてもの優遇だ、弔ひだ、ハナムケともなるべき慈善だ。アハハハハ」

「俺たち仲間の第一癩にさはることは暴利の權化ともいふべきブル的宗教家の今日のやりかただ。好景氣時代に、己れ先づシコタマ信徒の油を搾り懷中をふくらせやがつて、最後にお義理的に申し譚的に、澁々われわれ三五教信者へホンの鼻

糞くそほどのお守まもり札ふだを呉くれよつて、恩情おんじやうしゆぎ主義だの何なんのと臆おく面めんもなく業ご託たくを吐ほき、俺おれたちの汗あせや油あぶらを搾しぼつて妾せふ宅たくを造つくり、榮華えいぐわの夢ゆめに酔よひ潰つぶれ、一朝いつてう不景氣ふけいき風かぜが吹ふき始はじめると、何なにはさておきイの一番いちばんにお札ふだの値ね下さげだの、お拂はらひ箱ばこだのと大錠おほなたを振ふり上げ、人間にんげんの生命せいめいを制せいし、ミイラを製せい造ざうしておきながら、己おのれは依然いぜんとして甘あまい汁しるをシコタマ吸き收しうし、そして吐ぬかすことを聞きければ……宗教しうけう界かいに不景氣ふけいき風かぜが吹ふき荒すみ、眞價しんかは日ひを追おうて暴落ばうらくとしてきた。こんな悪現象あくげんじやうを招せう來らいした原因げんいんは信仰しんかう律りつ低てい下かと、教義けうぎの餘あまりに高尚かうじやうに過すぐるからだ……と吐ほきやがるのだ。そして洒しゃ々しゃとして澄すまし込んでゐやがる。ブル宗教しうけう家連かれんぢう中ちゆうもやはり吾々われわれ同どう様やうに白しろい米こめを喰くつて黄色きいろい糞くそを垂たれる人間にんげんの片割かたわれだ。こんな奴やつが霸張はばつてゐる宗教しうけう界かいは何時いつになつても駄目だめだないか」

「そりや其その通とほりだ、俺おれも同感どうかんだ。しかし今日こんにちの僧侶そうりよどもは實じつに怪けしからぬ代物しろものではないか。俺おれたちの仲間なかまに對たいして吐ぬかすことには、「お前まへたちのやうな悪信あくしん仰かうの没分わ曉から漢連やれんがやかましくいつて飛とび廻まるものだから、宗教しうけうは日ひに月つきに惡化あくくわし混亂こんらん状態やうたいに陥おち入いるのだ」と吐ほきやがる。こんな僧侶そうりよの盲目めくらどもは、梵鐘ぼんしやうを鳴ならしたから

火事が起つたと吐かす没分曉漢だ。更にまた「人間社會に貧乏といふ怪物が現はれるのは、食物の生産力に比して人口の加増率が一層多きためだから、これを救済する唯一の良法は貧乏人たちが節制して、あまり澤山な子を産まないやうにするのが、社會救済策の最善なる方法手段だ」と主張する馬鹿な學者も現はれてきた。さて何れも理窟は抜きにして、かくのごとき坊主が社會に公然として生存し得るのも、畢竟宗教家第一主義の社會なればこそだ、思へば涙の溢れるほど有難きお目出たき次第だ。

バラモン主義の現代の社會において横綱たる、ブル宗教家力士の土俵入りに従ふ雜僧の太刀持ちや、露拂ひを勤むる御用學者の出場などは、實に見物人の吾々にとつては立派で見事である。この土俵入りを拜見するためには、ずみぶん種々の美はしい名目で、過重な見料を否應なしに徴集されるのだから、吾々の貧弱な骨と皮との瘦肉には、錦上更に花を飾るといふお目出たい状態だ。アア吾々信徒はこのお目出たに對して祝福の言を述べねばならぬ。一層聲を大きくして、横綱力士の今に土俵の外に轉げ出て、手足を挫き吠面を曝らす幕切りを見たいものだ、

アハハハハ

「一日も早くその土俵入りの盛観と幕切りを拜見したいものだ。腕を撫し固唾を呑み拳骨でも固めて……」

「それはさうとして、僕の友人なる首陀のバリ君に、大喇嘛が「貴様は首陀の分際でありながら、淨行の言語を使用し、頭髪を長くしやがつて怪しからぬ奴だ」といふ罵詈雑言の末、如意棒をブラ下げた髯のある立派な番僧に散々つばら毒付かれたのだ、「首陀のくせに淨行の語を使ひくさる」とは、首陀と淨行とは別國人だ。印度人ではないといふ以上に輕蔑の意味が充分に含まれてゐるのだ。この番僧が大喇嘛から「淨行語を使ふ首陀は用捨なく蹴り倒せ、擲りつけよ」との命令を受けてゐたか否かは別問題として、首陀向上運動の煽動者であることだけは君も知つてゐるだらう。ゆゑに吾々是不逞首陀團と目されてゐる憐れな運動者よりも、まづいはゆる番僧連を、信徒安定の上からみて嚴肅に取締らねばなるまいと思ふのだ。實に思つても馬鹿々々しい問題だが、番僧連は片手で淨首融和會といふ魔酔薬を突き出し、片手では「淨行語をエラソウに使ひくさるから」とて拳

骨を突き出してゐるのだ。しかし首陀向上團の連中から聞いてみると、幸か不幸か魔酔薬も拳骨もあまり好感をもつて迎へられてゐないさうだ」

「僕はそれだから、近頃途上ではなるべく淨行の番僧には會はないやうにと注意してゐるのだ。「貴様は首陀階級の癖に俺の顔を見るとは生意氣千萬な奴だ」と直ぐに擲られるのが嫌だからだ。ホントに馬鹿々々しいぢやないか」

「馬鹿らしい事といつたら、一夕俺の亡妻の追悼會を催した事があつたが、數日の後に婆羅門總本山から番僧が御出張遊ばされて、「お宅の追悼會を少しも知らなかつたところ、今日本山から散々に小言を言はれ、大いに目玉の飛び出るほど叱られた。それでお宅様の追悼會には誰だれが集まつたか、どんな弔辭があつたか聞かしてくれろ」との仰せだ。僕は葬婚の禮儀さへ辨へ知らぬ番僧連にはホトホト呆れ返つて、開いた口が早速に閉まらなかつた。そこで餘り業腹が立つので、

「幾ら番僧だつて葬式や婚儀にまで干渉する權利はありますまい。宗權を蹂躪するものだから、そんな事は答辨の限りではござらぬ」とキツパリ温順に言つて退けてやつた。さうするとこの頓馬番僧、その翌朝から毎日六ヶ敷御面相を遊ばし

て、宅の表に如意棒をブラ下げながら頑張つてござるが、いづれの目的がお在り遊ばすのか俺には合點がゆかない。又その番僧の非常識なやり方を遊ばすのは、何の理由だか知る由もないが、大喇嘛から叱られた時はなほ「一層酷しく首陀向上會をやつつける」といふ約束が番僧間の金科玉條とされてゐるのか、とも角にも不都合な話だ。實に吾々には迷惑のいたりだ。ウラナイバラニズムの好い見本だ。キキキキだ」

「ともかく一日も早く吾々の向上運動を進めて、根本的に大運動、いな荒料理のメスを振はなくては駄目だ。われわれ首陀信徒は自滅するより外に進むべき道はないのだ。何といつても黴菌を怖れ、難病を避ける醫學博士、毒蛇や毒草を避けて通る博物學者、テンデ貧乏人には接近しない活佛や、弱い者を虐める牧師の公々然として頭をもたげる暗黒世界だもの、況んや俗の俗たる婆羅門僧侶に於てをやだ。吾々はあくまでも婆羅門どもの根城を根本の土臺から轉覆させむ事には、信仰獨立權を保持することさへ六かしからうよ」

二人の三五信者なる首陀が、盛んに森蔭に腰を下ろして談じてゐる所へ、錫杖

をガチャつかせて悠然と現はれたのは、婆羅門教の宣傳使キューバーであつた。
二人は宣傳使の姿を見るより又もやバラスパイが来よつたな―と、にはかに話頭
を轉じて、

レール「この間死んだ俺の倅から幽冥通信があつたが、その音信に「地獄界は僧
侶や牧師ばかりで満員だ。普通の人間では殺人、放火ぐらいなもので、あまり罪
が軽すぎて滅多に地獄に入れては呉れない。しかし坊主や牧師ならその名稱だけ
でも幾人でも割り込むことが出来る」とのことだつたよ」

キューバー「君たちは今何を話してゐましたか、穩かならぬことを喋つてゐたや
うだなア。お前の姓名は何と言ふか、聞かしてもらひたいものだ」

レール「俺の名は俺だ、友人の名は友人だ。坊主はどこまでも坊主だ。オイ兄弟、
サア行かう」

と尻に帆かけて一目散に逃げ出した。キューバー（急場）に迫つた時は三十六計
の奥の手だと、頭を抱へてトントントンと畔路を倒けつ轉びつ走り行く。

かれ婆羅門教の宣傳使は、スコブツエンといふ一派の宗旨を開いた新婆羅門の

教祖であつて、婆羅門の大棟梁大黒主が意を承け、ひそかに第二の準備に取りか
かつたのである。大黒主は萬々一婆羅門教が、ウラル教または三五教に潰された
時は、スコブツエン教に身を托すべく、かれキューバーに數多の機密費を與へ、
かつ特殊の權利と地位を與へて、隱密の役目を申付けてゐたのである。故にかれ
キューバーは何の不自由も感ぜず、傲然として高く止まり、官民を睥睨しつつ天
下を横行闊歩してゐたのである。大足別將軍も、かれが特殊の地位にあることと、
絶大なる權威を大黒主に授與されてゐる事を知つてゐるので、抜目のなき大足別
は、キューバーに對しては色々と媚びを呈し、かつ彼の前に出でては、ほとんど
従僕のごとき態度をもつて望み、維命維從のみであつた。

さてキューバーが東地の都の大黒主の内命を受けて開いてゐる婆羅門教の別派、
スコブツエン宗は、由來難行苦行をもつて神に奉仕の誠を捧ぐるものと爲し、聞
くだに恐ろしき苦行の教團である。百千の苦行を信徒に向かつて強ひる點は、婆
羅門教と少しも異りはないが、ことに甚だしき苦行は、婦人がエマスキュレート
すなはち男性化の修業で、變性男子の願を立てて女性たることを脱せむとする事

が、最も重要とされてゐる。その方法には卵巢除去法と乳房除却法とがあつて、卵巢除去法の修業になると、百人の中九十九人まで生命を殞すに至る、實に慘酷なる修業であり、乳房除却法に至つては、白熱せる火箸をもつて婦人の乳房を焼き切るのである。かくした者に對して、教主および重役人が婆羅門大神へ奉仕を標章するため焼印を押す。これを熱火の洗禮と稱へてゐる。かくして切り落とされた乳房は聖壇に供へられ、これを捧げたる犠牲者は聖座に安置されて、神のごとくに崇敬されるのである。そして聖晚餐の食物中には、乳房の斷片が混ぜられ、會衆一同これを喫し終るや、犠牲者の周圍に熱狂せる舞踏が演ぜられるのである。その光景は實に凄慘きはまるもので、正しき神々の所爲でないことは之を見ても判るのである。およそ乳房は女性のシンボルであり、美のシンボルであり、また婦人生殖器の一部とさへ考へられてゐた。畢竟、婦人を代表するものは乳房だといふ觀念の下に立てられた邪教なのである。

印度に興つた宗教の説は概して、自我の世界は纏綿の世界であるとか、出纏の行と述ひ、無我と道ひ、空と謂ひ、解脱と曰ひ、涅槃と説つて、いはゆる轉迷開

悟に専らなる諸々の宗教が発生するだけあつて、土地と気温の關係の然らしむるためか、印度といふ國は恐ろしく美しい、かつ物凄く壯大な自然に包まれた、何百種かの人間が幾百種の階級を作り、幾百種の言語を使つてゐる國だけあつて、樹上に三年、石の上に十年も立つたり坐つたりしてゐたり、穴の中の逆立を三ヶ月間もつづけて修業するとか、水ばかり呑んで生きるだけ生るとか、木乃伊となるために冰雪の裡、岩角の上に食物を絶つて坐つて修行するといふやうな迷信、妄信、愚信、惡邪信の醜醜地であり、持戒、精進、禪定、忍辱などと八釜敷く叫びながらも、淫靡、不淨、懦弱で始末にをへない國民性である。それゆゑに自然の結果としてスコプツエン宗のごときものが發生し得たのである。

かれ教祖のキューバーは凄^{すこ}い眼^めをギョロつかしながら、レール、マークの二人の談話を耳敏くも聴き取つて、大黒主の國家を覆へすものと憂慮し、二人の逃げゆく姿を追跡せむと金剛杖を力に、一生懸命に焦慮出したのである。しかるに彼の二人は逸早くも山林に姿を隠し、谷川の水を掬つて咽喉を潤しながら、レール、マーク、オイ、マーク大變な奴に出會したものだないか。彼奴は大黒主の邸内に

數年前まで出入して、大黒主の御覺え目出度かつたといふスコブツエン宗の親王ぢやないか、下手に魔誤ついてみたら大黒主より重罰に處せられる危ないところだつた。あんな坊主が何故あれほど威張り散らしよるのだらう。何故あんな不完全全きはまる宗教が亡びないのだらうか

マーク「印度七千餘國には幾百の小さい宗教があるが、何れの宗教も完全なものは一つも無いにきまつてゐるよ。ことにあの宗教はことさら不完全きはまる未成品宗だから、命脈を保つてゐるのだ。凡て不完全なものには將來發達すべき餘地があり、未來があるのだ。完全は行詰りを意味し、結局滅亡の代名詞に外ならぬなのだ、アハハハハ」

「さうすると吾々の運動も成功せない未完成の間が、花もあり、香もあり、實もあり、世人からも注目されるのだな。アハハハハ」

「ナア二俺達はブルジョア宗教やラマ階級に壓迫され苦しめられ、明敏な頭腦が滅茶苦茶になつたので、チツとばかり小理窟を覺えてゐるのを利用して、實は滅茶苦茶な革正運動をやるやうになつたのだ。しかしかういふ頭惱でなければ、創

意創見は生れて来ないのだ。復古を叫ぶ人間は必ず覺明家だ。石火坊子團はすなはち石下坊主團だ。日露協約の結果は白雪までも赤化したぢやないか、アハハハ八。それだから吾々は天の表示を確信して驀地に進まむとするのだ。アア一日も早く吾々の目的を達成せなくては、到底われわれ三五信者兼首陀向上會員は身の置き所がなくなつてしまふわ。「白雪も日露協約で赤く化し」^ハ「^ハかくて兩人は又もやキューバーの悪口に花を咲かせ、不平の焰を燃やすをりしも、執念深いキューバーの窺ひ寄る姿が木の間を透かしてチラチラと見え出したのに肝を潰し、尻はし折つて山林深く逃げ出してしまつた。

(大正一四・二・一三 舊一・二一 加藤明子録)

第二章 折衝戦(一七六九)

トルマン城の會議室には、王のガーデンを始め、王妃千草、左守司フーラン、

右守司スマンチーの首脳部が首を鳩めてヒソビソ重要會議を開いてゐる。

ガーデン「エー、左守、右守の兩人、突然重大問題が勃發したので、汝等兩人を急使をもつて引寄せたのだが、其方の知恵を貸してもらひたい。トルマン國にとつては國家興亡の一大事だから……」

左守右守は一度にハツと頭を下げ、畏まつて、王の第二の發言を待つてゐる。

王は目をしばたたきながら、

「外でもないが、昨夜半ごろしきりに門戸を叩く者あり。門番のタマ、タルの兩人よりの急使により、寢所を立出で、應接間に至り見れば、大足別將軍の使者と稱し、このごろ淫祠邪教を、わが國內に布教宣傳いたしをるスコブツエン宗のキユーバーと申す妖僧、吾が面前をも憚らず威丈高となり、……貴國は從來ウラル教を奉じ、國政の補助となしをらるる由、もはや命脈の絶えたるウラル教をもつて、人心を収めむとするは危険此の上なかるべし。このたび大足別將軍、大黒主の天命を奉じ、印度七千餘國をスコブツエン宗に改宗せしむとの御上意、天下萬民を塗炭の苦より救ひ、安養淨土に蘇生せしめむとの有難き御心なれば、謹んで

お受けなされ。萬一違背に及ばば、仁義の軍は忽ち虎狼の爪牙を現はし、トルマ
ン城を屠り、王を始め、一般民衆の目をさまし呉れむ。王の御答辨如何に依つて、
國家の安危の分る所、速やかに返答召され……との強談、その暴状は言語に絶
し、立腹のあまり卒倒せむばかりに存じたが、いや待て少時何とかか此場の
言葉を濁し、汝重臣どもに親しく協議を遂げ、其の上諾否を決せむと、キューバー
に向かひ、三日間の猶豫を與ふべく申し渡せしところ、かれ妖僧の勢ひ、なかな
か猛烈にして、首を左右に振り、……只今返答承らむとの嚴談、假にも一國の主
権者が、わづか一人の妖僧に壓迫さるべき理由なし。さりながら、ただ一言の下
に叱咤せむか、彼は時を移さず、大足別の軍を率ゐて當城を十重二十重に取圍ま
んず鼻息、残念ながら千言萬語を費やし、一日の猶豫を請ひ、返答すべき事に
たしておいた。左守、右守殿、如何いたさば可からうかな」
左守「何事かと存じ、取る物も取り敢ず、登城致し、承れば容易ならざる出來事
でござります。假にも一天萬乗の國王殿下に對し、素性も分らぬ怪僧の暴言、聞
捨てなり申さぬ。最早この上は折衝も答辨も無用でござります。速やかに國內の

兵を集め、大足別の軍勢を殲滅いたし、國家の災を芟除いたたく存じます』
王「なるほど、汝が言、餘の意に叶へたり。サア、一刻も早く募兵の用意をいたせ。城内の兵士にも嚴命を下し、防備の用意に取りかからしめよ』
左守「ハイ、殿下の御上意、謹んでお受け致します。右守殿、貴殿は一刻も早く國內に傳令使を派し、國家の危急を救ふべく軍隊をお集めなさい』
右守「これはこれは左守殿のお言葉とも覺えぬ。左様な無謀な戦ひをいたして、天壤無窮のトルマン國を亡ぼす左守殿の拙策。最早なくなる上は、暫時キューバーの意見に従ひ、王家を始め、國民一般、彼が唱ふる宗旨に歸順せば、天下は無事泰平、國民は塗炭の苦より免れ、仁君と仰がれ給ふでござらう。萬々一雲霞のごとき大軍を向方へ廻し、全敗の憂目に會はば、萬劫未代取返しにつかざる大失敗でござらう。殿下を始め左守殿、ここをトクとお考へ下され。王家のため、國家のため、右守身命を賭して諫言仕ります』
王「此場に及んで、卑怯未練な右守の言條、國帑を消費して、平素軍隊を養ひおきしは何の爲だ。かかる國難に際し、擧國一致的活動をなし、外敵を防ぐべき用

意のためではないか。かかる卑怯未練な魂をもつて、優勝劣敗の現代、殊に七千餘國の國王は各軍備を整へ、虎視眈々として、國防に餘念なき此際、祖先傳來のウラルの神の教を放擲するときは、神の威嚴を損ひ破り、御無禮この上なく、却て國家の滅亡を早めるであらう。このトルマン國はウラルの神の厚き守護あり、何を苦しんで、かかる妖教に腰を曲げむや。しつかりと性根を据ゑて、所存の臍を固めよ」

右「君の仰せではございまするが、この際よほど冷靜にお考へを願はねばなりませんぬ。取返しのつかぬ事でございますから」

王「しからは汝の意見は、何うせうと言ふのだ、腹藏なく申して見よ」

右「ハイ、恐れながら申し上げます。敵は目に餘る大軍、城下近く押寄せ來たる此の際、遅れ走せに軍隊を召集すればとて、何の役に立ちませうぞ。城内の守兵はわづかに五百人、敵の總勢三千騎、國內全部の兵員を集めたところで、やうやく二千五百人ではござらぬか。五百人の兵をもつて三千人の精銳に當るは、あたかも螳螂の斧を揮つて龍車に向かふがごときものでござります。國內の總動員を

行ひ、いよいよ戦鬪準備の整ふまでには、なにほど早くとも三日間の時日を要します。さすれば、既に既に戦争の濟んだ後、六菖十菊の無駄な仕業と存じます。かかる見易き道理を無視し戦ふにおいては、國家の滅亡、風前の燈火よりも危うございます。なにとぞ此の際右守の進言を御採用下さらば、國家のため、實に幸福と存じます」

千草姫「王様をはじめ左守右守殿の御意見を承れば、何れも御尤も千萬、しかしながら妾は右守の説をもつて、最も時宜に適した方法と考へます。殿下なにとぞ、右守の説を御採用あらむ事をお願いいたします」

王「馬鹿を申せ、其方までが夫の説を抹殺せむと致すか。其方の平素の舉動は腋に落ちぬと思つてゐた。國家滅亡の原因は女性にありといふことだ。殷の紂王が國を失うたのも矢張女性の横暴からだ。女童の知る事でない、下がりをらうツ」

と百雷の一時に落下したるとき怒聲、千草姫は縮み上つて顔色蒼白となり、其の場に慄ひつつ倒れてしまった。王はこの有様を目にもかけず、尚も言葉を續けて、

「ヤ、左守、最早かうなる上は、餘と汝と兩人力を併せ、外敵を殲滅いたさう。餘は之より陣頭に立ち、三軍を指揮するであらう。サ、左守、其の準備に取りかかれよ」

左「年は寄つても、武術をもつて鍛へたこの腕つ節、たとへ大足別の軍勢、百萬騎をもつて押し寄せ來たるとも何かあらむ、盤古神王の御神力を頭に頂き、八岐大蛇の惡魔の守る大足別が軍勢を、千變萬化の秘術をもつて驅け惱まし、奇兵を放つて殲滅しくれむ。いざ右守殿、用意を召され」

右「これは心得ぬ御兩所のお言葉、薪に油を注ぎ、これを抱いて火中に投ずるとき危険きはまる無謀の抗戦、いかでか功を奏せむ。先づ先づ思ひ止まらせ給へ」

王「左守、右守のごとき逆臣を相手にいたすな。千草姫は平素餘が目をぬすみ、右守と……を結んであるといふことは、某々等の注進によつて、一年以前より餘は承知してゐる。かかる逆賊を城内に放養するは、あたかも虎の子を養ふに等しからむ。一時も早く縛り上げよ」

千草「王様のお情けないお言葉、決して決して妾は左様な疑ひを受けやうとは夢

にも存じませぬ。良薬は口に苦く、忠言は耳に逆らふとかや。右守殿は王家のため國家のため、命を捧げてをります。時代の推移を明知し、政治の大本を辨へる者は、右守をおいて外にはございませぬ。今日の世の中は、よほど變つてをります。徒に舊套を墨守し國家を立てむとするは愚の骨頂でございます。何者の誣言かは存じませぬが、妾に對して不義の行爲あるがごとく内奏いたすとは、言語道斷、不忠不義の曲者、かかる亂臣賊子の言にお耳を傾け給はず、妾が進言を冷靜にお考へ下さいませ。最早かくなる上は周章狼狽も何の効果もありません。落ちついた上にも落ちついて、國家百年の大計をめぐらさねばなりません。王、汝こそ、金毛九尾の靈に魅せられたる亡國の張本人だ。綸言汗の如し、一度出でては再び復らず。汝がごとき亡國の世迷言、聞く耳持たぬ」

と立ち上り、弓矢を執つて、左守と共に立出でむとする。かかる所へ、スコブツエン宗の妖僧キューバーは數十人の武装せる兵士に守られながら、悠悠と現はれ來たり、

「スコブツエン宗の大棟梁キューバー、大黒主の命により、大足別の軍を率ゐて

向かふたり、速やかに返答いたせツ

と呼ばはつてゐる。千草姫、右守司は矢庭に玄關に走り出で、

千草「これはこれは、御神徳高き救世主様、よくこそお越し下さいました。仁慈

無限の大黒主の思召し、何條もつて反きませう。祖先以来のウラル教を放擲し、

貴僧のお言葉に従ひ、スコブツエン宗に國內擧つてなりませう。どうか軍隊をも

つて向かはせらるるは穩かならぬお仕打ち、兵を引上げ下さいませ。妾が身命を

賭して、お請合ひ申し上げます

キユ「アハハハハハハ、さすが頑強なガーデン王も往生いたしたか、左守はどう

だ。異存は無からうか、兩人の確かなる降服状を渡してもらひたい。さもなくば

大黒主様、大足別に對しても、愚僧の言譯が立ち申さぬ。サ、早く屈服状をお渡

し召され

かく話してゐる内に、ガーデン王、左守は兵營に走り行き數多の將士に嚴命を

傳へ、敵を撃退すべく準備に取りかかつてゐた。キューバーは王を始め左守は奥

殿に戦慄し、蚤のごとく蝨のごとく寢所に忍んでゐるものとのみ慢心して氣を許

し、降服状を受取らむと應接の間にどつかと尻をおろし、椅子にかけ茶を啜りつつ、

「アハハハハ、これこれ千草姫殿、右守殿、大黒主の御威勢は大したものでござらうがな。そなたの計らひ一つによつて、このトルマン城も無事に助かり、耄碌爺のガーデン王も、左守のフーランも先づこれで首がつけなげるといふもの、まづまづお目出たう存ずる」

千草姫は王や左守の主戦論者たることを悟られては一大事、何とかして二人の我が折れるやうと、心中深く祈りつつ、素知らぬ顔にて、

「キューバー様、あなたはトルマン國に對し、救世の恩人、億萬年の後までもこの御恩は決して忘れませぬ。これこれ右守殿、王様はじめ左守その他の重臣に、此の由をお傳へ下さい。キューバー様は妾が御接待申してゐるから……」

右守は千草姫の心を推知し、この間に王および左守の心を和らげ、後はともかくこの場合キューバーを欺いて、歸順したごとくに見せかけ、徐に策をめぐらさむと、王の居間に入つて見れば藻脱けの殻、コラ大變と軍務署へかけつけて見れ

ば、既に城内の兵士は武装を整へ、王もまた甲冑をよろひ、槍を杖について、今や、一齊に總攻撃に出でむとする間際であつた。

右「もしも殿下、話は甘く纏まりました。どうか暫くお待ち下さいませ」

王「キューバーが降服したのか、如何まとまつたのだ」

右「ハイ、キューバーは數十の精兵を引連れ、嚴然と控へてをります。それにもかかはらず、大足別の大軍は今や返答次第によつて、本城を屠らむとしてをります。一時敵を欺いて、油断させ、其の間に國內の總動員を行ひ、城の内外より挟み撃ちにするのが、軍術の奥の手と存じ、詐つてスコブツエン宗に降伏いたしておきました。何とぞ何とぞ武装を解き、左守殿と共にキューバーにお會ひ下さいませ」

王はクワツと怒り、

「不忠不義の曲者右守奴、吾が許しもなく勝手に左様な國辱的行動をなすとは、鬼畜に等しき其方、もはや勘忍ならぬ、覺悟せよ」

と言ふより早く、槍をしごいて、右守の脇腹に骨も徹れとつつ込めば、何條もつ

て堪るべき、右守はその場にドツと倒れ伏し、虚空を掴んで息絶えてしまった。
王「アハハハハハ、首途の血祭りに國賊を誅したのは幸先よし。サ、これより千草姫、キューバーの兩人を血祭りにせむ」
と言ひながら、左守に軍隊を監督させおき、自ら數十名の精兵を従へ、應接間を指して勢ひ猛く出でて行く。

千草姫は何となく、形勢不穩の氣がしたので、キューバーに對し秋波を送りながら、密室に伴ひ、ドアの錠を中から卸し、聲を忍ばせながら、王はじめ左守の強硬なる意思を傳へ、キューバーの身の危険なる事を告げた。千草姫は決して右守司と醜關係を結んでゐなかつた。ただ國家を思ふ一念より、時代を解する彼を厚く信じてゐたのみである。知恵深き千草姫は、たとへ一時キューバーを亡ぼすとも、後には大足別控へをれば、最後の勝利は覺束なし。若かず、キューバーの歡心を買ひおき、國家の安泰を守らむには……と、自分が國內切つての絶世の美人たるを幸ひ、彼を藥籠中の者としてしまつたのである。暴惡無道のキューバーも千草姫の一瞥に會うて骨まで和らぎ、まんまと姫の術中に陥つたのは幸か不幸

か、神かみの審判さばきをもつて處決しよけつさるるであらう。

（大正一四・八・二三 舊七・四 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録）

第三章 戀戰連笑（一七七〇）

千草姫ちぐさひめはキューバーを一室いつしつに伴ともなひ行き、あらゆる媚こびを呈ていし彼の心かれ膽しんたんを蕩とろかし、すべての祕密ひみつの泥どろを吐はかしまむと百方ひやくぱう盡力じんりよくしてゐた。キューバーは千草姫ちぐさひめの美貌びぼうを見て天津乙女あまつをとめかエンゼルか、ネルソンパターか楊貴妃やうきひか、小野をのの小町こまちか照手姫てるてひめか、平和へいわの女神めがみかとドングリ目を細ほそうし、眉毛まゆげや目尻めじりを七時しちじにじふ五分ごふん過すぎにさげおろし、口角こうかくよりねばつたものをツーツと、ほし下くだしの藝當げいたうを演えんじ、ハンカチーフにてソツと拭ぬぐひながら、茹章魚ゆでたこのやうになつてその美貌びぼうに見惚みとれてゐる。もう、かうなる上うへは千草姫ちぐさひめの一顰いつびん一笑いつせうはキューバーの命いのちさへも左右さいうする力ちからがあつた。キューバーは自分じぶんの目的もくてきや大足別おほだるわけとの經緯いきさつもスツカリ忘れて、ただ宇宙間うちうかん、神かみもな

く佛もなく、大黒主もなく、天も地もなく、ただ、目にとまるものは、艶麗なる
千草姫、耳に聞こゆるものは姫のなまめかしい玉の聲のみとなつてしまつた。
千草「もうし、救世主様、あなたは何とした立派なお方でござりませう。なにほ
ど盤古神王様が御神力があると申しても、大國彦様がお偉いといつても、已にす
でに過去の神様でござります。どんなに手を合せても、ウンともスンとも言つて
下さいませぬ。それに何ぞや、天來の救世主の君に親しくお目にかかり、天の御
聲をそのまま聞かしていただく妾は、何といふ幸福でせう。あなたのお姿を靈的
に窺はしてもらひますれば、玲瓏玉のごとく、金剛石のごとく、お身體一面にキ
ラキラと輝いてゐます。妾は目も眩みさうでござりますわ。そして貴方の玉の御
聲、一言聞いても皆、妾の肉と力になつてしまふのですもの。何といふ立派な神
様が現はれなされたものでせう。どうかキューバー様、この結構な玉のお聲を、
妾以外のものに聞かしてもらつちやいやですよ。この結構なお姿を世界の人間の
目に入れちや困りますよ。アーア儘になるなら三千世界の人間をみな盲にしてし
まひたいわ。そして世界中の人間の耳を木耳にしたうござりますわ。ねーあなた、

戀しきキューバー様こひ さま

とあらむ限りの追徒を竝べたて、蕩けた奴をなほなほ蕩かさうとする。あたかも骨のない章魚に蕎麥粉をかけたやうにズルズルになつてしまひ、口から涎を出す、オチコから「はな」を垂れる、千草姫の玉の肌はだに觸れぬ中から、キューバーは五つの穴から體の肥汁を搾取され、秋の夕暮れの霜をあびたバツタのやうになつてしまつた。

キユ「これ千草姫、俺を、どうしてくれるのだ。これでもスコブツエン宗の教祖大黒主の片腕、三千世界を一目に見透すマハトマの聖雄だ。俺の骨まで筋までグニヤグニヤにしてしまふとは、本當に凄腕前ぢやないか」

「ホホホホホ、あの、マア、キューバー様のおつしやいますこと。大黒主の片腕だとか、救世主だとか、そんな「ちよろこい」靈では、貴方はござりませぬわ。棚機姫の化身として、玉の御舟黄金の楫を操り、トルマン國へ天降つて來たこの千草姫を、マルツキリ蒟蒻のやうにしてしまふといふ、あなたは凄腕前、いな立派な男前、女殺しの罪なお方、妾は晝とも夜とも、西とも東とも判別がつか

なくなりました。惚れた弱味が知れませぬが、あなたの鼻息の出やうによつて妾の生命に消長があるのですもの。妾が可愛いと思召すなら、どうぞ長生をさして下さいや。刃物持たずの人殺しは嫌ですよ。スコブツエン宗の法力によつて、あなたと一緒に千年も万年も不老不死で暮したうござりますわ」

「エツへへへへよしよし、お前と俺とさへ幸福になれば、世の中は暗にならうと、潰れやうと、そんな事は頓着ないわ。天下無雙の美人だと思つてゐたらその筈、お前は棚機姫の天降りだったのか。いかにも、どこともなしに氣品の高いスタイルだ。天下の幸福をお前と俺と二人して独占すればいいぢやないか。もう、かうなれば大黒主もへツタクレもない。俺の決心は動かないから安心してくれ。千草姫、あまり俺だつて憎うはあるまいがな、エツへへへへ」

「オツホホホホと高く笑ひ、

「この夫にしてこの妻あり、お日さまにお月さま、お天道さまにお地球さま。キユーバーさまに千草姫。猫に鯉節。これだけよう揃うた夫婦が三千世界にござり

ませうかね」

「アツハハハハハハ、こいつは面白い。人間も一生に一度は幸運に出會すといふことだ。このキューバーも大神の御利益によつて初めての安心立命を得た。其方は俺に對して大救世主だ。彌勒如來だ、メシヤだ、キリストだ、瑞の御靈だ。お前をおいて救世主が何處にあらう。お前と俺と二柱、天上高く舞ひ上り、天の浮橋に乗り、大海原に漂へる國々の民を安養淨土に助けてやらうぢやないか。どうだ姫、よもや異存はあるまいな」

千草「いやですよ。最前も言つたぢやありませんか。あなたの姿は妾以外に見せるのは嫌ですよ。玉の御聲は妾以外に聞かすぢや嫌ですよ。あなたは氣の多いお方だから、三千世界の蒼生にまで、この尊いお姿を拜ましてやり、そして慄いきたいほど味のある、天人の音樂にも勝る玉の御聲を、萬人にお聞かせ遊ばすお考へでせうが、その御聲は妾一人が聞かしていただく約束ぢやござりませぬか」

「これ、千草姫、お前もなかなか「したたか」者だな。やさしい顔をしてをつて、あまり欲が深過ぎるぢやないか。このキューバーは天下萬民を救ふため天降つて、

來たのだ。それでは、少し天の使命に反くといふものだがな」

千草姫は故意とプリンと背を向け、

「ヘン勝手にして下さいませ。妾は、もう死にますから、（泣聲）オーンオーン

オーンオーン」

「これこれ千草姫殿、さう怒つてもらつちや困る。お前の悪い事いつたのぢやなし、マア、トツクリと俺の言ふ事を聞いてくれ。世界萬民に對して愛を注がうといふのぢやないからな」

「エー、知りませぬ。妾のやうなお多福は到底、お氣に入りますまい。ウォーンウォーンウォーン」

「アツハハハハハ、ちやうど芋蟲のやうだ。プリンプリンと右と左へ、お頭をお振り遊ばすわい。これ姫さま、さう悪く思つちやいけない。マア、トツクリと俺の腹の底を聞いて下さい」

千草姫はまたもやプリンと體を廻し、ペタリと地上に倒れ、左右の袂で顔を被ひながら、

「ハイ芋蟲でござります。芋蟲は芋助の厄介になればよいのです。分相應といふ事がござりますからね、アーンアーンアーン」

「何とマア、ヒステリックだな。芋蟲といったのが、それほどお氣に觸つたのか」

「ハイ妾は芋蟲でござりませう。あなたの目から御覽になつたら、雪隠蟲のやうに見えませう。エーくやしい、アーンアーンアーンもう知りませぬ知りませぬ。妾のやうな者は此世にをりさへせなかつたら、いいんですわ。氣の多い貴方のやうなお方に戀慕して、惱殺されるよりも、體よう舌をかんで死んだがましでござりますわい、ウオーン ウオーン」

「コーレ、姫さま、トツクリと聞いて下さい。このキューバーを可愛いと思召すなら、さう氣をもまさずにおいて下さい。どうやら俺の方が惱殺されさうになつて来た。エー、泣きたくなつて来た。一つ惚れ泣きを思ふ存分したいと思つたのに、姫から先鞭をつけられたので大變な損をした。こちらから御機嫌を取らにやならぬやうになつて来たわい。アーン、戀もなかなか竝みや大抵で成立しないものだな」

「キューバーさま、あなた本當にひどい人ですわ。妾を泣かして泣かして焦れ死にさそうと思つてゐなさるのでせう。サアどうぞ殺して下さい。頭の先から爪の先まで、あなたに任したのですから、もうかうなりやお屁一つ弾じる勇氣もござりませぬわ」

「俺だつて、お前のために鰻の蒲焼ぢやないが、背骨を斷ち割られてしまつたやうだ。これだけの心盡しをチツともお前は汲みとつてくれないのか」

「エー残念やな残念やな。あなたこそ、妾の心を汲みとつて下さらないのだものと言ひながらキューバーの顔を目がけて一寸ばかりも伸ばした爪を、無遠慮に額から胸先かけて、ゲリゲリと二三べん掻き下ろした。」

「アイタツタタタタ、これ姫、無茶をすない。顔一面に蚯蚓脹れが出来るぢやないか。こんな事されちや外分が悪くて、外出できはせぬわ」

「そりやさうですとも。外の女に顔を見せないやうに意茶つき喧譁の印を、尊き尊き可愛いお顔につけておいたのですもの。これでも妾の心底が分りませぬか」

「アハハハハハハ、アイタツタタタ、笑ふと顔の筋が引張つて、アツハハハハ

八、アイタツタタタタタ、ひどい事をする女だな、お前は

「そらさうでせうとも。相見互ひですわ。妾の命を貴方に捧げたのですもの、あなただつて妾に生命を呉れるでせう。薄皮くらゐむいたつてそれが何です。小指一本貰ひませうか」

「そりや小指の一本くらゐお前のためにや、やらぬ事はないが、神さまから與へられた完全の體を傷つけるには及ばぬぢやないか。それよりも俺の魂を受取つてくれ。魂が肝腎だからのう」

「あなたの魂をやらうと仰有つたが、どうしたら下さいますか」

「俺の魂といふのは眞心だ。言心行の一致だ」

「そんなら、どうか眞心を表はすために、何でも言ふ事、聞いて下さるでせうな」
「ウン、聞いてやる。お前のためにや、生命でも何時でもやるのだ」

「千草は嬉しさうな顔してニタニタ笑ひながら、
「キユーバー様、あなたの眞心が分りました。嬉しうござりますわ。これで暗が晴れました」

と何ともいへぬ愛嬌の滴る眼光に露を含んでキューバーを注視した。キューバーはこのニコリと笑った千草姫の顔にますます夢現となり、垂涎瀧のごとく「エツへへへへ」と顔の紐まで解いて、清水焼の布袋の出来損ひのやうな面になつてしまつた。

千草「サア、キューバー様、今妾に何時でも命をやらうと仰有いましたね」

キュー「ウン、たしかに言ふた。俺も男だ、やると言ふたらやる。お前の事だつたら何でも聞いてやる。たとへ大黒主の命令に反してもお前の命令には反かぬからのう」

「アアそれ聞いて安心しました。サア早速命を頂戴しませう」

と懐剣をスラリと引き抜き身構へする。さすが惚けきつたキューバーも短刀を見るや、本當に命をとられるのかと蒼くなり慄い聲を出しながら、

「待つた待つた、ソウ氣の早い、お前に命をやつてどうするのだ。俺が死んだら俺の綺麗な顔を見ることも出来ず、俺の玉の聲を聞く事も出来ぬぢやないか。戀に逆上せるのもいいが、そこまで行つちやいけないうよ、マア、チツと氣を落ちつ

けたらどうだ」

「戀愛の眞の味はひは生命を捨てる處にあるのですよ。涙から眞の戀愛が生れるのですもの、あなたは命をやらうといひながら、なぜ實行をして下さらないのですか。言心行一致と申されましたが、ヤツパリ妾を、かよわき女だと思つて、お騷り遊ばしたのですか、エー悔しい悔しい、残念やな残念やな」

と短刀を、其の場に捨てて泣き伏す。

キユーバーはヤツと安心し、胸を撫で下ろしながら、

「アツハハハハハハ、面白い面白い、戀愛もここまで出て來ぬと、神聖味が分らぬわい。何と可愛いものだな」

「あなたは妾を騙してそれほど面白うござりますか。そら、さうでせう。三千世界の女を皆、濟度しようと仰有るやうな氣の多いお方ですもの。言心行一致が聞いて呆れますわ」

「今の人間は心に思はぬ事でも口で言ふぢやないか。このキユーバーは三千世界の救世主だ。決して心にならない事は言はない。今の人間は口と心と行ひが一致せぬ

と毛ダラケの岩のやうな眞黒氣の手をソツと握る。

「オイ、姫、モチト確り握つてくれ。どうも頼りないぢやないか。そんなやさしい握り方では、どうしても戀愛の程度が分らないわ」

「ハイ、そんな事仰有いますと、お手が碎けるほど握りますよ」

「ヨーシ俺の息がとまるどころまで握つてくれ、ハツハハハハハハハ」

と又もや口から粘液性の、きつい絲を垂らしてゐる。千草姫は柔道の手をもつて脈處を力限りにグツと握りめた。キューバーは「ウン」と一聲眞蒼になつて、その場に平太てしまった。千草姫はニツコと笑ひ、

「ホホホホホ、この悪魔奴、かうして置けば暫らく安心だ。たうとう氣絶したやうだわい、ホツホホホホホ」

城の内外には激戦が始まつてゐると見え、ドンドンキヤアキヤア、と陣馬の轟く聲、飛道具の音、刻一刻と高まり來たる。

(大正一四・八・二三 舊七・四 於由良秋田別莊 北村隆光録)

第四章 共倒れ（一七七七）

太子のチウインは妹のチンレイおよび右守の娘ハリスと共に、初めてキューバーが談判に來た時ソツと物蔭より様子を聞き、容易ならざる大事件となし、ガーデン王や左守には内密にて、妹のチンレイおよび右守の娘ハリスと夜中しめし合せ、王命といつはり全國の兵員を召集すべく、腹心の部下に命を下した。

一方ガーデン王、左守は、城内五百の兵に武装をさせながら、敵軍押し寄せ來たらば、ただ一戦に粉碎しくれむと部下を督勵して、士氣の鼓舞に全力を注いでゐた。大足別將軍は三千の兵を率ゐて、城下まで押し寄せて來たが、キューバーを守りたる數十騎の注進により、殿内深くキューバーの入り込みしことを知り、徒に戦端を開き、キューバーの生命を失つては大變だ、大黒主に如何なるお目玉を頂戴するかも知れない。古今無雙の英雄豪傑キューバーには、何か深い策略があつて、ただ一人城内に入り込み、樽俎折衝の間に圓満解決の曙光を認むべく活動してゐるのだらう。まづキューバーの命令の來るまで、總攻撃をしてはならぬ、

……と部下を嚴重に戒め、キューバー警護の意味にて三日三夜滞陣してゐた。ガー
デン王、左守は、千草姫の姿が見えなくなつたのは、右守の最後を聞き、禍ひの
身に及ばむ事を恐れて逃げ出したのだらう……くらゐに考へ、軍備の方に全心を
集注し、千草姫が秘術を盡しての善戦善闘も気がつかなくなつた。

さてキューバーは半時ばかりして息を吹き返し、團栗眼を「ぎろつかせ」千草
姫の顔を見て、

「ヤア、お前は千草姫ぢやないか。かよい腕をしながら俺の脈處を折り悪しく
掴みよつて、ドえらい目に會したぢやないか。俺は暫くの間、幽冥旅行をやつて
ゐたよ。掴むといつても餘りひどいぢやないか」

千草姫「ハイ、妾どんなに心配したか知れませぬわ。あなたの御命令を遵奉し、
カーぱい握りましたら、あなたはウンといつた切り、何といつても返事して下さ
らないのですもの。大變怒つて返事して下さらないと思ひ、早速バラモンの神様
に水垢離取つて御祈願したところ、やつと物いつて下さつたのですもの。幽冥旅
行したのなんと本當に腹の悪いお方よ。半時ばかりも妾に怒つて物を言うて下

さらないのですもの」

「いや、本當に氣絶してゐたに違ひない。決して噓は言はない。これから手を握るのなら指の先を握つてくれ。脈處を握られると困るからな」

「世界の救世主様が妾の細腕に握られて氣絶なさるといふやうな道理がどこにございます。噓ばかりおつしやいます。ホホホホホ」

「本當にそれやさうぢや。實は氣絶したのぢやないよ。お前の心底を考へるためにあんな眞似をしてゐたのぢや。何をいつても三千世界の救世主だ。そんな「へどろい」ことでどうならう」

「ホホホホホ、ほんとに甚いお方、人の氣を揉ましてひどいわ」

とまた手首を握らうとする。キューバーは吃驚して手を引き、

「ヤ、もう手は一度握つたらよいものだ。それよりも今度は俺が握つてやらう、サア手を出したり手を出したり」

「どうか息が切れるところまで握つて頂戴な。一ぺん八衢の状況を見て來るところまで……。さうして冥官に會ひ、貴方と妾と永久に暮すべき蓮座を教へてもら

つて来たうございますわ。天國の満員にならない中に、特等席を豫約して置きたうございますから」

「ハハハハハ、おい姫さま、このキューバーの手がお前の手に觸るな否や本當に氣絶してしまふよ。それでもよいか」

「よろしうございますとも、たとへ殺されても私の體ぢやございませぬ。あなたに捧げたものでございますもの、あなたの命も同様ですわ」

キューバーは心の中に……この女なかなか手がよく利いてをる、柔術の極意に達してをるらしい。俺も力一杯握つて氣絶させ、八衝を覗いて來るところまでやつておかねば、將來威張られちや耐らない。夫の權式がさつぱり【ゼロ】になつてしまふ。よし、また力一ぱい急所を握り、俺の腕前を見せておかねば將來嬪天下になり、湯卷の紐で縛られるやうになるかも知れない。ここが千騎一騎の戀の【かけひき】だ……と、毛だらけの手を【ぬつ】と突き出し、姫の眞白の【なま】竹のやうな手を骨も砕けとヒン握つた。千草姫はキューバーの心の底まで直覺してゐるので、なにほどキューバーが力を籠めて握つても痛くも何ともない、

眞綿が觸つたやうな氣がしてゐる、見かけによらぬ剛の者であつた。しかしわざと氣絶した體を装ひ握られた刹那、「ウーン」と顔を顰めて其の場に倒れてしまつた。

キューバー「ハハハハハハ、さすがは女だな。たうとう屁古たれてしまひよつた。かうして半時ばかり幽冥界を覗かしておけば、氣がついてから俺の神力に感服し、ぞつこん惚れこむだらう。エへへへへへ、これだけ俺に惚れこんでをるのだから、大足別の軍勢に一時この城を屠らせ、ガーデン王や、左守、右守を征伐し、太子やその他の重臣を重刑に處し、このキューバーが取つて代つてトルマン國の淨行兼刹帝利となり、天下無雙の姫を女房となし、數千萬の財産を横奪して天晴れ城主となり、大黒主の向かふを張つて、七千餘國の覇者となつてやらう。アア面白い面白い、開運の時節到來、智謀絶倫にしてその膽力は神のごとく、鬼のごとしとは俺の事だわい、エへへへへ。ヤ何だ、大變な物音ぢや、どうれ一つ外へ出て様子を考へやう」

と、ドアを外さむとしたが、祕密の錠が卸してあるので、千草姫でなければ開け

ることが出来ない。さすがのキューバーも當惑してゐる。外には暫く城内と城外との小耀り合ひがあつたが、用心深い大足別はキューバーが城内に潛入しをる事を聞き、戦ひを中止して、キューバーの様子を偵察せむと焦慮してゐた。それゆゑ戦ひは半時足らずに止んでしまつた。大足別は三千の軍隊をもつてトルマン城を十重二十重に取りまいてゐる。ガーデン王もこの敵の大兵を遠く眺めて、打つて出づる勇氣もなく、援兵の來たるまで差控へむと矛を磨いて警戒してゐた。

この時チウイン太子の近侍が、王の傍に來たり、恭しく敬禮しながら、
「太子様より殿下に奉れよとの御命令にて、お預かり申してをりましたこの御書面、お受取り下さいませ」と差出す。

王「なに、太子がこの書面を餘に渡せたと云つたか。あまり周章狼狽の結果、太子の事を忘れてゐた」
と言ひながら慌ただしく封押し切り眺むれば、左の如き文面が墨痕淋漓として認めてあつた。

ひとつ今夕、父を訪問いたしたるキューバーなるものは、大足別將軍としめし合せ、本城を占領し、吾が王家を覆へさむと謀るものに候へば、この際一刻の猶豫も相成らず候。小子は父および左守に協議いたすも、たうてい六ヶ敷かしからむと存じ、妹チンレイ、および右守の娘ハリスとしめし合せ、國內の總動員をなすべく、吾が臣下を諸方に派遣し、小子もまた出城して大足別の軍を後方より攻撃いたすべく準備に取りかかり申し候。故に小子が總司令官となつて軍隊を編成し、城下に歸り候まで、決して敵と戦端を開き給ふべからず。一時たりとも時間を延ばし、吾が軍の至るを待たせ給ふやう、偏に懇願仕り候。

國難救援軍總大將

トルマン國太子

チウイン

御父ガーデン王様、左守、右守殿

と記してあつた。ガーデン王は、この書面を読み終るや、さも満足の色を現はし、左守に向かひ、言葉も勇ましく、
「アイヤ左守殿、喜んでくれ。太子は已に兵を召集し、近く歸つて來る様子だ。」

それまでは戦ひを開くなとのこと。さすがは俺の倅だけあつて、軍略にかけたら旨いものだらうがな」

左守「なるほど允文允武に渡らせらるる太子様、老臣も恐れ入つてございます。太子様の神軍が城下に近づくを待ち、城内より一齊に打ち出し、大足別を挟み撃ちいたせば勝利を得ること磐石をもつて、卵を碎くに等しからむと存じます。アア勇ましや勇ましや」

と老臣の左守は王の手を執つて雄健びし、部下またこの様子を見て士氣にはかに振ふ。かかるところへ千草姫の侍女は一通の封書を携へ、王の前に恭しく捧げた。この密書は千草姫、キューバーの手を握り氣絶させおき、その間に認めたものである。王は訝かりながら、

「なに、千草姫の手紙とな、かれは既に右守の難を聞き城内を脱出せしものと思ひしに、ハテ不思議」

と手早く封押し切つて見れば、左のごとき文面が水莖の跡麗しく記されてあつた。

重大なるお疑ひを受けし千草姫より一大事を申し上げます。何とぞ何とぞ心を落
着けてお読み下さいませ。スコブツエンのキューバーなる者、一ヶ月前より本城
を屠らむと大足別としめし合せ、種々劃策を廻らしてをりました事は、右守のス
マンヂー軍事探偵の報告によりこれを前知し、太子チウイン、王女チンレイ、右
守の娘ハリスと共に千草姫も加はり、應戦の準備に取りかかるべく國內の調査を
密々始めてをりましたところ、兵役に立ち得べきものは漸く二千五百名。萬一の
時の用意にと國內一般に王の命と稱し、軍隊教育を施しおきましたところ、いよ
いよ戦はねばならなくなつて参りました。しかしながら大足別の大軍は既に城下
に迫りを取りますれば、今日かれと戦ふは不利の最も甚だしきものと存じ、大黒主
の信任最も厚く、大足別の謀主と仰ぐキューバーをある手段をもつて捕へおきま
した。やがて太子は全軍を率ゐて城下に迫る事と存じます。それまでキューバー
を私にお任せおき下さいませ。大足別が未だ砲火を開かざるも、要するにキュー
バーの消息を案じての事でございますれば、彼さへ吾が城内に閉ぢ込みおけば、
短兵急に攻寄せて来る憂ひはありますまい。このところ賢明なる王様、左守殿、

よくお考へ下さるやう偏に懇願し奉ります。

軍務所において

トルマン國王妃

千草姫

ガーデン王様

御机下

王「ヤ、左守殿、右守は可哀さうな事をしたわい。あたら忠臣を自ら殺すとは残念至極だ。千草姫も矢張天下國家を思ふ純良なる妻であつた。ヤ、疑つて濟まなかつた。ヤ、千草姫許してくれい」

と落涙し差俯向く。

左守「全く老臣が不明の致すところ、千草姫様に對し申し譯がございませぬ。また右守に對しても氣の毒でございます」

と流涕しつゝ恐れ入る。何となく城内の士氣は大いに揮ひ、すでに大足別を打ち滅ぼしたるがごとき戦勝氣分が漂うてゐた。

話は元へ復る。千草姫はキューバーの獨語をすつかり聞き終り、「ウン」と一聲蘇つたやうな顔をして息苦しさに、

「ヤあなたは戀しき戀しきキューバー様でございましたか。私は妙な所を旅行してゐるやうな夢を見てをりました。しかしながら貴方と二人が手を引いて、愉快に愉快に天國の旅をしたやうに思ひます。百花爛漫と咲き亂れ馥郁たる香氣は四邊に満ち、何處も彼處も透き通り、何とも彼とも言へぬ麗しさでございましたよ」

「キユ」ハハハハハハ。それやお前、俺の手で手首を握られ、氣絶してお前の精靈が靈界へ飛び出してゐたのだ。ほんの一寸ばかり觸つたやうに思つたが、なにぶん俺の腕に力が剩つてをるものだから、お前を氣絶さしてしまひ、大變心配いたしたが、バラモン自在天の御加護によつて、やつと息吹き返したのだ。もうこれから握手だけはやらない事にしやうかい」

千草姫は可笑しくてたまらず、吹き出すばかり思はるるを耐へ忍んで、わざとに吃驚したやうな顔をしながら、

「まあまあ嫌だわ、キューバーさまとしたことが、私を活かしたり、殺したり、

まるきり手品師のやうな事をなさるのだもの。本當に甚いわ。なにほど命を上げますといつたつて、一夜の枕も交さぬ先に葬られてしまつては耐りませぬからね。本當に貴方は憎らしい人だわ。もうこれから握手の交換は止めてくれなんて、そんなことは嫌ですよ。氣絶しない程度にそつと握手させて下さいな」

「よし、そんならお前は俺の左の手を握れ。俺もお前の左の手を握つてやらう」と言ひながら兩方から一度にグツと握り締めた。キューバーは姫に厳しく左の手を握られ、目が眩ひさうになつたので死物狂ひになつて姫の手をグツと握つた。途端、雙方とも一時に氣絶し其の場に倒れてしまつた。

デカタン高原の名物風は、四邊の樹木の梢を叩いて何となく物騒がしい。

(大正一四・八・二三 舊七・四 於由良海岸秋田別荘 加藤明子録)

天津御空はいと清く
五色の雲が棚引いて

鳳凰孔雀百鳥は
低空飛行をやつてゐる

地は一面の青疊
紫淺黄白黄色

紅の花咲き匂ひ
胡蝶の姿翩翩と

天國淨土の光景を
いとも楽しく眺めつつ

風に吹かるる心地して
地上を距ること三四尺

空中やすやす進み行く
はるか前方を眺むれば

黄金の薨キラキラと
天津日影に照り映えて

莊嚴世界を現出し
左手の方を眺むれば

青海原は波しづか
彼方此方にチラチラと

胡蝶の空中に舞ふごとく
白く輝く眞帆片帆

五色の鳥は右左
波の上走る面白さ

涼しき風は永遠に吹き
何とも言へぬ芳香を

道行く人の身邊に
送り來たるぞ床しけれ

ここに一人の旅人は 鎗を片手につきながら

青草しげる丸山の 中腹に身をおいて

吾が身の歩み來たりたる あとを眺めてニコニコと

煙草をくゆらし憩ひある かかるところへ山下より

オーイ オーイと聲をかけ 登り來たれる婦人あり

よくよく見ればこはいかに 思ひもよらぬ千草姫

涼しき清き白妙の 衣を風に翻し

旅人のそばに近よりて 满面笑をたたへつつ

『あなたは右守のスマンヂー コラまあ何うして此の様な

平和の山に御到來 訝かしさよ』と尋ぬれば

一人の旅人はうなづいて 『あなたは尊きお姫様

どうして此處へお出ましか 私は合點がゆきませぬ

トルマン城の奥の間で ガーデン王や左守司

大足別の攻軍に 抵抗せんといういろに

軍議を運らしめたりしが 協議叶はぬ私は

尊き主の御爲に お手にかかつて身失せしと

思ひしことは夢なるか 合點のゆかぬこの體

ここは何といふ所か 名さへも知らない清淨の

百花千花咲きほこる 淨土のやうな聖地です

あなたは どうして吾々の 後を尋ねてお出ましか

不思議 不思議が重なつて どうして可いやら分らない

語れば千草はうなづいて 『ここは所謂天界の

第三段の淨土です 私 是天壽が盡きまして

主の神様の命令で 淨土の住居を命ぜられ

喜び勇んでスタスタと 花咲く野邊を参りました

貴方も どうやら天界に お住居遊ばすお身の上

伊吹戸主の神様に たしかに聞いておきました

現界などに心をば 残させ玉はず速やかに

神の依さしの天界へ
私と共に昇りませう

ああ惟神々々
尊き神の引合せ

貴方は永らく獨身者
私は夫はおはせども

現幽所を異にした
今日の吾が身は獨身者

意思想念の相異より
ガーデン王と永久に

靈界までは添へませぬ
貴方の智性は吾が智性

私の意思は全然と
あなたの意思に通ひます

神の開きし天界の
この樂園に二柱

夫婦となつて永久に
天國淨土の御用をば

力限りに致しませう
如何でござる右守さま

いへば右守は頷いて
アア有難し有難し

私は現世にゐる中ゆ
あなたを戀してをりました

とはいふものの現界の
下らぬ階級が邪魔をして

心のたけを一言も
申し上げたることはない

あなたの心もその通り
私を愛してゐらると

早くも承知はしてゐたが
現実界の義理人情

法則などを省みて
こらへ忍んでをりました

もう此の上は神様の
定め玉ひし縁ぢやもの

誰に遠慮はいりませぬ
現実界におきまして

あらむ限りの善行を
盡した二人の報酬は

今や稔つてこの通り
歡喜の苑に身をおいて

千代も八千代も萬代も
時間空間超越し

嬉しく楽しく暮しませう
ああ惟神々々

御靈の恩賴をほぎまつる
」

かく互ひに歌つてゐるところへ、
前に火弾となつて落下した。その光明はダイヤモンドのごとく、
であつた。兩人はハツと驚き、
両手はハツと驚き、
両手で目を押へ其の場に蹲踞んでゐる。火光はた
天空を輝かし、ゴウゴウと音を立て、
白光のごとく

ちまち麗しき神人と化し、聲も静かに、
エンゼル「スマンヂー様、千草姫様、私は第一靈國より貴方をお迎へに來たエン
ゼルでございます。どうかお目をあけて下さい」

兩人は「ハイ」と言葉を返しながら、しづかに兩眼を開けば、白妙の衣を纏ひ
たる、威嚴備はる神人が七八尺前にニコニコしながら立つてゐる。

エンゼル「私は言靈別命であります。スマンヂーさま、千草姫さま、貴方がたは
現界において、トルマン國のため、多數民衆のため、現界における最善を盡して
おいでになりました。そして貴方がた兩人は、意思想念の合致した眞正の御夫婦
でありながら、あらゆる苦痛を堪へ忍び、戀てふ魔に打ち勝つて、よくも一生の
間忍ばれました。神界においては、特に貴女の善行が記されてございますよ。サ
ア、これから第二靈國を御案内申しませう」

スマンヂー「ハイ有難うございます。思はぬ所で神様にお目にかかり、何といふ
有難いことでございますか。お禮は言葉に盡されませぬ」

言靈別「あなたの培かふた畑に稔つた果實でございますよ。決して私にお禮を申

されては困ります。今日の喜びは貴方が培かひ養つてゐたところの喜びの實でございませぬ。千草姫様もその通り、必ず必ず禮なんか言つてはなりません。サア私についてお出でなさいませ」

と言靈別命は一足先に立ち、兩人は互ひに勞りながら、雲のごとき波のごとき青々とした丘陵をふみこえふみこえ、東へ東へと進んで行く。

何時とはなしに嚙喰たる音樂の響き、四邊より聞こえるとみれば、二人は早くも方形の岩をもつて疊んだやうな丘陵の上に着いてゐた。

言靈別「此處は第二靈國において有名なる花鳥山でございます。御覽なさい、緑の羽を揚げ、紅の冠を頂き、美しい鳥が四方八方に翱翔し、美妙の聲を放ち、又この通り地上の世界にないやうな麗しき花が咲き亂れ香氣を放つてをります。こは貴方がたの千代の住家でございますよ。食べたい物は何でも望み次第、この麗しき樹木の枝に臨時に熟しますから、それを採つておあがりなさい」

スマンチー「一寸エンゼル様にお尋ねいたします。いま靈國と承りましたが、靈國は宣傳使の集まる樂園ではございませぬか。私はトルマン國の小臣、平素ウラ

ル教を奉じながら、深い信仰も致しませず、また千草姫様だとてその通り、トルマン國の王妃として、國民の母として最善をお盡し遊ばしたものの、宣傳使牧師ならばいざ知らず、吾々ごとき俗界に心をひたしてをりましたものが、どうしてまた靈國へ來られたものでございませうか、どうもこの理由が分りませぬ」

言靈「お尋ねの通り、靈國は凡て宣傳使や、國民指導者の善良なる靈の來たるべき永久の住所でございます。今日の現實界において、宣傳使や僧侶や神官牧師などは一人として靈國へ昇り來る資格を有つてをりませぬ。また天國へは猶さら昇る者なく、何れも地獄に籍をおき、地獄界において昏迷と矛盾と、射利と脱線と暗黒との實を結んで、互ひに肉を削り合ひ、血を啜り合ひ、妄動を續けてをりまする。あなたは生前において宣傳使ではなかつたが、現實界の人間としての最善を盡されました。これは要するに表面的神を信仰せなくても、あなたの正守護神はすでに天界の靈國に相應し、神籍をおいてみられたのです。凡て宇宙は相應の理に仍つて成り立つてゐるものです。この第二靈國の花鳥山は貴方の物です。貴方の精靈が現界において、已にこの麗しき靈山を造つておかれたのです。誰に遠

慮は要りませぬ。永久に富み榮えて夫婦仲よく神界の御用をお勤めなさい。左様ならば」

と立去らむとするを、千草姫は慌てて白い手を上げながら、

「もしもし、エンゼル様、妾は今フツと考へましたが、スコブツエン宗のキューバーと申す者と手を握り合ひ、雙方ともに一時に氣絶したやうに記憶が浮かんで参ります。あのキューバーはどうになりましたか、一寸お尋ねいたします」

言靈「彼は未だ現界に生命が残つてをりますから、今や八衢に彷徨てをります。しかしながら愛善の徳うすく、智慧證覺の光鈍き彼がごとき人物のことを思い出してはなりません。あなたの智慧證覺が鈍りますから、今後は決して現界のこ
とを思ひ起してはなりません。最早現界の貴女の用はすんでをります。スマンヂー
さまも御同様に、決して決して現界のことを思はないでゐて下さい」

兩人はハツと頭を下げ有難涙にくれてゐる。言靈別命は五色の雲に包まれ、一
大火光となつて、東天を指して空中を轟かせながら歸つて行く。後に二人は顔見
合せ、

スマンヂー「姫様、不思議なことぢやございませぬか。吾々は夢でもみてゐるやうですなア」

千草「本當に不思議でたまりませぬ。たしかに貴方も私も死んだに間違ひはございませぬ。それにも拘はらず、ますます意識が明瞭になり、かやうな麗しき山の頂に、戀しき貴方と二人許されて夫婦となるといふようなことが、どうして現實と思はれませう。どうも不思議でたまりませぬ」

「私は現界において貴女の臣下でございませぬ。そして貴女はトルマン國における王様に次いで尊きお方、如何に神様のお許しとはいひながら、あなたを女房と呼ぶことは實に恐れ多くてなりませぬワ」

「スマンヂー様、現幽所を異にした今日、何もかも凡て洗替へぢやございませぬか、かかる尊き靈國に來たりながら、未だ左様な虚禮虚式的な辭令をお使ひ遊ばすのは、自らの想念を詐るようなものでございませぬよ」

「なるほど左様でございませぬ。そんなら改めて、あなたを妻と呼びませう。私を夫と呼んで下さい。一人の娘が残してございませぬけれど、此の事も思ひ切りま

せう』

『どうかさうして下さいませ。サアこれから二人でこの喜びを歌ひませう』
ここに兩人は手をつなぎ、胡蝶のごとく花鳥山の頂にて爽かな聲を張り上げ、
歌ひつつ舞ひ始めた。

天津御空を眺むれば

百のエンゼル星の如

輝き玉ひ吾が身をば

あるひは遠く或は近く

守らせ玉ふ有難さ

脚下を伏して眺むれば

堅磐常磐の巖もて

造り固めし神の山

見なれぬ鳥は麗しき

翼擴げて天界の

瑞祥うたひ百花は

艶を競うて咲き匂ひ

吾等二人の眼をば

心ゆくまで慰むる

ああ惟神々々

人の命は現世の

百年ばかりに限らない

幾億年の末までも

吾が精靈は生通し

生きて榮えて花咲かし

誠の稔を樂しまむ

誠の稔を樂しまむ

神は吾等と共にあり

吾等も神と共にあり

神と神とがむつび合ひ

神の御國をいや廣に

廣めてゆかむ夫婦仲

いや永久に春なれや

いや永久に榮えませ

いや永久に夏來たれ

いや永久に樂しまむ

天はますます高くして

空氣の色はいや清く

地はますます廣くして

百草千草みな光る

光明世界の眞中で

汝と吾とは世を送る

夢か現か幻か

いやいや決して夢でない

夢の浮世を立ちいでて

眞の神のあれませる

眞の國へまゐる昇り

眞の花を手折りつつ

眞の暮しをいとなまむ

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

と歌ひながら、二人は永久の靈國に住民となつた。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一四・八・二三 舊七・四 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第六章 鬼遊婆(一七七三)

黄昏時に頭から壺をかぶつたやうな空の色、何とも知れぬ血腥さい、腸の抉れるやうな風がピューピューと吹いてゐる。痩せこけた烏が二三羽、羽衣を脱いだ柿の木の枝に梢もろとも空腹を抱へて慄うてゐる。

地上は枯草が一面に生ひ立ち、處まんだら赤い生地を現はしてゐる。何とも知れぬ、いやらしい蟲が枯草を一面に取りかこみ、人の香がすると一齊に集まり來たり、人間の體を吸はうとして待ちかまへてゐる。そこへ現はれて來たのは、三年間中有界にとめおかれ、修業を命ぜられたウラナイ教の高姫であつた。

高姫は新規の亡者を一人伴ひながら、自分はヤツパリ現界に立ち働いてゐるつ

もりで、野分に吹かれながら、東海道五十三次のやうな弊衣を身に纏ひ、新弟子のトンボと一緒に道行く人を引張り込まむと待ちかまへてゐた。

トンボ「もし生宮様、もういい加減に歸らうぢやありませんか。何だかこの街道は淋しくて淋しくて犬の子一匹通らぬぢやありませんか。何時まで蜘蛛が巣をかけて蝉がとまるのを待つやうにしてをっても、蝉が来なくちや駄目でせう」

高姫「これ、トンボ、お前は何といふ氣の弱いことを言ふのだい。たとへ人間が通らなくても、この生宮が此處に出張してをれば、澤山の靈が通つて大彌勒の生宮の御神徳に觸れ、御光に照らされ、百人が百人ながら、お蔭をいただいて天國へ上るのだぞえ。それだから肉體人が来なくても、靈界人が来さへすればいいのだ。お前の俗眼では一人も人間が来ないやうに見えるだらうが、この生宮の目には、今朝から八萬人ばかり来たのだよ。それはそれは忙がしいことだよ。お前も肉體が曇つてゐるので、あれだけの亡者が一人も目につかぬのは無理もない。然しながら今朝から通つた八萬人の亡者が、お前の顔を見て羨ましさうにしてゐた

よ

「何故また私のやうな不幸者を羨ましさうにして通るのでせうか。サツパリ合點がゆきませぬがな」

「それだからお前は盲といふのだ。目が見えぬと黄金の臺に坐つてををつても、泥の中に突込まれてをるやうな氣がするものだよ。結構な結構な三千世界の救世主、底津岩根の大彌勒、日の出神の直きぢきの御用をさして頂きながら、何といふ勿體ないお前は了簡だえ。お前のやうな結構な御用をさしてもらふものは、何處にあるものか。それだから八萬人の精靈が羨ましさうにして通つたのだよ」

「ヘーン、妙ですな」

「これ、トンボ、トンボーもない事を言ひなさるな。「ヘーン、妙ですな」とは何だい。この生宮さまをお前さまは馬鹿にしてをるのだな。そんな了簡で生宮の御用をしてをると神罰が立所に當つて、頭を下にし、足を上にしてトンボ返りをせねばならぬぞや。チツと心得なされ」

「私やこの間から、あまり辛いのと馬鹿らしいので實のところは生宮様の隙を窺ひ、うまくトンボ（遁亡）しようかと考へてをりましたが、私を羨むやうな人物

が八萬人も一日に通るかと思へば、何處に行つても同じ事だ。生宮様のお側にマアしばらく御用をさしていただきませう」

「これ、トンボ、そら何を言ふぢやいな。しばらく御用をさしていただくとは罰當り奴、そんな了簡でをるやうな「ガラクタ」なら、今日から暇をやる。サア、トツトと歸つておくれ。お前がをらなくても肉體は女だから炊事萬端お手のものだよ。無用の長物、ウドの大木、體見倒しの頓馬野郎だな。これからトンボといふ名を改名して、トンマ野郎というてやらう。それがお前の性に合つてるだろ」

「生宮様、トンマ野郎とはひどいぢやございませぬか」

「ヘン、三千世界の救世主、底津岩根の大彌勒、第一靈國の天人、日の出神の生宮のお側に御用さして頂いてをるのぢやないか、なにほど賢い立派な人間でも、この生宮の目から見れば、何奴も此奴も皆トンマ野郎だよ。大學の博士だつてトンマ野郎だ。總理大臣や衆議院議員になるやうな奴は、なほなほトンマ野郎の腰抜けやらう。お前も總理大臣や博士と同じ稱號を生宮から與へられたのだから、有難く感謝しなさい」

「生宮さま、それでもあまりぢやござりませぬか。どうか元の通りトンボとおつしやつて下さいな」

「さうだ。そんならお前は「ドン」臭い男だから、ドンボと呼んであげやう。トンマ野郎とは少し「マシ」だからな。底津岩根の大彌勒様、第一靈國の天人、日の出神の生宮ぢやぞえ」

「もしもし生宮さま、もうその長たらしいお名前は聞き「たんのう」致しました。どうぞ簡単に言つて下さいな。法性寺入道と間違ひますがな」

「こりや、トンマ野郎、そらナーン吐かしてけつかるのだ。トンマ野郎が嫌なら、ドンマ野郎にして上げやう。ああア、何奴も此奴も碌な奴は一匹もあやアしないわ。アアアア呆れた。開いた口が早速には塞がりませぬわい、イイイイ何時まで経つても経つても生宮の申すことが分らず、改心が出来ず、イケ好かない野郎だな。ウウウウウ煩さいほど、口が酸くなるほど、毎日日々烏の啼かぬ日があつてもコケコーが歌はぬ朝があるとも、撓まず屈せずお説教してやるのに、エエエエ會得が行かぬとは何といふ、オオオオオおそろしう大馬鹿だろ。カカカカ

力噛んでくくめるやうに、日夜の生宮の説教も、馬の耳に風吹く如く、キキキキ聞いてはくれず、キマリの悪い面付をして、クククク喰ひ物ばかり目をつけ、苦勞ばかり人にかげやがつて、ケケケケ怪しからぬ怪體な獸だよ。ココココこんな事でどうしてこの法城が保てると思ふかい。ササササさてもさても困つた、シシシシしぶとい代物だな。死に損ひの腰抜けといふのはお前の事だぞえ。スススス少しは生宮の心も推量し、進んで神國成就のために大活動をしたらどうだい。セセセセ雪隠で饅頭喰たやうな面してこの生宮の脛をかじり、トンマ野郎が氣に喰はぬなどと何をいふのだ。ソソソソそんな奴根性を持つてゐる粗末の代物を、高い米を喰はして養うてゐるこの生宮も、竝み大抵の事ぢやないぞえ。タタタタ誰がこんなトンマ野郎を、たとへ三日でも世話するものがござりませうかい」

「チチチチツと無理ぢやござりませぬか、畜生か何ぞのやうに、トンマ野郎だのドンマだのと、あまりひどいです。ツツツツ月に一遍くらゐ、蛙の附焼きぐらゐ頂いて、どうして荒男の體が保てませう。テテテテ手も足もこの通り筋

張つて來ました。まるつきり扇の骨に濡れ紙を張つたやうな手の甲になつてしま
つたぢやござりませぬか。トトトトトンボだつて、どうして貴女と共に、活動
が出来ませうぞ。チツとは私の身の上も憐れんで下さい。貴女ばかり美味しい物を
喰て、いつも私には芋の皮や大根の鬚や、水菜の赤葉ばかり當てがつてをるぢや
ありませぬか」

「ナナナナ何を言ふのぢやいな。勿體ない、その心では罰が當るぞや、二二二
二二西も東も南も北もこの通り曇り切つた世の中、お土の上に、何を蒔いてもこ
の通り、菜葉一つ満足に出来ない暗がりの世ぢやないか。赤ツ葉の一つも頂いた
ら結構ぢやと思つて喜びなさい。こんな寒い風の吹く世の中に、夜分は又又又
又ぬつくりと温い茶を呑んで、煎餅布團の中へ、潛り込んでをれるぢやないか。
ネネネネ年が年中何一つ、これといふ働きもせず、ノノノノノラクラと野良
仕事さしても、烏の威しのやうに立つてばかり居るなり、ララララ埒もない皺
枯聲を出して、頭の痛むやうな歌を唄ひ、リリリリリ伶俐さうにトンマ野郎とい
うてくれななどは、お尻が呆れますぞや。ルルルル流浪して行く處がないか

ら使つて下さい、と泣いて頼んだぢやないか、レレレレ禮を言ふ事を忘れて、不足ばかり申すとはホントにホントによい罰當りだよ。お前は神様の警めで、口口口口牢獄へ突込まれてゐるのだ。然しながらお前の肉體はこの生宮が構うてゐるが、その魂は、喰ひたい喰ひたい遊びたい遊びたいといふ、「大牢」に這入つてゐるのだよ、フツフツフツフツ」

「ワワワワワ笑うて下さるな。私はお前さまの言ふやうな勘の悪い人間ぢやござりませぬぞや。これでも一時はバラモン軍のリューチナントまで勤めて來た武士ですよ。ㄗㄗㄗㄗ何時までもお前さまの側へ居らうとは思ひませぬから、ウウウ煩さうても、賣れ口があるまで辛抱してやつてゐるのですよ。ㄗㄗㄗㄗえぐたららしい事を朝から晩まで聞かされて、なんぼ軍人だつてお尻が呆れますよ。私はまだ貴女のお供はこれでヨヨヨヨをしまひですよ」

と逃げ出さうとする。高姫は後から瘦せこけた手をグツと出し、襟首をつかみ二足三足後ろに引きながら、

「こりや灸箸、麻幹人足、逃げるなら逃げて見い。燈心の幽霊見たやうな腕をし

やがつて、線香のやうな足をして、「かれない」のやうな薄つぺたい體をして、生宮様に口答へするとはもつての外だ。サア動くなら動いてみよれ」

ト「イヤもう、えらい灸を据ゑられました。どうぞ「かれない」これ言はずに許して下さい。許して下さいさらなもう仕方がない。あの谷川へ「とうしん」（投身）と出掛けます」

高「エーしやれどころかい」

とパツと手を放した途端にヒヨロ ヒヨロ ヒヨロと餓鬼のごとくヒヨロつき、枯れた萱草の中にパタリと倒れてしまった。

高「ホホホホ生宮様にかかつたら、バラモンのリユーチナントも脆いものだな。サアサアこれから館へ歸り、夕御飯の用意でも致しませう」

とダン尻を中空にたわつかせながら歸らむとする。時しもあれ、珍しくも歌の聲が聞こえて來た。高姫はこの聲を聞くや否や、操り人形のごとくクレリと體を交し、

「ヤア來た來た、これから私の正念場だ」

と大地に二三回も石搗きを始めて勇んでゐる。

☐ 梵天帝釋自在天

大國彦の大神は

三千世界の救世主

神や佛は言ふも更

靑人草や草木まで

恵みの露を垂れ給ひ

救はせ給ふ尊さよ

大黒主の大棟梁

清き教を受け給ひ

七千餘國の月の國

一つに丸めて治めむと

バラモン教を遠近に

開き給へど如何にせむ

三五教やウラル教

勢ひなかなか強くして

誠の神の御教を

蹂躪するこそ是非なけれ

未だ時節の到らぬか

これほど尊い御教も

數多の人に仰がれず

誹毀讒謗の的となり

日に夜に教は淋れ行く

大黒主の権力に

押されて表面バラモンの

信者に化けてをるなれど 心の中はウラル教
あななひけう 奴ばかり こと 心の中はウラル教
三五教の 強壓的に軍隊を
おほくるぬし 御心配 強壓的に軍隊を
大黒主の 強壓的に軍隊を
用ゐて信徒を召集し 否が應でもバラモンの
教に靡かせくれんづと 大足別の將軍に
三千餘騎の兵士を 引率させてデカタンの
大高原に進軍し トルマン國を屠らむと
吾にスコブツエン宗を 開かせ給へどその實は
異名同宗バラモンの 教に少しも變らない
只ただ相違の一點は バラモン教より劇烈な
信徒に修行を強ゆるのみ こと 心の中はウラル教
虎狼に等しい人心を 緩和し御國を保つこと
容易に出来るものでない かてて加へて此頃は
思想日に夜に混亂し アナアキズムやソシヤリズムが

いたるところに出没し 大黒主のこの天下

いよいよ危ふくなつて来た 吾はこの間に教線を

七千餘國に擴張し 大黒主の失脚を

見届け済まして月の國 いや永遠に統治なし

神力無雙の英雄と 世に謳はれむ面白や

神は吾等と共にあり 吾こそ神の化身ぞや

神に刃向かふ奴輩は 何奴も此奴も容赦なく

亡ぼし呉れむ吾が宗旨 アア面白や面白や

いかなる神の教をも 言向け和し大野原

風に草木の靡くごと 振舞ひくれむ吾が力

吾等は神の化身なり 吾等は力の根元ぞ

来たれよ来たれ四方の國 鳥獸の分ちなく

キューバーが配下としてやらう イツヒヒヒヒ イツヒヒヒヒ

實に面白くなつて来た 天は曇りて光なく

地上は冷えて草木さへ

皆枯れ萎む世の中に

スコブツエン宗ただ獨り

旭日の天に昇ること

日々毎日榮え行く

ウツフフフフ　ウツフフフフ

と大法螺を吹き立てながら四辻までやつて来た。高姫はキューバーの姿を見るより、カン走つた聲にて、

「これこれ遍路さま、一寸待つて下さい。お前は一寸見ても、物の分りさうな立派な男らしい。私は三千世界の救世主、大「みるく」の太柱、第一靈國の天人、日の出神の生宮ぢやぞえ。サア一寸、私の館まで来て下さい。結構な結構なお話を聞かして上げませうぞや」

キユ「何、お前が救世主といふのか、フフフフーン、はてな」

高「これ、遍路さま、何がフフフフンだい。はてな……どこるか、これから世の初まり、彌勒出現、神代の樹立、世の終ひの世の始まりぢやぞえ」

「八八八八八何と面白い婆さまだな。幸ひ日の暮のことでもあり、そこらに宿

もなし、一つ宿めて頂かうかな」

「サアサア宿つて下さい。結構な結構なお話をして上げますぞや、ホホホホホ。トンボの奴到頭草の中へ埋もつてしまひよつた。あんな奴アどうならふと構ふことはない。生宮様に對して理窟ばかり吐くのだもの。何と世の中は妙なものだ。一人の奴が愛想づかして逃げたと思へば、チャーソンと神様は代りを拵へて下さる。この遍路は、どうやら生宮の片腕になるかも知れぬぞ。ホホホホホ」

トンボは最前から草の中に身を隠して高姫の様子を考へてゐたが、……こんな奴に來られちや自分は今足上がりだ。しかしながら高姫の奴、あんな男を引張り込んで、どんな相談をしとるか知れぬ。今晚はともかく、館の外から二人の話を聞いてやらねばなるまい……と思案を定め、兩人が岩山の麓の破れ家へ歸つて行く後ろから、闇を幸ひ足音を忍ばせついで行く。

（大正一四・八・二三 舊七・四 於由良秋田別莊 北村隆光録）

第七章 妻生（一七七四）

軒は傾き屋根は破れ、蝶も蜻蛉も蜂も雀も雨も、屋根から降つて來るところまで茅葺の屋根が煤竹の骨を出してゐる。雨戸は七分三分に尻から揚げたやうに風に喰ひ取られ、障子は黒く棧ごとに瓔珞を下げ、風吹くたびに自由に舞踏をやつてゐる。湿つぽい畳は、表はすっかり破れ、赤ずんだ床ばかりが僅かに命脈を保ち、足踏み入るも身の毛のよだつように見苦しい。さうして何ともたとへやうのない異様な臭氣が鼻を衝く。されど、高姫やキューバーの目にはこの茅屋が金殿玉樓のごとくに見え、異様な臭氣は麝香のごとくに、想念の情動によつて感じ得らるるのも妙である。牛糞の味も牡丹餅のごとく感じ、馬糞の臭もお萩のごとく、いと満足に喉を鳴らしてしゃぶるのだから耐らない。口の缺けた熏ぼつた土瓶に籐の蔓の柄をつけ、屋根から釣るした煤だらけの「てんどり」に引っかけ、牛糞を焚いて茶を温めながら、二人は嬉々として他愛もなくふざけてゐる。御靈の相應といふものは實に不思議なものである。

この高姫さまは、キューバーの目には、一寸見た時には婆さまのやうに見えたが、何時の間にか、トルマン國の王妃千草姫のやうな美人に見えて来た。また高姫の目では團栗眼の烏天狗のやうな、口の尖つた不細工なキューバーの顔が何とも知れぬ凜々しい、時置師の空助に見えてたまらない。高姫は鼠髯のやうに皺のよつた口をつぼめながら、しよなしよなと體をゆすり、

「これ空助さま、いや高宮彦殿、ようまあ化けたものですなあ。あの四つ辻で會つた時は、左程でもない遍路だと思つてゐたに、かうさし向かうて篤くりとお顔をみると、まぎれもない高宮彦様だわ。もし私は高宮姫でございますよ。何ですか他所よそしい。他人らしいその振舞ひはをいて下さい。なにほど貴方が出世して偉くなつてやつぱり私の夫ですよ」

キユ「お前は高宮姫と改名したのか、何でも千草姫といふ名だつたと思ふがな」
高「あのまあ空ちゃんの白々しいこと。それ貴方とあの御殿でお約束して高宮姫と改名したぢやありませんか。貴方だつてその時高宮彦と改名されたでせう」

キユ「ハテナ、お前はどうしても千草姫に違ひない。妙なことを言ふぢやないか。」

しかしながら、名はどうでもよい。心と心さへびつたり合うてをればそれで十分だ。

と二人は互ひ違ひに主をかへ、嬉々として意茶つき始めた。

高「もし貴方、あれから私に別れて何處を歩いてゐらしたの。私どれほど尋ねて

ゐたか知れませぬわ」

キユ「私はな、デカタン高原のトルマン國へ根據を構へ、お前を一目見てから目

にちらついて耐らず、何とかして會ひたいと心を焦してゐる矢先、お前がトルマ

ン王の妃になつてゐるものだから手の附けやうがなく、百方手段をもつてたうと

うお前に近よる事が出来、永らくの戀の暗を晴らすことを得たのだ。サアこれか

らお前と私と心を合せ、トルマン國を手に入れ、七千餘國の月の國を蹂躪して見

ようぢやないか。たうてい科學的文明の極點ともいふべき現代を救ふには、單

なる説教や演説や祈禱のみにては功を奏しにくい。自ら王者の位置に立ち軍隊を

片手に握り、一方には劍、一方にはコーランをもつて人心を治めなくては宗教も

政治も嘘だ」

「なるほど、貴方のやうな智勇兼備の神人は世界にございますまい。アア三年が
間、この山の「ほてら」で苦勞したのも貴方に會ひたいばかり、いよいよ時節が
來たのかなあ」

と互ひに辻褃の合はぬ勝手な應答をしながら、八味の幕を下して抱擁したまま睡
りについてしまつた。外に立つてゐたトンボはやけてたまらず、小石を拾つて戸
の破れから幾つともなくボイボイと投げ込んだ。小石は釣り下げである土瓶の腹
を割つて、二人の寢てゐる足の上にパツと小便を垂れた。高姫は驚き跳起きなが
ら聲を震はせて、

「これや、天下の救世主が種を蒔きよるのに何をするか。何者だ、名を名乗れ」
と唖鳴り立てる。トンボは外から、

「ワハハハハハ石を投げたのはこのトンボさまだ。これや婆々、今にこの家を
叩き壊してやるからさう思へ。俺も一つは性念があるぞ」

とまたもや雨のごとく両手に小石を掴んで投げ込む危ふさ。石は戸棚や水屋にぶ
つかつて、カチヤカチヤ パチパチ ガランガランと瀬戸物まで滅茶々々になる。

高姫、キューバーの二人は危なくてならず、表戸を引きあげ「コレヤー」と唝鳴る勢ひに、トンボは骨と皮との體を、尻をまくりながら、ドンドンと逃げ出す。高姫とキューバーは追ひついて素首引掴み懲してくれむと眞裸のまま、トンボの後を息をはづませ、青い火の玉となつて追つかけ行く。

トンボは八衢の關所の門口に來たり、慌てて黒門に「どん」とつきあたり、「アツ」といつたまま其の場に倒れた。キューバー、高姫の二人は皺枯聲を張上げながら、「ホーイホーイ、ホイホイホイ」とド拍子もない聲を張上げて追かけ來たり、トンボの倒れてゐる姿を見て痛快がり、

高姫「ホホホホホこれ空チヤン、天罰といふものは怖ろしいものではございませぬか、ねえ貴方。私と貴方が神代から傳はつた、青人草の種蒔のお神樂を勤めてゐるのを岡焼して、石を投げ込んだトンマ野郎ぢやございませぬか。これやトンマ、確りせぬかい、生宮さまの御神力には畏れ入つたか」

トンボはやうやく氣がつき、

「お前さまは生宮さまぢやないか。こんな役所の門前まで來て人の恥をさらすも

のぢやありません。どうぞ悪口だけは耐へて下さい。私だつてまだ末の長い人間、これからまた世に立つて一働きせなくてはなりません。お役人の耳へ私の悪口が入つたら最後、何處へ行つても頭は上りませぬからねえ」

高「へん、これやなーにをぬかしてゐるのだい。自業自得ぢやないか。お前のやうなものを此世の中に頭を上げさせておこつものなら、世界は暗雲になつてしまふぢやないか。それだからお役人に聞こえるやう、一人大きな聲で言つたのだよ。何とまあ情けなささうな顔わいのう」

ト「これや婆々、もう俺も破れかぶれだ、何なりと悪口をつけ。その代り貴様の秘密をお役人の耳に入るやう大聲で素ッ破ぬいてやる」

キユ「これやこれやトンボとやら滅多な事は言ふまいぞ。貴様のやうな三文やつこなら、假令よく言はれても悪く言はれても餘り影響はないはずだ。しかしながら吾々ごとき救世主の、たとへ嘘にもせよ悪口を申すと、世界救済の事業の妨害になるのみならず、その罪はたちまち廻り來たつて吊釣地獄に墜ちるぞや」

ト「へん放つといひて下さい。お前さまはこの婆々と爐の邊で、とんでもない種蒔

行事を演じてみたぢやないか。それあの醜體を……もしもしお役人様、此奴等二人は天則違反の大罪人でございます。どうか御規則に照らし、地獄へ打ち込んで下さい。さうしてウラナイ教とか、スコ教とかいつて悪神の教を天下に擴めようとする餓鬼畜生でございます。私が證據人になります。どうぞ此奴ら二人を厳しく調べて下さい」

と力一ぱい唝鳴り立てる。

キユ「これやこれやトンボとやら、教主や生宮を罵る罪は輕けれど、教の道を罵る罪は萬劫未代許されぬぞ。謗法の罪の重い事を知つてゐるか」

ト「ヘンえらさうに言ふない。謗法の罪なんて俺やどこでもやつた事はないわ。

貴様等兩人こそ方々で悪い事やつて來た代物だ。もしお役人様、大罪人を二人ここに引張つて來ました。早く來て下さらないと「とんぼう」(遁亡)いたします。早く早く」

と唝鳴つてゐる。赤白兩人の守衛はこの聲に訝りながら、門を左右に開き外に出てみるとこの體裁、

赤「これやこれや今日は公休日だ。なぜ矢釜しく申すか。訴へ事があるなら明日出て来い、聞いてやらう」

ト「もしお役人さまに申し上げます。天下を亂す彼様な大悪人を現在目の前に眺めながら、公休日だから調べないなぞと、そんなナマクラな事をいうてお役人が勤まりますか。日曜まで月給は頂いてをられませう。一寸でよいからお調べ下さいませ」

赤「や、お前はバラモンのリユーチナントではないか。未だ修養も致さず、八衢に迷ふてゐるのか、困つた奴だなあ」

ト「もしお役人さま、面白い事を仰有いますなあ。冥途かなんかのやうに現界に八衢がございますか」

赤「ここは冥途の八衢だ。其方は鬼春別將軍の一旦部下となり、軍隊解散の後、泥棒となつて四方を徘徊いたし、ある勇士のために殺され、精霊となつて此所へ来てゐるのだ。それが未だ氣が附かぬのか」

ト「ヘン、あまり馬鹿にしなさるな。ちつと眞面目になつて下さい。私は狂者ぢ

やございませぬよ。死んだ者がこのやうにものを言ひますか。目も見えず耳も聞こえず、口もたたけず、手足も動けなくなつてこそ死んだのでせう。へん馬鹿にしてゐる。こんな酒を喰つて顔色までまつ赤にした奴の酒の肴になつてゐてもつまらない。今日は歸つてやらう。その代り明日は見ておれ、貴様の上官に今日の事を一伍一什訴へるぞ。さうすると貴様はたちまち足袋屋の看板足あがり、妻子のミイラが出来るぞや、ハハハハハハ」

と捨臺詞を残し、道端の石を掴んでキューバー、高姫目當に打ちかけながら、入陽の影坊師見たやうな細長い骸骨を宙に浮かせ、北へ北へと逃げて行く。

赤「ヤ、そこに居るのは高姫ぢやないか。お前は時置師の空助さまに頼まれ、三年間この八衢に放養しておいたが、未だ數十年の壽命が現界に残つてゐる。たうてい靈界の生活は許されない。お前の宿る肉體はトルマン王の妃千草姫の肉體だ。サ一時も早く立ち去れ。またキューバー、汝は天下無比の惡黨であるが、まだ生死簿には壽命がのこつてゐる。一時も早く現界へ立ち歸れ。グツグツ致してゐると肉體が間に合はなくなるぞ」

と厳しく言ひ渡した。二人はハツと思ふ途端に氣がつけばトルマン城内、千草姫の一室に錠前を卸して倒れてゐた。どことも無く騒々しい人馬の物音、矢叫びの聲、大砲小銃の音手に取るごとく聞こえ來る。これより千草姫の言行は一變し、またもや脱線だらけの行動を取る事となつた。八衢にゐた高姫の精靈は己が納ま
るべき肉體を得て甦つたのである。

(大正一四・八・二三 舊七・四 於由良海岸秋田別莊 加藤明子録)

第八章 大勝(一七七五)

トルマン國の太子チウインは、王女チンレイおよびハリスの女將軍を別將となし、武勇のほまれ高きジャンクを第一軍の司令官と仰ぎ、三五教の宣傳使照國別および照公司を殿となし、鉦鼓をうちならし、旗差物賑々しく、二千五百騎を従へ、吾が居城を攻め圍む大足別の大軍を殲滅すべく軍歌を唄ひながら、夜を日に

次いで歸り來る。山河草木威風になびき、禽獸蟲魚に至るまで、その威徳を讚美せざるはなかつた。チウイン太子は馬上ゆたかに進軍歌を唄ふ。

トルマン國は昔より尊き神の造らしし

地上における天國ぞ 吾が王室の祖先等は

民の心を心とし 神の教を萬民に

傳へ諭して世の中を いと平らけく安らけく

治め給ひし尊さよ 中つ御代よりバラモンの

悪しき教のまじろひて 愛國心は日に月に

春の氷と消えてゆく 父ガーデンもいつしかに

時代の風にもまれまし ウラルの神の御教を

輕んじ玉ふ世となりて 政治はますます紊れゆき

民の悲鳴はかまびすく 千鳥のごとく聞こえ來る

アア吾々は如何にせむ 倦みつかれたる人心を

雄々しき清き雄心に
復活せしめ吾が國を

いと平らけく安らけく
昔の神代の其ままに

ねぢ直さむと眞心を
盡して神を祈るをり

バラモン教の別派なる
スコブツエン宗が渡り來て

吾が國民の魂を
狂ひ惑はせ邪教をば

植ゑつけたるぞ忌々しけれ
大黒主の勢力を

大看板と押し立てて
吾が王室に迫り來る

心汚きキューバーを
打ち懲らしつつバラモンの

大足別が軍勢を
神の威徳に打ち破り

凱歌を擧げて本城を
安全無事に治むまで

死すとも動かぬ吾が心
勇めよ勇め振り起て

三千餘騎の吾が兵士
われには神の助けあり

産土山の齋苑館
輝き給ふ素盞鳴の

神の尊の御使
照國別の宣傳使

照公司てるこつかきともるとともに 吾等われらが軍いくさを助たすけまし
天下無敵てんかむてきの言靈ことたまを 打ち出うし給たまへば敵軍てきぐんは
風かぜに木この葉はの散ちるごとく 敗走はいそうせむは目まのあたり
進すすめよ進すすめいざ進すすめ 大足別おほだるわけの亡ほろぶまで
妖僧えうそうキユーバーの倒たふるまで

と聲こゑも涼すずしく鉦鼓しやうこ法螺貝ほらがひの音ねに和わして、鶴翼くわくよくの陣ぢんをはりながら、目めも届とどかぬ大原だいげん
野やをチクリチクリと引網ひきあみのごとく、トルマン城じやうを中心ちうしんに押寄おしよせ來きたる。
照國てるくにわけ別しんがりは殿つとを勤つとめながら、數百すつひやくの兵へいを引連ひきつれ、別べつに一隊いったいを造つくり、進軍歌しんぐんかを歌うたひ
つつ進すすみ寄よる。

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし 吾われは照國別司てるくにわけつかき
人の命いのちを奪うばひ合あふ 戦いくさに臨のぞむは本意ほんいならず
さはさりながら今いまになり トルマン國とくの窮状きうじやうを

見^みすてて通^{とほ}るも大神^{おほかみ}の
 心^{こころ}苦しきこの場合^{ばあひ} 止^やむを得^えざれば御^み軍^{いくさ}に
 加^{くは}はりながら後^{こう}陣^{ぢん}を 仕^{つか}へまつりて進^{すす}み行^ゆく
 ああ惟^{かむ}ながらかむながら 神^{かみ}は吾^{われ}等^らと共^{とも}にあり
 吾^{われ}等^らは神^{かみ}の子^こ神^{かみ}の宮^{みや} 素^{もと}より刃^{やいば}に血^ち汐^{しほ}ぬり
 敵^{てき}を斃^{たふ}さむ心^{こころ}なし ただ惟^{かむ}ながらかむながら
 神^{かみ}の恵^{めぐ}みの露^{つゆ}の玉^{たま} 清^{きよ}き心^{こころ}の大^{おほ}砲^{づつ}に
 つめ込^こみ敵^{てき}に相^あ向^むかひ 仁^{じん}慈^じの鞭^{むち}を下^{くだ}すのみ
 進^{すす}めよ進^{すす}め吾^{われ}が兵^{へい}士^し トルマン城^{じやう}は近^{ちか}づきぬ
 ガーデン王^{わう}や左^さ守^{もり}司^{がみ} 今^{いま}や防^{ふせ}ぐに全^{ぜん}心^{しん}を
 傾^{けい}注^{ちゆう}しつづ吾^{われ}が軍^{ぐん}の 至^{いた}るを待^{まち}たせ玉^{たま}ふらむ
 チウイン太^{たい}子^しの前^{ぜん}軍^{ぐん}は 何^{いづ}れも神^{しん}命^{めい}に従^{したが}ひて
 左^{さい}右^うの指^{ゆび}のそ^{ごと}の如^{ごと}く 自^じ由^{いう}自^じ在^{じざい}に活^{くわつ}動^{どう}し
 容^{よう}易^いに敵^{てき}を國^{こく}外^{ぐわい}に 放^{ほう}逐^{ちく}せむは目^まのあたり

必ず驚く事なかれ 勇めよ勇め皆勇め

勝利の都は近づきぬ 進めよ進めいざ進め

大足別が神軍に 白旗を掲げ真心の

あらむ限りを現はして 正しき神の御教に

心の底より服ひて 前非を悔ゆるそれまでは

汝等一步も退くな 神國成就の先がけぞ

七千餘國の月の國 奪ひ取らむとバラモンの

大黒主は企めども 吾が神軍のある限り

いかで一指をそめ得むや アア勇ましし勇ましし

吹き来る風はあらくとも トルマン川は深くとも

神の守りのある上は 一騎半騎も過たず

無事安泰に敵軍の 後ろを首尾よく突くを得む

進めよ進めいざ進め 敵の姿もみえかけた

一齊射撃も目のあたり ああ惟神々々

あななひけう
三五教を守ります

くにはるたち
國治立の大御神

かむすさのを
神素盞鳴の大神の

みまへ
御前に照國別司

かしこ
畏み畏み願まつる

かく歌ひながら、士卒を勵まし、前後に心を配り、チクリチクリと前進する。

おほだるわけ
大足別は物見臺よりこの體を見て大いに驚き、

あれは確かに援軍ならむ、最早かくなりし上は、キューバー一人のために時期

をおくらせ、敵の術中に陥らむ事最も心苦し。一時も早く本城を乗り取り、援軍

の來たらば城廓を盾に一人も残らず塵殺しくれむ、攻撃するは今なり

と俄かに部下に嚴令を下し、一齊に筒先揃へて、トルマン城さして潮のごとく押し

寄せた。

にはかに聞こゆる鬨の聲、大砲小銃の音、待ち構へたるガーデン王、左守司は

五百の城兵を指揮し、力限りに挑み戦ふ。左守は頭に霜を頂きながら、城門をか

け出し、三百の手兵をもつて、敵の陣中に打ち入り、奪戦苦闘の結果武運つきて、

馬上より轉落し、敵のために七十年を一期として、歸らぬ旅路に就いた。大足別は勝に乗じて表門に押し寄せ、今やほとんど落城せむとする時しも、千草姫、キユーバーの二人は薙刀を引抱へ、表門に躍り出で、大足別を見るよりキユーバーは聲を勵まし、

大足別、暫くまたれよ、キユーバー司ここに在り。千草姫の應援あらば急ぎ玉ふな、本城は已に吾が手に入れり

と馬上より大聲叱咤すれば、大足別は身をかわし城門を背にして、攻め來たる應援軍を相手に防ぎ戦ふ。城内よりはガーデン王の兵數百人、砲を揃へて一齊に射撃を開始し、大足別は前後左右に敵を受け、四方八方に、馬をすて武器をすて、命からがら散亂した。この戦ひによつて、死する者バラモン軍に十八人、城内には二人の死者を出したのみであつた。チウイン太子は敵の脆くも逃げ行く體を見て、此の際敵兵を追撃し、一人も残らず屠りくれむと息まくを、照國別の忠告によつてこれを中止し、凱歌を奏して正々堂々、トルマン城に凱旋することとなりぬ。

ガーデン王は物見櫓に打ち登り、城内の強者を指揮してゐたが、敵の無残な敗走と、チウイン太子の雄々しき活動振りに勇み立ち、軍扇を開いて櫓の上にて自ら歌ひながら、凱旋の祝氣分で舞うてゐる。

王「トルマン國を包みたる 醜の黒雲いま晴れて

天津日嗣は空高く 輝き玉ふ目出たさよ

地上はるかに見わたせば 都のまはりに敵影の

一人も無きぞ目出たけれ これも全く皇神の

御國を守り玉はむと 助け玉ひしものならむ

いざ之よりは天地の 神を敬ひ國民の

模範となりて浦安の 昔の神代を建設し

大黒主の心膽を 脅かしつつ又しても

吾が神國に相對し 敵對行爲を斷念すべく

守らせ玉へウラル教 開き玉ひし大神の

御前に祈り奉る^{みまへいのたてまつ}」

かくする折^をりしも、大足^{おほだる}別^{わけ}は道々^{みちみち}市街^{しがい}に火^ひを放^{はな}ちたりと見^みえ、夕暮^{ゆふぐれ}の空^{そら}、朱^{しゆ}を
濺^{そそ}ぐまで、炎^ほ各所^{はかくしよ}にあがり、遠近^{をちこち}より悲惨^{ひさん}の聲^{こゑ}聞^きこえ來^くる。この時^{とき}あたかも照國^{てるくに}
別^{わけ}は門内^{もんない}にありしが、これを見^みるよりまつしぐらに物見櫓^{ものみやぐら}にかけ上^{のぼ}り、照公^{てるこう}と共^{とも}
に天^{あま}の數歌^{かずうた}を奏上^{そうじやう}し、天津祝詞^{あまつのりと}を奏上^{そうじやう}するや、四方^{しほう}に起^{おこ}りし火災^{くわさい}はたちまち水^{みづ}を
打^うちしごとく治^{をさ}まり、再^{ふた}び聞^きゆる歡喜^{くわんき}の聲^{こゑ}に、ガーデン王^{わう}も太子^{たいし}も王女^{わうぢよ}もハリス
も手^てを打^うつて感^{かん}喜^きした。王^{わう}は部^ぶ下^かに令^{れい}を下^{くだ}し、左守^{さもり}、右守^{うもり}の遺骸^{なきがら}を王室^{わうしつ}の墓所^{はかしよ}に
特別^{とくべつ}をもつて葬^{はうむ}り、國家^{こくか}の守護神^{しゆごじん}として祠^{ほら}を建^たて、永遠^{えいゑん}に祭^{さい}祀^しすることとした。
またチウイン太子^{たいし}の奏上^{そうじやう}に依^より、照國^{てるくに}別^{わけ}、照公司^{てるこうつかさ}の仁義^{じんぎ}の應援^{おうゑん}と、大神^{おほかみ}の神德^{しんとく}と
を聞^きき、感^{かん}謝^{しゃ}のあま^きり、三五^{あななひ}の大神^{おほかみ}を鎮祭^{ちんさい}せむ事^{こと}を誓^{ちか}ふに至^{いた}つた。
王^{わう}は戰塵^{せんぢん}治^{をさ}まり、一先^{ひとま}づ大神^{おほかみ}に感^{かん}謝^{しゃ}しながら、後^{あと}の始末^{しまつ}をチウイン太子^{たいし}および
ジャンクその他の重臣^{ぢゆうしん}に命^{めい}じおき、休養^{きうやう}せむと千草^{ちくさ}姫^{ひめ}の居間^{いま}に歸^{かへ}り見^みれば、千草^{ちくさ}
姫^{ひめ}はキューバーと共^{とも}に、莞爾^{くわんじ}として相向^{あひむ}かひ祝^{いは}ひの杯^{さかづき}をくみかはしてゐる。王^{わう}は

見るよりクワツと怒り、

「不義者見つけた、そこ動くな」

と手槍を以て立ち向かへば、千草姫は王の手に取り付き、

「王様、少時お待ち下さいませ。この神柱は決して國に仇する悪人ではございませぬ。大足別に脅迫され、心にあらぬ詐りを申し立て、この城内に忍び込み、妾

に事情を打ち明し、救ひを求めてゐる者でございませぬ。今このキューバーをして、

神主となし大神に國家安泰の祈願をし、凱旋の御禮を申し上げ、直會の神酒を頂

かせてをつたところでございます。必ず必ず誤解のなきやうお願い申し上げます」

と落涙しながら言葉さかしく辨解する。ガーデン王も忠實なる姫の言葉を疑ふに

由なく、そのまま差許すこととなり、己が居間へと歸りゆく。高姫の靈と憑り變

つた千草姫はキューバーに向かひ、

「コレ、キューバーさま、貴方は本當に危ない事でございましたよ。妾も王様の

お出でになつた時はどうなる事やらと、大變に心をもみました」

キューバーは慄ひながら、

キューバーは慄ひながら、

「全くだ、お前のために大切な命が助かつたのだ。しかしながらどうだらう、大足別將軍は脆くも敗走した様子だし、遠からず私は當城を追出さるるに違ひない。さうなれば戀しいお前と添ふ事が出来ぬ。何とかして夜陰に乘じ、この城内を脱け出す心はないか」

千草「ホホホホ、キューバー様の氣の弱いこと、そんな御心配がいらりませうか。王様は私の美貌にゾツコン惚れこんでゐられますよ。あなたは何處までも救世主と名乗つて、神さまいぢりをしてゐて下さいませ。なにほど王様が御立腹遊ばさうが、重臣が何と申さうが、千草姫此世にあらむ限りは、貴方様に指一本さえさせませぬ。しばらくは兩人とも猫をかぶり、時期の至るを待つてこの王城を奪ひ、七千餘國の覇者とならうではございませぬか」

キユ「成るほど、そいつア面白からう。そんなら姫の仰せに任せ、この城内に永久に止まる事としやう」

千草「ハ、さうなさいませ」

かく話す時しもチウイン太子は軍功を誇り顔に、王女チンレイおよび右守の娘

ハリスと共にドアを開いて入り来たり、

母上様、御無事でお目出たうございます。おかげを以て敵軍を撃退いたしました。どうかお喜び下さいませ」

千草「ヤ、そなたは太子、天晴れお手柄お手柄。そなたこそトルマン國の柱石、ガーデン王の嗣子として恥づかしからぬ偉丈夫だ。サア草臥れただらう、ゆつくり休んで下さい。そなたはチンレイ、ハリス、よくマア女の身をもつて凜々しい武者振り、母も感じ入りました」

太子は妖僧キューバーを見て目を丸くしながら、

母上様、ここにゐる坊主はスコブツエン宗の邪教を開き、大足別の軍勢を導いたる悪僧ではございませぬか。かかる魔者を何故お居間に侍らせ、優待遊ばすのですか。チウイン、その意を得ませぬ」

千草「いかにも此方はキューバー様に違ひない。しかしながら、大足別が手先となり當城へ談判にお越しになつたのも、やむを得ぬ事情あつてのこと、この母がとつくとキューバー様の心底を調べ、大足別の秘密を探り、キューバー様の應援

によりて無事に敵を撃退する事を得たのだ。この母が保證するから、必ず必ず疑うてはなりません。チンレイもハリスも必ず誤解しちやなりません。母が證據だから……」

ハリス「ハイ、恐れ入りました。太子様、王女様は申すに及ばず、妾のごとき孱弱き女の身として戦陣に立ち、勝利を得たのも神様のお蔭、キューバー様の御盡力の致すところでございます。しかしながら吾が父右守は如何なりましてござりまするか」

千草「右守殿は國家のため犠牲者となつて國替へ遊ばしたよ。キツと神様に導かれ、天國にお出でになつてゐるだらう。必ず必ず心配いたされな。千草姫が其女の身は引きうけて世話を致すから……」

ハリスは「ハイ」と言つたきり、父の死を聞いて驚愕し、其の場に氣絶してしまつた。チウイン太子は水よ薬よと種々手を盡し、漸くにして息ふき返さしめ、吾が居間をさしてチンレイと共に伴れ歸り行く。

(大正一四・八・二三 舊七・四 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第二篇 千種蠻態

第九章 針魔の森（一七七六）

東西南の三方に 大海原を圍らして

突出したる月の國 世界最古の文明地

七千餘國の國王は おのおの鎬を削りつつ

バラモン教や印度教 三五教やウラル教

その外數百の宗教が 互ひに覇をば争ひつ

解脱や涅槃や無よ空よ 靈主體從體主靈從

彌勒成就や神政の 再現などといろいろと

主義や主張をふりまはし 思想の混亂絶え間なく

中にも大黒主神は

ハルナの都に割據して

右手に劍を携へつ

左手にコーラン説きながら

難行苦行のありだけを

信者に強ゆる暴状は

天地も許さぬ惡邪教

改めしめて國民の

苦痛を除き助けむと

主の大神の御言もて

照國別は梅公や

照公司を伴ひて

河鹿峠を打ち渡り

葵の沼に立ち向かひ

十五の月に心膽を

洗ひ清めてデカタンの

大暴風に襲はれつ

大高原を進み行く

デカタン高野の中心地

トルマン國は昔より

ウラルの教を信奉し

神の教のそのままの

政治を布きて來たりしが

月行き星は移ろひて

思想は日に夜に惡化しつ

ウラルの教は日に月に

衰へしより虚に乗じ

バラモン教やスコ教や

盛んに跳梁跋扈して 國民性は三分し

國運危ふくなりければ あまり信仰強からぬ

トルマン王も目を覺まし やうやく神を崇敬し

國人たちに模範をば 示さむものと思ふをり

スコブツエン宗の教祖と 自ら名乗る妖僧が

大黒主の派遣せし 大足別と結託し

トルマン城を粉碎し スコブツエンの根據をば

常磐堅磐に固めむと あらゆる手段を回らして

警備少なき國情に つけ入り暴威を揮ふこそ

實に怖ろしき限りなり ガーデン王や千草姫

右守左守の老臣も 心を痛めて國防の

協議に頭を悩めしが 左守右守の忠臣は

刃の錆となりはてて トルマン國の柱石を

失ひたるぞ是非なけれ 照國別に守られて

チウイン太子たいしの率ひきゐたる 二千にせんと五百ごひやくの精兵せいへいは

トルマン城じやうを十重とへ二十重はたへ 圍かこみて王城わうじやう威喝ゐかつせし

大足別おほだるわけの全軍ぜんぐんの 背後はいごを衝ついて一齊いつせいに

總攻撃そうこうげきを始めはじける この有様ありさまを見みるよりも

ガーデン王わうは雀躍こをどりし 城兵じやうへい五百ごひやくを指揮しきしつつ

大足別おほだるわけの大軍たいぐんを 前後ぜんご左右さいうより打ちまくる

驕おこりきつたる敵軍てきぐんは 不意ふいの援兵えんぺいの襲來しふらいに

あわてふためき馬うまを捨すて 武器ぶきをも捨すてて四方しはう八方はつぱう

命いのちからがら逃にげながら ちちらこちらの家々いへいへに

放火はうくわしながら野良犬のらいぬの 遠吠とほほえなして隠かくれける

トルマン城じやうを包つつみたる 醜しこの村雲むらくもやうやくに

晴はれて天日てんじつ晃々わうわうと 輝かがやき玉たまふ神世みよとなり

國民こくみん上下じやうげの歡聲くわんせいは 一度いちどに湧わきて天地あめつちも

搖ゆるがむばかりの勇いさましさ 風塵ふうぢん全まく治をさまりて

ここにガーデン刹帝利

忠義のために斃れたる

左守右守の英霊を

まづ第一に慰めて

感謝の意をば表せむと

ハリマの森の奥深く

社殿を造りて祀り込み

ハリマの宮と名づけける

そもこの清き森林は

幾千年を経たりてふ

苔むす老木鬱蒼と

晝なほ暗く思ふまで

立竝びつつ吹く風に

ゴウゴウ枝を鳴らしつつ

世の太平を謳ひゐる。

ここに照國別司

ガーデン王や太子をば

率ゐて祭の長となり

祝詞の聲も朗かに

唱へ上げむとする時に

千草の姫の寵愛を

獨占したるキューバーは

肩で風きり傲然と

照國別の前に出で

口を極めて祭禮の

儀式に缺點ありとなし

罵詈嘲弄を極むれば

チウイン太子は腹を立て

妖僧えうそうキユーバーを引捕ひきとらへ 縛ばくして籐丸籠とうまるかごに乗のせ

城内じやうないさして歸かへりけり 千草ちくさの姫ひめはチウインが

この行動かうどうを聞きくよりも 髪逆かみさかだ立てて怒いかり立たち

一旦いつたん平和へいわに治をさまりし トルマン城じやうはここに又また

再びふたたび黒雲塞こくうんふさがりて 又またもやお家いへの大騒動おほさうどう

惹起じゃくきしたるぞ是非ぜひなけれ 又またあ惟神かむながらかむながら々々

神かみのまにまに瑞月ずいげつが 口述臺こうじゆつだいの浮船うきぶねに

安臥あんくわしながら由良湊ゆらみなと 日本海にほんかいの怒濤どたうをば

眺めながながらに述のべて行く 昔むかしの神代かみよの物語ものがたり

守まもらせ玉たまへと主すの神かみの 御前みまへに祈いのり奉たてまつる

ああ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたまの恩賴ふゆを賜たまへかし。

ガーデン王わうは、不意ふいに起おこつたバラモン軍ぐんの攻撃こうげきに周章狼狽しうしやうらうはいの結果けつくわ、右守司うもりのかみのス
マンチーを誤あやまつて手てにかけ、忠義一途ちうぎいちづの老臣左守司らうしんさもりのかみは陣中ぢんちゆうに倒たふれ、幸さいはひに敵軍てきぐんを

撃退し、ヤヤ安堵したりとは言へ、ハルナの都の大黒主この報を聞かば、又もや何時捲土重来、吾が都城を屠らむも圖り難し、一旦は照國別宣傳使の神護とチウイン太子の智謀と、勇將ジャンクの活動によつて、大勝利を得たるも、かかる戦國に國を立つるは到底武力のみにては叶ひ難し、まづ第一に大神を祀り、次いで忠臣義士の靈魂を齋き、國民に信仰の模範を示さむ……と照國別に乞ひ、ハリマの森のウラル彦を祀りたるお宮の傍に「國柱神社」と言ふ祠を建て、左守右守の英靈を鎮祭する事となつた。

ガーデン王、チウイン太子、ジャンクをはじめ城内の重臣は各自玉串を獻じ、照國別の齋主のもとに無事祭典の式を終らむとするや、キューバーは三五教の神司照國別が齋主となりしことを非常に憤慨し、千草姫の寵を得たるを力として亂暴至極にも祭壇に駆け上り、照國別の冠を叩き落とし、祠の前に立ちはだかり、大音聲、

「アツハハハハハ、トルマン城の危急を救ひ、神謀鬼策を廻らし王家を救ひたるは、バラモン尊天の神力を充たしたるスコブツエン宗の教祖キューバーでござる。

そもそもこのお宮はウラル彦の神、盤古神王を祀りあり。然るに天下を亂す惡神
かむすさのをのみこと
神素盞鳴尊の部下なるデモ宣傳使をして齋主たらしむるとは合點ゆかず、神明に
たいおそ
對し畏れ多からむ。何者の癡漢ぞ、刹帝利の聰明を被ひまつりたる、ウラルの宮
はウラル教の宣傳使をもつて齋主とすべし。萬一異教の宣傳使をもつて齋主に當
らしむるを得るとすれば、なにゆゑ今回の殊勳者たるこのキューバーを除外し、
しんいそむ
神意に反いて不法の祭事を行ひたるか。祭典の主任は何人ぞ。いま此場に現はれ
てその理由を説明せられよ。照國別の冠の脆くも地上に落ちたるは、神明許させ
たま
玉はざる象徴なり。これを靈的に考ふれば、國王殿下の御身の危険を意味し、國
か
家の轉覆を意味するものでござる。一時も早く照國別一派を縛り上げ、彼が生血
をおほかみ
を大神の前に贄となし、ウラル彦の大神に謝罪いたされよ。天來の救世主、キュー
バーここに忠告仕る」
よ
と呼ばはつた。ガーデン王はじめ居並ぶ重臣たちは、あまり大膽なるキューバー
の宣言に呆れはて、照國別の返答いかにと固唾を呑んで待つてゐる。
て
照國別は少しも騒がず、冠を打落とされたるまま悠々として玉串を獻じ、祭官

一同を引き具し、トルマン城内さして歸らむとするや、キューバーは両手を擴げてその進路を遮りながら、

「こりやヤイ、デモ宣傳使、首がとんだ以上はもはや城内へ立入る事は罷りならぬぞ。ヤアヤア城内の兵卒ども、彼を引捕へて牢獄に投げ込まれよ。彼はトルマン國の仇敵でござるぞ。神の言に間違ひはござらぬ」

と呼ばはれども、ガーデン王やチウイン太子の一言の命令もなければ、誰一人として手を下すものもなく、照國別一行はソロリソロリと進み行く。キューバーは両手を擴げながら後ろ向けに歩かねばならなくなつた。この時チウイン太子は見るに見かね、

「ヤアヤア、ジャンク殿、狼藉者のキューバーをフン縛り城外の牢獄に投げ込まよ」

と下知すれば、ジャンクの部下は寄り集つてキューバーを高手小手に縛め、牢獄さして引立てて行く。群集の痛快を叫ぶ聲、ハリマの森も裂くるばかりに高く聞こえて來た。

城内の重臣を初めトルマン市の老若男女もこの祭典に参拜してゐたが、妖僧キ
ユーバーが、チウイン太子の命によつて群集の前にて縛めの繩を受けたるを見て
大いに喜び、口々に罵り合つてゐる。

甲「オイ、何と痛快ぢやないか、何時やらお前と俺との話をしてをつた時、

あの妖僧奴、どこからともなく現はれ來たり、「いや、その方は今穩かならぬ事
を言うてをつたぢやないか。姓名は何といふ、住所を聞かしてもらひたい」とい
つた糞坊主だよ。ホントに、いいザマぢやのう」

乙「ウン、さうさうあの時、何だつたね、「俺の名は俺だ、友人の名は友人だ、
坊主はヤツパリ坊主だ」と吐して一目散に畔道さして逃げたところ、執念深くも
何處までも追跡しやがつたぢやないか。大黒主を傘に着て、威張り散らしてをつ
たが、今日のザマつたら、ないぢやないか。こんな事でも見せてもらはなくちゃ、
俺たちは胸中に鬱積してゐる憤怒の焰が、消える事がないぢやないか、ハツハハ
ハハ」

甲「そいつも痛快だが、あの妖僧奴、ちよつと噂に聞けば 殊のほか寵愛

され、刹帝利を眼下に見下し、大變な威勢だといふ事だよ。戦争が治まつてから十日もならないのに、もはや自分の天下のやうに振舞ふんだから、あんな奴を助けておいたらどんな事をさらすか分つたものぢやない。彼奴は屹度の保護によつて日ならず出獄し、再び城内に暴威を振り、吾々國民を層一層苦しめ、生血を搾るやうな事をさらすだらう。吾々は主義のため、同胞の生活安定のため、このままに見逃す事は出来ぬぢやないか」

乙「ウン、そらさうぢや。しかしながら慌てるには及ばぬよ。また機會が到來するから。其の時はその時の手段を廻らしさへすればいいぢやないか、イツヒヒヒ」

ハリマの森の社は一直線に王城に續いてゐる。その間の距離二十五丁、道の兩方には家屋櫛比し、トルマン市中最も繁華の土地と稱せられてゐる。

甲乙二人はいつも、これよりこの市街に出没し、何事か計畫しつつあつた。

(大正一四・八・二四 舊七・五 於由良海岸秋田別莊 北村隆光録)

第一〇章 二教聯合（一七七七）

千草姫は、最愛のキューバーがハリマの森の祭典において、祭官の列外に立たせられ、照國別をして齋主となしたその處置に憤慨し、病ひと稱して城内深く閉ぢ籠り、刹帝利、チウイン太子の參拜あるにもかかはず、吾が居間に駄々をこねて寢込んでしまった。一方キューバーは何氣なく祭典を見むとて刹帝利に隨ひ、ハリマの森に来て見れば、新調の盛装を身に纏うて、照國別が齋主をやつてをる。一般の群集は、

「何と立派な宣傳使だ、ウラル教の中にもあんな神徳の高い宣傳使はなからう。今度の國難を救うて下さつたのもあの宣傳使ださうだ。それだから、今度のお祭りに王様の先に立つて齋主を勤めてゐられるのだ。ほんとに偉い生神ぢやないか。またスコブツエンのキューバーなんて、今まで偉さうに威張つてゐやがつたが、今日の態つたらないぢやないか。あの見容らしい態を見い。祭官の端にも加へてもらはず、玉串の獻上もさして【よう】もらひやがらぬぢやないか」

などと囁く聲が耳敏きキューバーの鼓膜に響いたので、キューバーは立腹のあまり俄かに逆上し、莊重なる儀式を蹂躪し、齋主の冠を擲きおとしたのである。それがチウイン太子の英斷によつて、彼は即座にふん縛られ、たちまち牢獄に繋がれてしまつた。こんな事とは夢にも知らぬ千草姫は、キューバーの一刻も早く歸れかすと、一時千秋の思ひをして待ち焦がれてゐた。

そこへガーデン王、照國別、照公、勇將ジャンク、チンレイ、ハリスその他の面々と共に萬歳を三唱しながら、玉座の次の間に歸つて來た。さうして今日の祭典の状況につき種々と談じ合ひ、特にキューバーが聖場を亂し、たちまち縛につき牢獄に投ぜられた事なぞまで、刹帝利の前にて興味を湧しつと話しながら、直會の宴が開かれてゐた。疑ひ深き千草姫は玉座の次の間に身を潛め、耳を澄まして聞いてゐたが、キューバーが亂暴を働き牢獄に投ぜられたと聞くより氣が氣でならず、どうかして照國別を排除し、出來得べくんば彼に難癖をつけ牢獄に投じ、キューバーの仇を打たむと瞋恚の炎を焦がしてゐる。刹帝利は上機嫌で、照國別に再生の恩を謝し、トルマン國の救世主とまで稱揚した。王は先づ杯を手に

しながら祝歌を謠ふ。

トルマン國は神の國

遠き神代の昔より

ウラルの彦の神靈を

齋き祭りて世を治め

來たりし事の尊さよ

さはさりながら世の中に

八岐大蛇や醜狐

荒ぶる鬼の身魂らが

やうやく首をもたげつつ

バラモン教やスコ教や

そのほか百の邪宗教

吾が神國に襲ひ來て

國人たちの魂を

支離滅裂に亂しつつ

敬神尊祖愛國の

誠心は消え果てて

ただ國人は我利我欲

形の上の寶のみ

豺狼の爪牙を磨きつつ

あさりあるこそ悲しけれ

富者はますます富み榮え

貧者はますます窮乏し

怨嗟の聲は國內に

漲り果ててコンミニズム

アナアキズムやソシヤリズム　その他あらゆる悪思想
國の外より襲ひ來て　人の心はまちまちに
野獸の如くなりけり　かかる所へつけ込んで
大黒主の開きたる　バラモン教の別派なる
スコブツエン宗といふ邪教　燎原を焼く火のごとく
蔓延したるぞ是非なけれ　スコブツエン宗のキューバーは
大黒主の命を受け　吾が國內に根據をば
定めて日に夜に活躍し　吾が官民を睥睨し
暴威を揮ひみたりしが　なほ飽き足らずバラモンの
大足別と結託し　トルマン國を手に入れて
七千餘國の月の國　片つ端から蹂躪し
野望を達成せむものと　企らみみたる憎らしさ
大足別の軍隊を　率ゐて王家を威喝なし
思ひもかけぬ此の度の　軍を開き國民を

苦しめ難ませツウツウしくも 吾が城内に忍び入り

千草の姫の辨舌に 捲き込まれては急激に

進路を轉じ城内の 味方とかはりし早業は

實に不思議の手品師だ へぐれのへぐれのへぐれむしや

へぐれ神社の身靈だろ 彼は城内に現はれて

表面忠義をよそほへど なかなか油斷のならぬ奴

それゆゑ此度の祭典に 彼をば退けわが國を

助け給ひし三五の 照國別の宣傳使

御苦勞ながら齋主をば 願ひ奉りし次第なり

ああ惟神々々 ウラルの神の御神力

三五教を守ります 大國治立大御神

神素盞鳴の大神の 高き御稜威に守られて

左守右守の二柱 いよいよ國の守り神

千代に八千代に永久に 納まりますぞ尊けれ

キューバーの司はこの體を 見るより痛く腹を立て
 亂暴至極に祭壇に かけ登りつつ師の君の
 冠をやにはに突落とし なほも惡言暴語をば
 吐き散らすこそ憎らしき チウイン太子の命令に
 ジヤンクの司現はれて かの妖僧を縛り上げ
 一先づ牢獄に投げ込みて キューバーが心のどん底ゆ
 前非を悔ゆるそれまでは 閉ぢ込めおかむ吾が心
 アア勇ましや勇ましや トルマン國は今日よりは
 三五教とウラル教 二つの教を遵奉し
 世の大本の大神を 齋き奉りて國民を
 導き行かむ頼母しさ ああ惟神々々
 神の御徳の有難き 神の恵みの尊けれ

照國別は言葉靜かに謠ふ。

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし 照國別てるくにわけもその昔むかし

ウラルの神かみの御教みをしへを奉ほうじて教をしへを傳つたへむと

名なも梅彦うめひこと賜たまはりて 龍宮洲りうぐうじまに打うち渡わたり

三年みとせの辛しん苦くも水みづの泡あわ やむを得えずして六人ろくにんが

棚たななし船ぶねに身みを任まかせ 大海原おほうなばらを渡わたりつつ

ペルシヤの海うみに來きて見みれば 暴風怒濤ばうふうどたうに惱なやまされ

九死きうしいつしやう一生いつしやうのその場ばあひ合あひ 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

日ひの出別でのわけの言靈ことたまに 危あやふき命いのちを助たすけられ

いよいよここに三五あななひの 神かみの教をしへに仕つかへつつ

神かみの御言みことを蒙かうむりて 照國別てるくにわけと名なを賜たまひ

産土山うぶすなやまの齋苑館いそやかた 珍うづの聖地せいちを後あとにして

教をしへを傳つたへ今いまここに トルマン國とくの危急ききふをば

救すくはむための御軍みいくさに 加くははりたるもウラル教けう

守まもらせ給たまふ大神おほかみの 清きよき縁えにしの引合ひきあはせ

人間界より眺むれば
 人間界より眺むれば
 教は二つに見ゆれども
 教は二つに見ゆれども
 誠の神は一柱
 誠の神は一柱
 何れもおなじ神の道
 何れもおなじ神の道
 それゆゑ吾は三五の
 それゆゑ吾は三五の
 神の教にあればとて
 神の教にあればとて
 ウラルの宮の祭典に
 ウラルの宮の祭典に
 與り得ざる理由なし
 與り得ざる理由なし
 キューバーの司の言靈は
 キューバーの司の言靈は
 偏狹至極の世迷ひ言
 偏狹至極の世迷ひ言
 いざこれよりは萬教を
 いざこれよりは萬教を
 一つになして愛善の
 一つになして愛善の
 神の御徳を天の下
 神の御徳を天の下
 四方の國々宣傳し
 四方の國々宣傳し
 仕へ奉らむ吾が覺悟
 仕へ奉らむ吾が覺悟
 チウイン太子の御前に
 チウイン太子の御前に
 明して言擧げ奉る
 明して言擧げ奉る
 吾が誠心のありたけを
 吾が誠心のありたけを
 トルマン國は永久に
 トルマン國は永久に
 この王室は萬世に
 この王室は萬世に
 神の創りし此國を
 神の創りし此國を
 わたりて民の親となり
 わたりて民の親となり
 常磐堅磐に榮ゆべく
 常磐堅磐に榮ゆべく
 守らせ給へと願ぎ奉る
 守らせ給へと願ぎ奉る

開かせ給へと願ぎ奉る^{ひら たま ね まつ}』

チウイン太子はまた謠ふ^{たいし}。

この神國は永久に^{かみくに とこしへ}

榮え榮えて限りなく^{さか さか かぎ}

天津御空の星のごと^{あまつ みそら ほし}

濱の眞砂の數知れず^{はま まさご かず}

日に夜に國民繁殖し^{ひ よ くに たみはんしよく}

穩麥豆粟よく實り^{いねむぎまめあは みの}

トルマン國の中心を^{とく ちゅうしん}

清く流るる清川は^{きよ なが せいせん}

魚類多く繁殖し^{うろくず おほ はんしよく}

野にも山にも鳥獸^{の やま とりけもの}

數多住ひて國の富^{あまたすま くに とみ}

世界に冠たる目出たさよ^{せかい くわん とよ めで}

しかるに大黒主の神^{おほくろぬし かみ}

瑞穂の秋の豊の國^{みづほ あき とよ くに}

トルマン國を奪ひ取り^{とく うば と}

第二の根據を作らむと^{だいに こんきよ つく}

スコブツエン宗を持ち込みて^{しゅう も こ}

吾が國內を亂さむと^{わ こくない みだ}

大陰謀を企らみて^{だいいんぼつ たく}

妖僧キユーバーを派遣なし^{えうそう へいけん}

こたびの騒動の端緒をば 開きたるこそ由々しけれ

彼キユーバーの悪業は 天地も許さぬ大罪ぞ

さりとは言へど吾々は 神の教にある上は

彼が心の改愼を 認めた上に解放し

再び神の御使に 任せむものと思へども

吾が母君を誑かし 大御心を奪ひたる

その曲業は許されじ 照國別の宣傳使

照公司与計らひて 彼が體の處決をば

如何はせむと大神に 祈れば夢に現はれて

必ず明日はキユーバーを 縛れと命じ給ひけり

かくする上は母上の 心を怒らせ奉らむは

火を觀るよりも明らけし されども神の詔

國家のためを思ふ時 許しおかれぬ吾が立場

諾なひ給へ父君よ 照國別の宣傳使

ここにキューバーを縛りたる 理由を陣謝し奉る

三五教やウラル教 ここに兩教聯合し

トルマン國は言ふもさら 七千餘國の月の國

漏らさず落とさず國民に 尊き神の御教を

教へ傳へて一日も 早く神國成就の

大神業に仕ふべし ああ惟神々々

神の御前に赤心を 明かして誓ひ奉る

赤心籠めて願ぎ奉る

かく歌ふをりしも、夜叉のごとき勢ひ、満面朱をそそぎ、血眼になつて現はれ
來たり、刹帝利の右に憤然と座を占めたのは王妃千草姫であつた。一座は千草姫
の突然の出現によつて一種異様な空氣に包まれてしまつた。

(大正一四・八・二四 舊七・五 於由良海岸秋田別莊 加藤明子録)

第一章 血臭姫（一七七八）

千草姫は満座をキヨロキヨロ見まはしながら、瞋恚にもゆる胸の火をジツと抑へ、わざと笑顔をつくり、特に慇懃に両手をつかへて、首を二つ三つ左右に振りながら、屈んだまま顔を上げ、額と腮とをほとんど平行線にしながら、

「これはこれは吾が夫ガーデン王様をはじめ、智謀絶倫の勇士チウイン太子、野武士の蠻勇ジャンクの爺さま、三五教の宣傳使雲國別オツと違つたピカ國別、また違つたデルクイ別とかいふ神司、その他のお歴々の方々へ今日の御祝儀、目出たうお祝ひ申します。いよいよ之にてトルマン國は天下泰平、萬代不易の基礎が定まることと慶賀に堪へませぬ。時にスコブツエン宗の名僧トルマン國の救い主、キューバー殿は如何いたされたか。チウイン太子に對し、この母が恐れながら一言訊問に及びます。何といつても親と子の仲、決して遠慮は要りませぬ。サ、早く實状を述べさせられよ」

この言葉にチウイン太子は言句も出でず、「ハアハア」と言つたきり俯むひて

しまつた。

千草「ホホホホホ、これ倅チウイン殿、最前もいふ通り、親と子の仲、隔てがあつては家内睦まじう治まりませぬ。其方はこの母に對し、必ず必ず不孝の振舞はございますまいな」

チウイン太子はますます言句に詰り、「ハ、ハ」と言つたきり、俯むひてしまつた。ガーデン王はキリリと目を釣上げ、

「ヤ、千草姫、倅に問ふまでもなく餘が逐一説明しやう、トクと聞け。かれキューバーなる者は不敵の曲者、神聖無比なる大神の祭典に際し、照國別様の大切なお冠に手をかけ、群衆の前にて赤恥をかかさむとしたる亂暴者、餘はその場において切つて捨てむかと思ひしかども、何をいつても大神の御前、血をもつて聖場を汚すも恐れ多し、時を待つて誅伐せむと控えをる折りしも、キューバーが不敵の行動ますます甚だしく、口を極めて宣傳使を罵詈謗し、兩手を擴げて行列の妨害をなすなど、言語に絶したるその振舞ひ、見るに見かねてチウイン太子はジャックに命じ、キューバーを捕縛し、獄に投じておいたのだ。城内の安寧秩序を保

つため、最も時宜に適した處置と餘は心得てゐる」

千草「ホホホホホ、いかにも亂暴者を縛り上げ、獄に投じ玉ふは國法の定むるところ、これについて千草姫一言も異存はございませぬが、かれキューバーだつて、もとより悪人でもなく、狂亂者でもなからうと存じます。彼としてかかる暴擧に出でしめたるについては、何か深き原因がなければなりません。輕率に外面的行動のみを見て、一應の取り調べもなく、所もあらうに大神の御前において、不遜きはまる罪人を出だし玉ふとは千草姫心得ませぬ。刹帝利様、愚鈍なる妾の得心が行くまで御説明を願ひませう」

王「喧しういふな、汝の知るところでない。餘は餘としての考へがある。女の出しやばる幕でない。サ、トツトと汝が居間に立ち返れよ」

千草「ホホホホホ女の出しやばる場合でないとは刹帝利様、ソラ何といふ暴言でございます。王様は國民の父、王妃は國民の母でございますよ。昔の神代においても伊奘諾命伊奘册命二柱、天の御柱を巡り合ひ、なり餘れる所と、なり合はざる所を抱擁歸一遊ばし、天下の神人を生み玉うたではございませぬか。男子は

外を守る者、女子は内を守る者、何と仰有つてもこの城内の出来事、千草姫の權限にございますよ。もし妾を排斥遊ばすならば、トルマンの國家は風前の燈火、なにほど立派な國王様だとして王妃の内助なくして、一日も國が保たれまするか。よくよくお考へなされませ。それにも拘らず、ウラルの神様の御祭典に當り、ウラルの宣傳使を一人も用ひ玉はず、大神の忌みきらひ玉ふ曲神の教を奉ずる三五の宣傳使を拔擢して齋主となし玉ふは、實に天地の道理を紊したりといふもの。ひそかに承れば彼照國別はウラル教の謀叛人、中途において三五の邪教に沈溺せし者、ますます神のお怒りは甚だしかるべく、何時いかなる災の、神罰によつて突發するかも知れますまい。またウラル教以外の異教徒をもつて、齋主となすの已むを得ざる場合ありとせば、なぜ國難を救ひたる彼キューバーを重用し、齋主をお命じなされませぬか。邪臣を賞し、逆臣を戒むるは政治の要訣、靈界さへも天國地獄がございますぞ。今度の戦ひにおける第一の勳功者を除外し、神の御前において彼に恥を與へしをもつて、かれキューバーは悲憤のあまり、かかる暴擧に出でたものと考へるよりほか餘地はありませんまい。いや決して決してキュー

バーの意志ではなく、ウラル教の大神、盤古神王の彼の體を藉つてのお戒めに相違ございませんまい。かかる忠臣義士を牢獄に投ずるとは以ての外、千草姫一向合點が参り申しませぬ。キューバーを牢獄に投じ玉ふに先立ち、何ゆゑ照國別一派を投獄なさりませぬか。かかる明白な理由を無視し、一國の王者で依怙の沙汰を遊ばすにおいては、これより賞罰の道亂れ、刑政行はれず、國家は再び混亂の巷となるでございませう。照國別は實に微弱なる教派の一宣傳使、キューバーは黒主の御覺目出たしといふスコブツエン宗の大教祖でございませぬか。萬々一吾が國運衰へ、再び大黒主、この度の戦争の恥辱を雪がむと、數萬の兵を引きつれ押しよせ來たらば何となされます。その時に當つて最も必要なる人物は、キューバーを措いて外にはございませぬ。それゆゑ妾は飽くまでも彼を懐柔し、まさかの時の用意にと、平素より歡心を買ひおき、國難を救ふべく取計らひをるのでございませぬ。かかる妾が深遠なる神謀鬼策も御存じなく、勢ひに任せて、照國別の肩をもち、キューバーを獄に投ずるとは、何といふ拙い遣り方でございませぬか。妾はたとへキューバーに少々の缺點ありとて、邪惡分子ありとて、左様な些

細な點まで詮索する必要はありますまい。彼さへ藥籠中の者として優待に優待を重ねて城内に止めおかば、大黒主なりとて、さうムザムザと本城へ攻めても來れずまい。たとへ不幸にして國難勃發するとも、大黒主の御覺めでたきキューバーを派遣せば、何の苦もなく平和に治まる道理ぢやございませぬか。トルマン國永遠平和のためにはキューバーを獄より引出し、刹帝利を始めチウイン太子、ジャンク等、九拜百拜してその罪を謝し、照國別を面前において縛りあげ、キューバーの遺恨をはらし玉はねば、吾が國家のために由々しき大事でござりまするぞ。またウル教と三五教の聯合は國策上最も不利益千萬でございます。速やかにこの聯合を破壊し、スコブツエン宗と聯合提携するにおいては、ハルナの都の大黒主の怒りも解け、吾が國家は安穩に、國民擧つて平和の夢を貪ることを得るでございませう。千草姫の言葉にこれでも異存がございまするか」

王「だまれ、千草姫、國家の危急を救ひ玉ひし照國別御一行に對し、無禮きはまるその雜言、もはや聞捨てならぬぞ」

千草「ホホホホホ、青瓢箪や干瓢や西瓜のやうな干からびた青い頭を並べて、

お歴々の御相談、よくマア國家を亡ぼすための立派な御行動を、この千草姫はるかに眺めて實にカンチン仕りますワイ。刹帝利様は老齡のこととて聊か精神御惱みあり、一々仰せらるることは正鵠を缺き玉ふは無理なけれども、倅チウインのごときは血氣の若者、かやうな道理が分らずして、どうして此の國家を保つことが出来やうぞ。いざ之よりは王様に退隱を願ひ、憚りながら千草姫女帝となつてトルマン國を治めるでございませう。まだ口のはたに乳の臭ひがしてゐるチウインごときは、到底妾の相談相手にはあきたらない、ホホホホホ」

チウ「母上に申し上げます。父ガーデン王があつてこそ貴女は王妃の位置について、國の母として政治に干與遊ばし玉ふことを得るのではございませぬか。父王が退隱されるとならば、母君は政治に干與する権利はございませぬぞ。そこをトクとお考へなさいませ」

千草「ホホホホ小賢しい、コレ倅、何といふ分らぬことを申すのだ。女が政治の主權者となることが出来ぬとは、ソリヤ誰に教はつたのだい。よく考へて御覽なさい。天照大神様は女神であらつしやるぢやないか。英國の皇帝はエリザベ

又といふ女帝が、太陽の没するを知らぬまでの大版圖の主權者となつてゐられたでないか。子の分際として母に口答へするとは不孝この上もなし。其方も此の上一言でも言つてみなさい。母の職權をもつて牢獄に投込みますぞ』
と言ひながら、ツと立上がり、疊ざわりも荒々しく吾が居間さして歸り行く。

刹帝利は餘りの腹立たしさと、照國別に対する義理から、千草姫を手討にせむとまで覺悟をきめてゐたが、また思ひ直してグツと胸を抑へ、齒をくひしばり慄ひつつあつた。チウイン太子も父の様子の常ならぬを見てとり、いよいよとならば、父の兩腕に取縋つて千草姫を助けむものと、心中に覺悟をきめてゐた。刹帝利はやうやく口を開き、

「照國別の宣傳使様、かれ千草姫は、先日來の戰爭に腦漿を絞つた結果、精神に異状を來たしてをりますれば、なにとぞ神直日大直日に見直し聞直し、寛大に御み宥しのほど願ひ奉りまする。穴でもあらば潛り込みたくありませんました」

と氣の毒さうにいふ。照國別は平然として、
「刹帝利様、その御心配は御無用でございます。決して千草姫様の御本心から仰

せられたのではございませぬ。これには少し理由がございますが、今日は申し上げるわけには行きませぬ。決して私は千草姫様のお言葉に對し、毛頭意に介してをりませぬ。どうか御安心下さいませ」

王「ヤ、それ承つて安心いたしました。何とぞなにとぞ末永く御指導を願ひ奉ります。時に照國別様、如何でございませうか、かれキューバーを嚴罰に處して、禍根を斷たむと存じまするが」

照國「私は人を助くる宣傳使、たとへ鬼でも蛇でも悪魔でも赤心をもつて臨み、誠の限りを盡し、誠の道に歸順させるが神の道、刑罰などは不必要かと存じます。人は何れも神の精靈を宿したものの、人間で人間を審くなどとは僭上至極な行方、一刻も早くキューバーをお助けなさるが可からうかと存じます。さすれば千草姫様の心も和らぎ、家庭圓滿の曙光を認むるに至るでございませう」

王「なるほど、一應御尤もかと存じます。チウイン、其方はどう考へるか」

太「ハイ、私は天にも地にも替へがたい吾が母の意志に反き、かれキューバーを國民の面前において捕縛いたしました。これについては非常な決心を持つてをり

ます。彼が再び城内に入り、母と結託して權威を揮ふにおいては、吾が王室は風前の燈火も同様でございませう。宣傳使のお言葉なれど、こればかりは即答するわけには参りませぬ」

ジャンク「恐れながら、王様を始め太子様に申し上げます。何はともあれ、千草姫様のお心を汲取り、かれキューバーをお免しなさつたが可からうかと存じます。萬々一再び脱線の行動を取るにおいては、容赦なく再び投獄すれば可いぢやございませぬか。及ばずながら、このジャンク、餘生を王室に捧げ、一身を賭して國家を守る考へでございませうから」

王「イヤ、それを聞いて安心いたしました。左守、右守の兩柱ともに、このたびの戦ひにおいて他界なし、棟梁の臣なきを心ひそかに歎いてゐた矢先、智勇絶倫なる汝が、一身を賭して都に止まり、吾が國家を守つてくれるとあらば何をか言はむ。キューバーの處置は汝に一任する。よきに取り計らへよ」

ジャンク「早速の御承知、有難う存じます。太子様、ジャンクのこの處置に就いては、チツとばかりお氣に入りますまいが、ここは少時この老臣にお任せ下さいま

せ
チウ 『餘はこの問題については何も言はない。餘は餘としての一つの考へを持つてゐる』

照國別は立ち上り、音吐朗々として歌ひ出した。

神が表に現はれて

善惡邪正を立分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

世の過ちは宣直せ

三千世界の梅の花

一度に開く神の國

開いて散りて實を結ぶ

月日と土の恩を知れ

此世を救ふ生神は

高天原に神集ふ

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ

誠まことの力ちからは世よを救すくふ

ああかむながらかむながら惟ただ神かみ々々

御み靈たま幸さちはへましませよ㊦

と謠うたひ了をはり、舞まひをさめた。この言こと靈たまに一同いちどうは勇いさみ立たち、何なに事ごとも神かみのまにまに任まかすこととなり、この宴えん席せきを無ぶ事じ閉とづることとなつた。

（大正一四・八・二四 舊七・五 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録）

第一二章 大魅おほみ勒ろく（一七七九）

ハリマの森もりの木こ蔭かげに覆ふく面めん頭づきん巾おほ大を男とこが二ふ人たり、口くち八はち臺たいに腰こしをかけ、ヒソビソと何なに事ごとか謀しめし合あはしてゐる。

レール、オイ、マーク、スコブツエン宗しゅうのキユーバーの奴やつ、チウイン太たい子いしさまの英えい斷だんによつて、小こ氣ぎ味みよくも、アアして牢らう獄ごくへ投なげ込こまれよつたが、しかし吾われ々われ

はこれを聞いて安心するこた出来ぬぢやないか。噂に聞けば、彼奴はラスプーチンのような代物で、千草姫の歡心を買ひ、何でも怪しからぬ事をやつてゐやがるといふ事だ。どうしてもかうしても牡鷄のコケコーを唄ふ時節だから、刹帝利の權威も、賢明なる太子の權威も蹂躪して、きつと千草姫が彼奴を救ひ出すに違ひない。さうなつたが最後、ますます資本主義の制度を布き、われわれ下層階級に對し、壓迫と搾取をもつて臨み、世に立てないやうな惡政を布くに違ひない。さうだから吾々は向上運動の代表者たる立場から、一時も早く彼奴を何とかしなくちや、枕を高くして寝ることが出来ぬぢやないか。かうして覆面頭巾の扮装でお前をすすめて出て來たが、決して強盜をやる考へぢやない。かれラスプーチンを今の内に屠つておかうとの考へから、お前をボロイ錢儲があるといつて、甘くこまでおびき出したのだ」

マーク「なアんだい、俺やまた二進も三進も生活難に追はれて立行かないものだから、たうとう汝が生地を現はし、今晚泥棒の初旅に出ようと思ひ、俺に應援を頼みに來よつたのだと早合點してゐたのだ。俺だつて怖い目をして、人家に忍び

入り、あるひは行人を掠めて、思つただけの金が取れるか、取れぬか分らないが、生死を共にしようとして約した友人の言葉でもあり、断る譯にも行かず、今日からいよいよ太う短う此世を暮す泥棒様になるのかなア……と因果腰を定めてやつて来たのだ。しかしお前の肚を聞いて俺も安心した。國家の毒蟲を驅除するは正に國士たる者の任務だ。ベットの行はれない世の中は改革も善政もあつたものぢやない。どうか一つラスプーチンを血祭りにしてブル宗教の心膽を寒からしめ、偽宗教家の腸をデングリ返してやらなけりや駄目だよ。俺達や別に亂暴な事をせなくて、ラマ階級の奴等に亂暴者として、怖がられてゐるのだから、何時どんな計畫を以てその穴へ陥れられ、宰相ベット未遂の嫌疑者として 本山へ拘引されるか知れたものぢやない。同じ事なら今の内に彼奴を屠つておかねば、彼奴が擡頭した時や、俺たちを向上會撲滅令とか、暴力團取締令とか、何とか彼とかくだらぬ法律を發布して、ますます俺たち仲間を苦しめ殺さうとするに違ひない。本當に彼奴が投獄されてゐるのを幸ひ、今晚は何とかして彼奴を奪ひ取り、暗がりですやモを絞める様にやつつけやうぢやないか』

レ「ヤ、面白い面白い、サアもう牢番の寢静まる時分だ。サア、行かう」
と二人は木蔭の暗を傳うて、トルマン城外の牢獄の裏門へと進んだ。

レ「オイ、なかなか此奴ア、ちよつと、壁が高うて飛越えるわけにもゆかず、困つたなア」

マ「どつかの軒下で梯子でも探して来て、入らうでないか。そして中へ入つたら最後、まづ第一に門の門を外し、何時でも逃出せるようにしとくのだぞ。これから俺がそこらの町家の軒を捜して梯子を盗んで来るから、お前はキューバーの在所を考へていってくれ。彼奴は魔法使ひだから、何時も青い火を空中に燃やすことを得意としてる奴だ。その魔術をもつて布教の手段としてゐるのだ。また彼奴ア、屹度その魔法を使ひ、牢番どもを驚かし、……此奴ア矢張り生神さまだといふ評判を立てさして、一日も早く出獄の手段を廻らしてゐるのに違ひないからかう」
レ「ウンそらさうだ。よく考へておかう」

かくしてマークは暗をぬうて暫く姿を隠した。レールは後に獨り言、
「あーあ、本當につまらないワ。俺たちは向上會の代表者となつてラマ階級を打

ち亡ぼし、本當に平和な世界を造らうと、今年で十年の間、一日のごとく寢食を忘れ、妻子は寒さと飢ゑとに泣いてるに拘らず、晝夜孜孜として活動して來たが、何といつても強い者の強い、弱い者の弱い世の中だ。三人寄つて話をしても直様番僧に取捉まれ、牢獄に打込まれるやうな險難な世の中だから、手も足も出せないワ。それにも拘らず、大黒主の廻し者たるキューバーの奴、このトルマン國へ出て「うし」やがつて、トルマン王家も國民も土芥のごとくこき卸し、大黒主の神徳を賞揚し、邪教を開いてますます吾々を苦しめようとしてゐやがつたが、賢明なるチウイン太子の英斷によつて、國民環視の前でふん縛られやがつた時の愉快さ、痛快さ。彼奴を縛つた時や、決して彼奴一人ぢやない。彼奴に買収される番僧、ラマ僧などは頭上に鐵槌を下されたやうなものだ。それにも拘らず、かれ妖僧を大奥方が寵愛してると聞いちや、吾々は最早黙過するわけには行かぬ。國家のためにこの逆賊を今夜の中に誅伐しなくちや取返しがつかぬ。また國難勃發し、われわれ國民を苦しめるに違ひない。あーあマークの奴、どうしたのだから。早く來ないかな。何となく、氣がせいて仕方ない。ぐづぐづしてると牢番が

目を覺まし、あべこべに自分たちが牢獄に打ち込まれるやうな事になつちや大變だがな
と呟いてゐる。

チウイン太子はジャンクの進言に仍つて、明早朝キューバーは放免されれば再び城内へ歸り來たり、又もや母の心膽をとろかし、城内を攪亂するに相違ない。彼奴を今夜の中に引張り出し、荒井ヶ嶽の岩窟に牢番をつけて閉ぢ込め置かむものと微行し來たり、沙羅雙樹の木蔭に身を潜めて考へてゐたが、覆面頭巾の曲者が二人をるので、千草姫の廻し者ではないかと耳を欬て、いよいよさうでない事が分つたので、やや安心の胸を撫で木蔭をツと立出で、言葉しづかに、チウイン「お前は何人ぢや。最前からの話を聞けば實に可い志、餘も大賛成だ。お前は向上會員と見えるが、到底一人や二人で彼キューバーを奪ひ出すわけにはゆくまい。餘はチウイン太子だが、これから門番を叩き起し、餘の權威をもつて門を開かせ、キューバーを引きずり出す考へだからお前も手傳つてくれ」
レ「ハイ、私はレールと申しまして、向上運動の代表者でございますが、いま太

子様のお言葉を聞いて、實に萬民のため欣喜に堪へませぬ。如何なる御用なりとも御申し付け下さいませ」

かく話すところへ、マークは長い梯子を擔げて、ハアハアと息はずませながらやつて来た。

マ「オイ、レール、たうとう梯子一本盗んで来た、サ、早く早く」

レ「ヤ、そりや御苦勞だった。しかしな、ここにチウイン太子様がお見えになつてゐるのだ」

マ「エ、エー」

と言つたきり、吃驚して地上に尻餅をつく。

チウ「ハハハハ、ヤ、お前も向上會員か、決して心配要らぬ。今この男と相談の上、キューバーを奪ひ取るべく考へてゐるところだ、安心せ」

マ「ヤ、賢明なる太子様、有難うございます」

レ「もし太子様、かやうに梯子が参りました以上は門番を叩き起すにも及びますまい。左様な事をなさいますと、あなたがキューバーを取り逃し遊ばしたことが、

千草姫様の耳に入るは當然、後の御迷惑が思ひやられますから、どうぞ太子様は此處に待つてゐて下さりませ。われわれ兩人、牢番が萬一抵抗すれば擲り倒しておいてでも、かれ悪魔を引きずり出して参ります』

太「なるほど、それも一策だ、一つ骨を折つて見てくれ。その代りに此の事が成功したら、きつとお前に褒美をやる』

レ「イヤ、めつさうな、萬民のために命を捨ててる私、褒美が欲しさにこんな危ない事が出来ませうか。それよりも萬民の叫び聲を、心をとめてお聞き下さいませ」

太「イヤ、餘も平素から民の聲を聞かむとし、いろいろと變装して市井の巷に入し、お前等の活動振りもよく知つてゐるのだ。精々活動してくれ。今は非常に妨害が強うて困るであらうが、やがて勝利の都も近づくだらう』

二人は梯子を傳うて猿のごとく塀を乗り越え、中より門の戸をソツと開けおき、どの牢獄にキューバーがあるかとよくよく伺へば、パツパツと青い火の玉のごとくきものが窓口から、消えたり【とぼ】つたりしてゐる……ヤ、的切りここ……と

近より見れば、二人の牢番が高躰をかい椅子にもたれてゐる。二人は牢番の腰に下げてゐる鍵をソツと取り、錠を外し、一人は中に入り、一人は牢番を監視しながら、キューバーを引出し來たり、ソツと門外に首尾よく伴れ出した。牢番はフツと目を覺せば、牢の戸は開いてゐる。自分の腰の鍵は盗まれて跡かたもない。にはかに「牢破り牢破り」と唖鳴り出した。この聲を聞付けて、牢屋の番人は一齊に目を覺まし、提燈や松火をさげて前後左右にかけ廻る。チウイン太子は二人に篤と言ひ聞かせ、荒井ヶ嶽の岩窟にキューバーを放り込み、レール、マークの兩人に澤山の金を與へて、ある時機までこれを警護せしむる事とした。二人は太子の旨を奉じ、祕密を守り、わが妻子にもこれを打明けなかつた。

夜中を過ぐれば翌日である……といふので、ジャンクは四五の役人に命じキューバーを放免すべく遣はし見れば、破獄の大騒動、是非とも王および千草姫に報告せねばなるまいと、王の居間を訪れ見れば、既にチウイン太子は王と共に何事か首を鳩めて囁いてゐる。

「ジャ」申し上げます。昨日お許を被りまして、かのキューバーを放免せむと、小

役人を遣はし調べ見れば、何人かに盗み去られ、牢屋の番人どもは周章狼狽いたしてをります。萬一かれ、ハルナの都へ逃げ歸り、大黒主の前に出で、數萬の兵士を拜借し、再び捲土重來いたせば忌々しき大事でございませば、人を今の中八方に派し、彼の在所を搜索致したく存じます」

王「および太子は平然として別に驚きもせず、

王「ナニ、キューバーが破獄逃走したと言ふのか。捨てとけ捨てとけ、別に心配するには及ぶまい」

ジャ「仰せではございますが、今の中かれの在處を突き止め、ハルナの都へ逃げ歸らないやうの手段を廻らさねばなりません。どうか此の儀を老臣にお命じ下さいませやう……」

太「ジャ、ジャンク殿、必ず御心配なさるな。餘に心當りがある。決して決してハルナの都へ逃げ歸るやうな事はさせぬ。ともかく餘を信じてくれ」

ジャ「外ならぬ太子様のお言葉、萬々拔目はございます。しからは老臣はこれにて下りませう」

千草姫は氣が立つて一目も眠られず、且つまた聽覺が非常に鋭敏と爲り、蚊の囁きでさへも、耳に入るやうになつてゐた。ドアを排して王の室に入り來たり、
「コレ倅チウイン、いま其方の言葉を聞けば、キューバーの身の上につき、何か確信あるものの如く言つてをたぢやないか。サ、母の權威をもつて飽くまでも詮索する。どこへ隠したのだ。有體に白状しなさい」
太「母上様、私がそんな事を知らう道理がございますか。今ジャンクの注進によつてキューバーの姿が見えなくなつた事を知り、大變に心配をしてゐたところでございますよ」
千草「いやいやさうは言はせませぬぞや。お前の言葉の端にチヤンと現はれてゐる。キューバーを隠した張本人はお前だらうがな」
太「これは怪しからぬ。苟くも太子の身をもつて夜夜中、牢獄などへ參れますか」
千草「ホホホホホ參れないお方がお出で遊ばすのだから妙だよ。そなたは太子の身をもちながら、何時も王様の目を忍び、市井の巷に出没し、下層階級と交際をしたり、賤しい女に戯れてるといふ噂だから、牢獄などへ行くのは朝飯前だよ。

そんな事を言つて、この千草姫、大「みろく」の生宮を胡麻化さうとしても駄目でござんすぞえ」

太「母上様、あなた妙なことを仰せられますな。今まで一度も聞いたことのない、

大「みろく」の生宮とは、誰に左様なことをお聞きなさいました」

千草「へん、お前らの青二才が分つてたまりますかい。この母はな、神様から聞

いたのだよ。この肉體は今日より改めて、下津岩根の大「みろく」様、三千世界

の救世主、日の出神の生宮でござんすぞや。チツポケなトルマン國の王妃だなん

て思つてもらつちや、この神柱もチツとばかり困りますよ。ホホホホホあのマ

ア、王様といひ、ジャンクといひ、太子といひ、約らなささうなお面わいの。そ

れほどこの千草姫が、にはかに神柱になつたのが不思議でございませうか。三千世

界一度に見えすく日の出神の生宮でございませうぞや」

太「あ、左様でございませうか。ソラ誠に結構、照國別様が當城へお越し下さいま

したその神徳によつて、母上様も俄かにお神懸におなり遊ばし、日の出神様とい

ふやうな、立派なエンゼルの肉宮に御出世遊ばしたのでございませう。ついては

屹度きつと キューバーの在處ありか ぐらゐはお分わかりになるでございませうな』

千草ちくさ 『きまつた事ことだよ。第一靈國だいいちれいこくの天人てんにん、底津岩根そこついはねの大おほ「みろく」の太柱ふとばしら、三千

世界の救世主きうせいしゅ、日の出神でのかみの肉宮にくみやだもの』

太たい 『成なるほど、それは結構けつこうな神様かみさまでございます。しからばどうかキューバーの在

所かをお知しらせ下くださいませ。それさへお分わかりになりますれば、母上ははうへを日ひの出神でのかみの生いき

宮みやと奉たてまつり、父上ちちうへさま様も喜よろこんで、政治萬端せいちばんたんをお任まかせになるでございませう』

千草ちくさ 『ホホホホホ、小賢こぎかしい、コレ倅せがれ、お前は母ははをやり込こめるつもりだな。未

だこの母ははを疑うたがつてゐらつしやるのか、日ひの出神でのかみに間違まちがひはござらぬぞや。神かみは決けつ

して嘘うそは申まをさぬぞや。底津岩根そこついはねの大おほ「みろく」様さまの太柱ふとばしらに對たいして、易見えきみか何なんぞの

やうにキューバーの在所ありかが分わかつたら、日ひの出神でのかみの生宮いきみやと信しんじます……などと、へ

ン馬鹿ばかにして下くださるな。相應さうおうの理りによつて、この千草姫ちくさひめは第一靈國だいいちれいこくに感應かんおうし、根

の國底くにそこの國くにに比ひすべき牢獄らうごくなどは決けつして覗のぞきませぬぞや。左様さやうな所ところへ天眼通てんがんつうを使つか

はふものなら、折角せつかくの智慧證覺ちゑしやうかくは鈍にぶり、惡魔あくまの巢窟さうくつとならねばなりません。大だいそ

れた第一靈國だいいちれいこくの天人てんにんの靈みたまに、牢獄らうごくに投とうじてあつた者ものの在所ありかを知らせ……などは、

物の道理を知らぬのにも程があるぢやないか、ホホホホホ。何ほど賢いといつても、現界の事はともかく、靈界の消息は到底分りますまいがな。サアこれから此のトルマン國は底津岩根の大「みろく」の太柱が現はれ、國政を握り、三千世界を五六七の世に致す根源地と定めるから、左様お心得なされ。肉體の上からは、王様は千草姫の夫なれど、神から言へば奴も同然、天地霄壤の差異がございますぞや。これからの政治は神がいたします。善惡邪正はこの生宮が審かねば駄目ですよ。昨日も照國別の宣傳使が謠つてみたぢやありませんか。神が表に現はれて善惡邪正を立分ける……と。いよいよ千草姫の肉體を機關とし、第一靈國の天人の靈に大「みろく」様の精靈を宿し、日の出神となつて現はれ給うた、三千世界の救世主だぞえ。ホツホホホあのマア刹帝利殿の六かしい面わいの、チウインの情けなささうな面付、ウツフフフフフと笑ひこけてしまつた。

(大正一四・八・二四 舊七・五 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第一三章 喃悶題（一七八〇）

千草姫は左守司の妻モクレン同じく娘テイラ姫、右守の娘ハリスを膝下近く呼び寄せ、薬籠中のものとなしおかむと、あらゆる歡待を盡してゐる。モクレン、テイラ、ハリスの三人は恐る恐る千草姫の御殿に卓を圍んで千草姫が心からの馳走を頂いてゐた。千草姫は一同に向かひ、

「これ、モクレンさま、其方は國家のために一命を捨てた左守様の奥様だから、女とはいへトルマン國にとつては國家の柱石、誰よりも彼よりも大切にせなくてはならない方だから、今後も國家のため妾と共に十分の力を盡して下さいや」

モクレン「ハイ、有り難き姫様のお言葉ではござりますが、お見かけ通り、もはや老齡、何の用にも立ちませぬのでお恥づかしうござります」

千草「これこれそりや何をまた、氣の弱い事を言ふのだい。お前さまもトルマン國において第一人者たる左守司の未亡人ぢやないか。夫が討死された以上は、賢母良妻の實を擧げ、夫にまさる活動をせなくちや濟みますまい。これからこの千

草姫が其方に對し、無限の神徳を與へるから力一ぱい千草姫のため活動して下さい。それが、つまり王様のためとなり、またトルマン國一般のためともなるのだからなア」

「ハイ、有難うござります。妾のやうな年をとつた老耄、何の用にも立ちますまいが、姫様の御用とあれば否むわけには行きませぬ。何なりと御用仰せつけ下さいますれば力のあらむ限り、きつとおつとめ致しませう」

「イヤ、満足々々、それでこそ左守の妻モクレン殿、この千草姫は今までの千草とは聊か變つてゐますから、その考へでゐて下さいや。決してこの千草姫は發狂はしてをりませぬ。いよいよ今日より三千世界の救世主、底津岩根の大【みろく】の靈體、第一靈國の天人、日の出神の生宮でござるぞや。今日まではトルマン國ガーデン王の王妃として内政に干與いたしてをつたが、もはや左様な小さい事は出来ませぬ。天の根本の根本の大【みろく】の靈體として、この地上に現はれた以上は、七千餘國の月の國は申すに及ばず、三千世界を立替へ立直し遊ばす日の出神の活動。其方も餘程しつかりして下さらぬと、此世の大望、立替へ立直しが

おそくなりまますからな」

千草姫ちくさひめのこの意外いぐわいの言げんにモクレンも、テイラも、ハリスも呆あきれはて、たがひに顔かほを見合みあせて舌したを捲まき、目めを瞠みはつた。

千草ちくさ「これ、ハリス、お前まへはいま舌したを捲まいてみたぢやないか。妾わらはの言いふ事ことが、それほど可笑をかしいのか。なぜ眞ま面目じめに神かみの申まをす事ことをお聞ききなさらぬのだい」

ハリス「ハイ、誠まことに畏おそれ入りましてござります。王妃わうひさま様とばかり今いまの今いままで存ぞんじましたのに、途方とほうもない大おほき大おほ「みろく」様さまの御靈體ごれいたいとやら、心小こころぢひさき吾々われわれには眞偽しんぎに迷まよひ、茫然ぼうぜんと致いたしました」

「オツホホホ、そらさうだろう。三千世界さんぜんせかいの救世主きうせいしゆと、トルマン國こくの右守司うもりのかみの娘むすめとを比較ひかくすれば、象ざうと黴菌ばいきんとよりまだ懸隔けんかくがあるのだから、分わからぬのも無理むりはない。然しかしながらこの千草姫ちくさひめを何なんと思おもひますか、よもや狂人きちがひとは思おもはないでせうな」

「勿體もつたいない姫様ひめさまを、どうして狂人きちがひと見みられませう」
千草ちくさ「そんなら、其方そなたこの肉宮にくみやを、どう考かんがへるか」

と矢つぎ早やに問ひつめられ、

ハリ「ハイ、到底黴菌の分際として宇宙大の神様のこと、御神徳高き王妃様の御身の上が分つて堪りませうか。ただ有難し勿體なしと申すより外に言葉はござりませぬ」

「なるほどなるほど、そらさうだ。お前のいふ通り、神の事は人間の分際で分りさうな事はないからな。この千草姫を「みるく」の太柱、日の出神の生宮と信じた以上は、何事でも絶対服従を誓ふでせうな」

「ハイ、絶対服従を誓ひます。生宮様のお言葉ならば、たとへ山を逆様に登れとおつしやつても登つて見せませう」

「ホホホホさすがは右守の忘れ形見だけあつて偉いものだな。これからこの生宮が三千世界の救世主と現はれるについて、其方を立派な三千世界にまたとない結構なお方とし、萬古末代名の残る御用を仰せ付けるほどに……」

「ハイ、有難うござります。何分よろしくお願ひ申します」

千草「ウン、よしよし、大「みるく」の太柱、たしかに承知いたしましたぞや。次に

は左守の娘テイラ殿はこの生宮を何と心得てござるか、御意見を承りたいものだ
な」

テイラ「ハイ、妾は、どう致しましても、ガーデン王の王妃様とより思ふことが
出来ませぬ。日の出神とか底津岩根の「みろく」とかおつしやりましたが、今日
まで一度もまだ承つた事がござりませぬので、心の中にて眞偽の判別に迷うてを
ります」

「人間の分際として恐れ多くも神に對し、眞偽の判別に迷ふとは、何たる不遜の
言葉ぞや。一寸先も分らぬ人間が三千世界を一目に見通す日の出神の生宮を審神
いたすなどとは以ての外の悪行、左様な不心得な了簡では、左守の娘とは言はせ
ませぬぞや」

「ハイ、恐れ入りました。あまり俄かのことで吃驚いたしまして、ツイ粗相を申
しました。どうぞ廣き御心に見直し聞直しを願ひ上げます」

「ウンさう柔順く事が分ればそれでよい。この生宮の正體が分らぬのが本當だ。
何といつても三千世界を救ふために、いろいろ雑多とヘグれてヘグれて來た此方、

それぢやによつてへグレのへグレのへグレ武者、へグレ神社の大神と、神界では申すのぢやぞえ」

「ハイ、有難うござります」

「何が有難いのだ。妾の言葉が承知が行つたのか。ただ王妃様だから何事も無理ご尤も、へいへいハイハイと、面従してさへをればいいといふやうなズルイ考へは駄目ですよ。人民の心のドン底まで見えなく生神だから」

「左様でござります。妾は決して疑ひはいたしません。ただ神様の御心のまにまに御用に仕へ奉るだけでござります」

「なるほど、さすがは左守の忘れ形見だけあつて、よくものが分るわい。きつとこの千草姫の肉宮に對して一言たりとも反きは致しますまいな。絶対服従を誓ふでせうな」

「ハイ、何事も主人の申し付け、絶対服従をいたしませう」

「これこれ、それや何を言ふのぢやいな。この生宮を人間としての御挨拶は痛み入る。主人の命令などは怪しからぬ、生宮様の御命令だと何故申さないのか」

「ハイ、粗相申しました。生宮様の御命令ならば、如何なる御用でも厭ひませぬ。たとへ火の中、水の底でも、喜んで御用を承りませう」

千草「ホホホヤレヤレ嬉しや嬉しや、日の出神の生宮、満足いたしたぞや。命令とあれば山を逆様に歩くハリス姫、火の中、水の底へでも喜んで飛び込むといふテイラ殿、これだけの決死隊が出来た上は、この日の出神の生宮も大磐石。それについてモクレン殿は如何の御了簡か、キツパリ、それが承りたい」

モク「仰せまでもなく絶対服従を誓ひます」

「絶対服従では、あまり答辨がボツとしてゐるぢやないか。火の中を潜るとか、水の底を潜るとか、山を逆様に登るとか、何とか的確な返答がありさうなものぢやなア」

「ハイ、左様ならば、妾は御命令とあらば神の贄となつて暖かい血潮を奉りませう」

「ウン、よしよし、其方こそ秀逸だ。さすがは右守司の未亡人、千草姫、いやいや日の出神の生宮、感じ入りましたぞや。サア早速、かう話がまとまれば、今こ

の生宮いきみやがテイラ、ハリスの兩人りやうにんに御用ごようを申し付けるまを」

テイラ、ハリス兩人りやうにんは一度いちどに「ハツ」と頭かしらを下げ、

「如何いかなる御命令ごめいれいなりとも謹つつしんでお受けう仕つかまつります」

千草ちくさ「ホホホさすがは賢女けんぢよだ。しからは早速御用ごようを申し付けるまを。其方そなたも聞きいてゐる通りとほ、スコブツエン宗しうの名僧めいそうキューバー殿どのの行方ゆくへを、テイラ殿どのは探さがして來きて下くだ

さい」

テイ「何れいつへ参まめりましたら宜よろしうござりますか。どうか神様かみさま、お指圖さしづを下くださりま

せ」

「探さがしに行くゆやうなものに、方角はうかくが分わかる道理だうりがあらうか。どちらに行ゆけばよいか分わからぬから、搜索そうさくに出でようと申まをすのだ」

「ハイ、畏かしこまりました。然しからば、これから直すぐさま、お所在ありかを尋たづねて参まめりませう。どうか王様わうさまにも太子様たいしさまにも、よろしく御承諾ごしやうだくを願ねがつて下くださいませよ」

「これ、テイラ、何なんといふ分わからぬ事を申まをすのだえ。王様わうさまは僅わづかなトルマン國こくの主しゆ権者けんじや、三十萬人さんじふまんにんの父上ちちうへぢやぞえ。太子たいしは又また、その後繼あとつぎ、今いまは何なんの權威けんゐもない部屋へやず

住ぢやぞや。五十六億七千萬人の靈を救ふ三千世界の生宮の言葉を何と心得なさ
る」

テイ「ハイ、畏れ入りました」

とこの場を匆々に立ち、

「皆様、左様ならば」

と挨拶を残し出て行かむとする。母モクレンは、

「これテイラ姫、生宮様の御命令とは言ひながら、其方もやはりガーデン王に仕

へ奉る左守の娘なれば、一應王様に御挨拶申し上げた上、キューバー殿の搜索に

おいでなさるがよからう。母として一言、注意いたしますぞや」

千草「これこれモクレン、何といふ分らぬ事を申すのだい。テイラはこの生宮の

申す事を絶対服従致すと言ったではないか」

モク「ハイ、誠に濟まない事を申しました。テイラ、早く、サア、おいでなさい」

と言ひながら、「王様に一應申し上げよ」と、口には出さねど目をもつてこれを

傳へた。

テイラは母モクレンの心を汲みとり、さあらぬ態にて、
「左様ならばいよいよ搜索に参ります。生宮様、御安心下さいませ」
と早くも此の場を立去つた。

千草「オツホホホ、ヤア、さすがは偉いテイラ殿。これモクレン、お喜びなさい。底津岩根の大「みろく」の太柱、日の出神の御用を第一番にいたしたのは、そなたの娘テイラでござるぞや。サア早く神様にお禮を申しや」

モクレンは仕方なしに兩掌を合せ、天に向かつて暗祈黙禱してゐる。

千草「コレコレ、あまり譯が分らなさすぎるぢやないか。モクレン、其方はどこを拜んでをるのぢや。空虚なる大空を拜んで何になる。天にまします大「みろく」の神は今や地上に降臨し、ここに御座るぢやないか。神を拜めと申すのはこの生宮を拜めといふのだよ。てもさても、譯の分らぬ代物だなア」

モクレンは心の中にて、「エーこの狂人女郎、何を吐しやがる。馬鹿らしい」とは思へども、そこが主従の悲しさ、色にも出さず、

「ハイ、左様でござりましたか。何分愚鈍の妾、現在目の前に結構な神様が御出

現遊ばして御座るのに氣がつかないとは、何といふ馬鹿だらうかと、吾ながら呆れはててござります。しからは御免下さいませ、生宮様
と三拜九拜、拍手した。

千草姫はますます得意になり、ツンとあげ面をさらしながら、

「ヤア、善哉善哉。そなたこそこの生宮を神として認めた第一人者ぢや、必ず必ず信仰をかへてはなりません。サア、かうきまつた上はモクレン殿は暇を遣はず。随意に吾が家にかへり休息なされ。これからハリスに向かつて折入つて特別の御用がある、吾が居間においでなさい。結構な結構な三千世界に又とない彌勒成就の御用を仰せ付けますぞや」

ハリ「ハイ、仰せに従ひ参ります」

と千草姫の居間に伴はれ行く。千草姫はドアの戸を堅く締め四方の窓を閉ぢ、聲をひそめて、

「これ、ハリス殿、この生宮が特別の大々々の秘密の御用を仰せ付けるからお聞きなさい」

ハリ「ハイ、謹んで承りませう。如何なる御用なりとも身に叶ふ事ならば」

千草「ヤア、ハリス殿外でもない。そなたはトルマン國きつての美貌と聞く、その美貌を楯として、太子チウインの心を奪ひ、彼を戀の淵に陥れくれるならば、そなたをチウイン太子の妃となし、このトルマン城の花と致すであらう。どうだ嬉しいか、よもや不足はあるまいがな」

「何事かと存じますれば御勿體ない。左様な御命令、どうして臣下の身をもつて、恐れ多くも太子様に、左様に大それた事が女の身として申されませう。第一身分に懸隔がござりまする。また妾は右守司の一人娘、右守家を繼がねばなりません。どうぞこればかりは偏に御容赦を願ひ奉りまする」

「これこれハリス、そんな遠慮はチツとも要らぬ。右守家の血統は天にも地にもお前ただ一人、なるほど後を繼がねばならうまい。それなれば尚更、其方にとつては、打つて【すげ】たやうな話ではないか。チウインをうまく戀に引入れたならば、其方の夫につかはす程に。何と嬉しからうがな」

「恐れ多くもトルマン國の繼承者たる太子様を右守の家に下さるとは、天地顛倒

も同様、ガーデン王様が決して許しは致されまますまい。また太子様とて顯要の地位を捨て、臣下の家に養子におなり遊ばすやうな道理はござりませぬ。たとへ右守家は妾一代にて血統がきれませうとも、王家には替へられませぬ。この儀ばかりは平に御容赦を願ひ奉りまする」

「これこれハリス殿、其方はこの生宮の命令ならば、山でも逆様に登るといつたぢやないか。その舌の根の乾かぬ中、掌かへしたやうな其方の變心、千草姫の生宮、左様なことで承知はいたさぬぞや」

「ハイ、是非はござりませぬ。萬々一妾の力によつて太子様を戀に陥し奉つた上は、王家のお世繼は、どうなさいますか。それが妾は心配でなりませぬ」

「ホホホホ、なるほど一應尤もだ尤もだ。人間心としては、實に申し分のないお前の眞心、感じ入りました。しかしながら三千世界を自由にいたす底津岩根の大【みろく】の太柱、現はれた以上は靈の親子たるものをお世繼にいたす考へだ。左様なことに心配はチツとも要らない。其方の靈はチウイン太子と夫婦の靈だによつて、日の出神の生宮が神界において調べて調べて調べ上げた上、かう申して

ゐるのだから、力ちから一いつぱい活動くわつどうして下ください。きつと成功せいこう疑うたがひなしぢやぞえ」

ハリスは太子たいしと共に大軍たいぐんを率ひきゐ、敵軍てきぐんを驅かけ惱なやましたる女武者をんなむしやである。さうして太子たいしの容色ようしよくや膽力たんりよくには心こころの底そこから感服かんぷくしてゐた。しかしながら夫をつとに持もたう、妻つまにならうなどの野心やしんはチツとも持もつてゐないのであるが、千草姫ちくさひめの言葉ことばに否いなみかね、一先ひとまづ此この場ばを逃のがれむものと、心こころにもなき言辭げんじを弄ろうし、暫時ざんじ千草姫ちくさひめの意いを迎むかへ、嬉うれしさうな顔かほをして見みせたのである。千草姫ちくさひめは満足まんぞくの態ていにて、

「ヤア、ハリス殿どの、あつぱれ あつぱれ、かならず成功せいこう祈いのるぞや。これさへ承諾しょうだくした上うへは、最早もはや今日こんにちはこれで御用濟ごようずみだ。これから家うちへ歸かへり、あらむ限かぎりの盛裝せいさうをなし、紅べに、白粉おしろい、油あぶらを惜をしまし、拔目ぬけめなく立働たちはたらく準備じゆんびをなさい」

ハリスは「ハイ、有難ありがたう」と丁寧ていねいに挨拶あいさつをなし此この場ばを匆々さうさう立たちて行ゆく。

(大正一四・八・二四 舊七・五 於由良海岸秋田別莊 北村隆光録)

千草姫の命を受け、キューバーの搜索に向かはむとするテイラ姫は、母モクレンの意を含み王様に面會せむものと思へども、千草姫の警戒厳しく到底近よる事が出来ぬので、チウイン太子の館を訪ひ、

「御免なさいませ。太子様、テイラでございます」

太子は机にもたれ、三五の經典を頻りに讀誦してみたが、テイラの聲が門口に聞こえたので、直ちに門口に迎へ出で、さも嬉しげに、

「ヤア女將軍テイラ殿、まあまあ此方へ……。よう来て下さった。何だか最前から其方に會ひたいと思つてゐたところだ。今日はゆつくり話ませう」

テイ「ハイ、有難うございます。急用が出来ましたので一寸御相談に参りました。失禮さしていただきます」

と、一室に立ち入り太子と向かひあつて、

「時に太子様、今日は妾は母と共に王妃様に招かれ澤山の御馳走を頂きましたところ、王妃様の様子が俄かに變り「妾は三千世界の救世主だ」とか、「日の出神の生宮だ」とか、妙な事を仰せられ、その上に妾に對し「あの妖僧キューバーの

所在を探して来よ」との厳しき御命令、否み奉る事を得ず、ひそかに御相談に参りました。どうか御意見を承りたうございます」

太子「はて、困つたなあ、母上は發狂されたのであらう。どうも様子がこの間から變だと思つてゐた。母上は何故か彼の惡僧を大變に可愛がつてをられるのだ。

しかしながら、彼のごときものを城中に引き入れなば、ますます母上の心を亂し、如何なる惡知恵を注ぎ込むかも知れない。それゆゑ吾が計らひにて或所にキューバーを押込めておいたのだから、搜索などは止めたがよからう」

テイ「ハイ、有難うございます。妾も何だか變だと思つてをりました。しかしながら、左守家に居るわけにも参りませぬ。何時王妃様が人を派し、妾の行動をお調べなさるか知れませぬから」

「成程それも困る。お前の姿が見えさへせねば分らない、母上はキューバーの搜索に行つてゐるのだと安心せられるだらう」

「妾は何處へ匿れたら宜しうございませうか」

「いや心配するな。私が今手紙を書くから、これをもつて名宛の人の處へ行つて

世話になれ。しばらくの間だから」

「ハイ、仰せに従ひ、さうさして頂きませう」

太子は何事かすらすらと巻紙に書き認め、三百圓の金を封じ込み、

「サア、これを持つてお出でなさい。きつと世話をしてくれるだらうから」

テイラは、書面の表書を見て倒れむばかりに驚いた。

「もし太子様、レールといふ男は、向上運動の張本人ではございませんか」

太子「如何にもさうだ。彼はトルマン國の救世主も同様だ」

テイ「太子様はまたこのレールといふ男に御交際がございしますか」

と不思議さうに問ふ。

太子「別に交際といふほどでもないが、一度會うた事がある。その時彼の心の底

まで見抜いておいた。きつと大切にしてくれるよ。この書面の中に三百圓封じ込

んであるから、これは其方の賄料としてレールに與へるのだ」

テリスタン「ハイ、有難うございます。ともかく行つて参りませう」

と挨拶する折りしも門口より、

「右守の娘ハリスでございます。太子様にお目に掛りたうございます」

と女の優しき聲が聞こえて来た。太子は直ちに立つて自ら入口の戸を開け、

「ヤア、ハリス殿か、よう来て下さった。今テイラ將軍が来て居て下さるところだ。サア、ハリス將軍お入りなさい」

と氣輕に招き入れ、ここに三人巴なりに對坐した。

ハリ「太子様、御勉強中をお邪魔をいたしました。ヤ、あなたはテイラ様、先刻は失禮いたしましたね」

テイ「いやどう致しまして、あなたも王妃様の御命令に關して、お越しなされたのでございますか」

ハリ「ハイ、左様でございます。大變な事を仰せつかったので、實は困り入つてあるのでございますよ」

太子「ハハハハハハ、ハリス將軍もキューバー上人の所在の搜索隊でも仰せつかつたのだらう」

ハリ「いえいえ どうして どうして、搜索隊はテイラさまに大命が下りました。

妾はもつともつと六ヶしい御用を仰せつけられたのでございます」

「それや一體どんな用だ。差支へなくば聞かしてもらひたいものだなあ」

「ハイ、妾は、太子様を生擒る御用を仰せつかりました」

「ハハハハハハ、さすがはハリス女將軍だけあつて、それ相當の御用を言ひつけ

られたものだなあ。その美貌をもつて攻撃されるものなら、瞬く間にチウイン砲

臺も滅茶々に壊されてしまふかも知れないよ」

「王妃様のお言葉には、紅、白粉、油を惜しまず、盛装をこらし抜目なく太子を

戀の淵に陥いれ、首尾克く成功いたしたならば、汝を太子妃にしてやらう」との

有難い御恩命、いやはや畏れ入つてをりまする」

テイ「何とまあ、粹なお母さまぢやございませぬか。ハリス様、羨ましようござい

ます」

ハリ「どうか貴女、妾が搜索に参りますから、貴女代つて下さいませぬか。到底

この使命は妾がごとき者の挺子には合ひませぬ。また太子を生擒るなどの大野心

は、王家を思ひ、右守家を思へばどうして出来ませう。實に困り入つてございま

す」

太「これや一通りぢやない。母上には何か悪神が憑依して、トルマン城を攪亂せむと企らんでゐるに違ひない。いやハリス殿、餘が手紙を書きますから、宛名人の處へ暫く身をお忍びなさい。後は都合よく母の手前を取りなしておきます。どうやら兩將軍の身の上に危険が迫つて來たやうに餘は考へる」

と言ひながら、すらすらと巻紙に何事か認め、これまた三百圓の紙幣を封じ込み、「サア、ハリス殿、暫くこの宛名人の處へ行つて身を忍んでゐて下さい」

と差出す書状、ハリスはハツと首をさげ押し頂き、名宛を見ればマーク殿と認めである。ハリスは仰天せむばかり吃驚して太子の顔をつくづく見守りながら、ハリ「太子様、御冗談ではごさいませぬか。マークといふ人間は首陀向上運動の首謀者、ラマ本山の注意人物、かやうな人間の所へ、どうして忍んでゐる事が出來ませうか」

太子「いや心配は要らぬ。彼は決して悪人でない。吾がトルマン國の將來重鎮となる人物だ。この書状をもつて行けばきつと世話してくれるだらう」

ハリ「テイラさま、妾、どうしませう。太子様も、あまりぢやございませぬか。

あのやうな所へ島流しとはあまり甚うございますわ」

テイ「妾だつて有名な向上會のレールさまの家へ預けられるのですもの。何かこれには太子様において深いお考へがお有りなさるのでせう。とに角いつてみようぢやありませんか」

と、二人は早くも太子に暇を告げ、

「太子様、しばらく行つて参ります」

と黄昏を幸ひ裏町通りを傳うて、レール、マークの住家をさして出でて行く。

レール、マークの二人は其の日の生活に追はれ、九尺二間の裏店に、二人一組の世帯をやつてゐる。二人は荒井ヶ嶽の麓なる岩窟の番人を了へ、固く錠をかけおき、歸つて来たところであつた。二人はやれやれと腰をおろし、夕飯の箸を執らむとする時、門口に優しき女の聲、

「御免なさいませ。レール、マークさまのお宅は此處でございますか」

薄暗がりにレール、マーク二人はこの聲を聞くより、

レ「オイ、マーク、艶めかしい、しかも高尚な女性の聲が門口に聞こえてゐるぢやないか。さうして「レール、マークさまのお宅は」と、ほざいてゐるやうだ。
一體何だらうか」

マ「ヘン、馬鹿いふな。こんな所へ誰が尋ねて来るものか、しかも日の暮れ閒際に、おほかた狐か狸のお化だらうよ」

レ「いやいや、たしかに女の聲だ」

と言つてゐる時しも、再び優しき女の聲、

「レールさま、マークさまのお宅は此所でございますか」

マ「いかにも女性の聲だ」

と言ひながら、つつと立つて菱になつた破れ戸をがらりと引き開け、見れば盛装を凝らした二人の美人、ニコニコとして、

女「妾は、ちよつと様子あつて貴方のお家へお世話になりました。どうか宜しう願ひます。見れば奥さまもお子達もおはさぬ様子、どうかお世話にして下さいませ」

マ「どこの貴婦人か知りませぬが、冗談言つてはいけませぬよ。私はお粥腹を抱へて飢ゑに泣き寒に慄へてゐる貧民窟の主人公、どうして人様のお世話する餘裕がございませう。おほかた人違ひでございませう。お歸り下さいませ。オイ、レール大變な事になつて來たぢやないか。貴婦人が、しかも二人、盛装を凝らしお前と俺とを尋ねて來られたのだが、どうも承知出來ぬぢやないか。大方それ、キューバーに關係のある、お安くない連中ぢやなからうか」

と、小聲に囁く。

レ「なるほどさうかも知れぬよ。此奴はうつかり相手になつては駄目だ。スコブツエン宗のキューバーといふ奴、澤山の貴婦人を胡麻化しよつたといふことだ。その貴婦人が俺ら二人が牢番をしてゐる事を嗅ぎつけ、尋ねて來よつたのだらう。そんな事をしては太子様に對して申し譯がないからなア。斷わつて逐ひ歸せ」

マ「折角ながら、二人の女中さま、レール、マークは當家に居りませぬ。トットとお歸り下さいませ。こんな破れ家を尋ねるといふ女性は人間ぢやありませんまい。狐か狸かの化けた奴と認めるからトットといいで下さい」

といふより早く破れ戸をピシヤリと閉め、戸に突張りをかうてしまった。

マ「ハハハハハハ、【この破戸一枚が鐵の門より高う】、といふ處だ、ハハハハハハ」

と大聲に笑ふ。

テイ「もし御兩人様、どうかこの手紙を讀んで下さいませ。さうすれば貴方がたのお疑ひが晴れるでせう」

と、戸の隙間より二通とも投げ込んだ。二人は二通とも拾ひ上げ、薄暗いランプにすかして見れば、一通にはレール殿、チウイン太子より、一通にはマーク殿、チウイン太子より、と記されてある。急ぎ封押しきつて見れば、正しくチウイン太子の手紙に間違ひない。さうして枯れきつた貧乏世帯へ、大枚三百圓宛、女の賄料として封じ込んである。二人は慌てて戸を押し開け、

レ「ヤこれはこれはこれは失禮いたしました。【むさくろ】しい處でございませが、どうかお這入り下さいませ。オイ、マーク手筈でそこらを掃かないか、珍客だぞ。

これは左守家のお嬢さまと、右守家のお嬢さまだ」

と言ひながら、二人は一生懸命、黒ずんだ畳の表や庭を掃き出した。

テイ「どうぞお構ひ下さいませ。今日から私がお掃除もいたします。御飯も炊きます。男さまがなさいますと見つともなうございます」

レ「いや勿體ない、貴女がたに飯炊きをさせたり、掃除をさしたりしてたまりま
すか。しかし折角来てもらひましたが寝具もなし、食器も無し、まあ暫くお待ち
下さい。マークに買ひにやりますから。オイ、マークこの頂いたお金で絹夜具
を二組買って来い。そして上等の食器を二組揃へて来るのだぞ」

マ「よし来た」

と飛び出さうとするをテ「ラは細い柔らかい手で、マークの袖を控へながら、
テイ「もしマーク様、失禮ながら、彼やうなお住居へ絹夜具を入れたり、立派な
食器をお入れになつては、直様その筋の疑ひをうけ迷惑をなさいませう。妾ら二
人は貴方がたと同じ生活が致したうございます。どうか食器の最も悪い缺けたや
うなものを購めて下さい。さうして寝具も最も悪い、これより悪いものはないと
いふやうなものを買つて来て下さい。さうせねば向上會の貴方がたが、その筋の

疑うたがひを受けうられては妾わらわたち、長ながいお世話せわになる事ことは出来できませぬからなあ〃

マ「オイ、レールどうせうかな、なんぼなんでもこんな貴婦人きふじんにまさか破れ布團やぶぶとんも着きせるわけにゆかぬぢやないか〃

レ「何なに、かまやしないよ。今いままで淨行階級じやうぎやうかいきふの生活せいくわつをなされてゐたお姫様ひめさま、ちつとは吾々貧民窟われわれひんみんくつの生活せいくわつを味あぢははしてやつてもいいぢやないか。そんな遠慮ゑんりよをしてをつて、どうして目的もくてきの貫徹くわんてつが出来できやうか〃

テイ「ホホホ、レールさまのお言葉ことば、私わたし【ぞつこん】氣きに入いりましたよ。ねえハリスさま〃

ハ「さうですなえ、本當ほんたうに貧民窟ひんみんくつの生活せいくわつは愉快ゆくわいなものでせうよ〃

マ「これお姫さま、貧民窟ひんみんくつの生活せいくわつは愉快ゆくわいだなんて、何なにを言いうてゐるのだ。まあ二に三日さんにちやつて見みなさい、吠面ほえづらかはいて逃にげて歸かへらにやならぬやうになりますよ〃

ハリ「何程なにほどつらくても構かまひませぬよ。國家こくかの柱石ちうせきともなるべき立派りっぱなお二人ふたりさまと共同生活きゆうどうせいふくわつを思おもへば、どんな辛い事つらいことでも辛抱しんぱういたしますわ〃

レ「やアお出いでたな、これやまあ、何なんのこつた。今日こんにちただ今いまより貧乏神びんばがみの御退却ごたいきやく、

福ふくの神かみの御入來ごじゆらい、まるで夢ゆめのやうだわい」

四人よにん一度いちどに「八八八八八八、ホホホホホホ」。三日みっかの月つきは西山せいざんに隠かくれ、暗やみの帳とばりは四邊あたりを包つつみ、近所きんじよ合壁がつべきの婆嫗ばかかの囀さへつる聲こゑも次第しだい次第しだいに消きえてゆく。

(大正一四・八・二四 舊七・五 於由良海岸秋田別莊 加藤明子録)

第一五章 地位轉變ちゑてんぺん「一七八二」

千草姫ちくさひめは王わうの居間ゐまに羽搏はばたきしながら、仕舞しまひでも舞まふやうなスタイルで横柄面わうへいづらをさらして入いり來きたり、言ことばも莊重さうじゆうに、

「トルマン國こくの國王こくわう、ガーデン王殿わうどの、三千世界さんぜんせかいの救世主きうせいしゆ、底津岩根そこついはねの大おほ【みるく】の太柱ふとばしら、第一靈國だいいちれいこくの天人日てんにんひの出神でのかみの生宮いきみやの託宣たくせんを、耳みみをさらへてお聞下ききくだされ。肉にく體たいは千草姫ちくさひめであつても、靈みたまは日ひの出神でのかみの誠生粹まこときつするの水晶魂すめしやうだま、此世このよの救主すくひぬしとして現あらはれたのでござるぞや。其方そなたの目めから見た時ときは、この生宮いきみやを氣違きちがひと思おもふであらう。

誠まことの神かみに間違まちがひはござらぬぞや〽

ガーデン王わうは千草姫ちくさひめのこの態ていを見て、不審ふしんの眉まゆをひそめ、アア困こまつた事ことが出来できたわい、たうとう王妃わうひは發狂はつきやうしてしまった。しかしながら氣きのたつてる時ときに逆さからふは、ますます病氣びやうきを強つよめる道理だうり、少時しばらくかれが言いふ事ことを黙だまつて聞きいてやらう……と決心けつしんし、

「なるほど其方そなたは日ひの出神でのかみの生宮いきみやであらう。如何いかなる用ようか、聞きかしてくれ〽

千草ちくさ「これは怪けしからぬ汝なんぢが言葉ことば、無禮ぶれいであらうぞや。日ひの出神でのかみに對たいして聞きかしてくれ……とは何なんたる暴言ばうげん、頭づが高たかい、お坐すわりなされ。三千世界さんぜんせかいの因縁いんねんを説といて聞きかしてやらうぞや〽

王わう「ハイ〽

と不承不承ふしようぶしように椅子いすを離はなれて座ざに着つけば、千草姫ちくさひめはニコニコしながら、

「ホホホホホ、さすがはトルマン國こくの王わうぢや、この日ひの出神でのかみをよく見届みとどけた。褒美ほうびには之これをつかはす。有難ありがたふ頂戴ちやうたい召めされ〽

と言いひながら、刹帝利せつていりのピカピカ光ひかつた禿頭はげあたまの上うへへ、左ひだりの片足かたあしをドツカと載のせ

「ウーン ウーン」と二聲唸りながら、左の足を下ろし、また右の足を同じく頭上にのせ「ウーン ウーン」と又もや二聲……「ホホホホ」と笑ひ悠々として床の間に直立し、

「いかにガーデン王、よつく承れ。セーロン島の浄飯王が太子悉達は壇特山や靈鷲山に上り、五ヶ年の修業の後佛果を得て歸國し、父の浄飯王に佛足を頂禮せしめた例しがある。畏れ多くも底津岩根の大「みろく」の太柱、第一靈國の天人、日の出神の御神足を、兩足とも頂戴いたしたる汝こそは、三千世界の果報者、有難く感謝いたされよ。日の出神に間違ひはござらぬぞや」

ガーデン王は始めの間は何だか怪しいと思つてゐたが、千草姫の足を頭にのせられてから、ガラリと心機一轉し、全くの活神と固く固く信ずるやうになつた。サアかうなつては、もはや城内の整理は中心を失ひ、手のつけやうもなくなつてしまつた。

千草「ガーデン王殿、この千草姫の肉體は、今日までは汝が妃として、神界より許しありしも、いよいよ天の時節到來し、三千世界の救世主と現はれたれば、も

はや汝なんぢの妃きさきではないほどに、汝なんぢはこれより日ひの出神でのかみの肉宮にくみやが弟子でしとなり、絶對服ぜつたいふく従じうを誓ちかつて、何事なにごとにも違背あはいせず盡つくすであらうなア」

王わう「ハイ、仰おほせまでもなく、どんな御用ごようでも承うけたまはりませう」

「オホホホホ、満足まんぞくまんぞく々々、上うへが下したになり、下したが上うへになり、天地てんちがかへる神かみの仕しぐ組み、今いままでの夫をつとは妻つまの弟子でしとなり、今いままでの妻つまはその夫をつとを弟子でしとして使つかふ神かみの經しぐ綸み、かくなる上うへはガーデン王わう、其方そのほうは日ひの出神でのかみの神勅しんちよくを奉ほうじ、三千世界さんぜんせかいの救世主きうせいしゆが副柱そへばしらなる名僧めいそうキューバーを、一時ひとときも早はやく搜さがし出だし、この城内じやうないに伴つれ歸かへれよ。違あは反いに及およば神罰しんばつ立所たちどころに至いたるであらう」

「ハイ、委細承知あさいしやうちいたしましたでしたが、かれキューバーは如何いかなりしか、破獄逃走はごくたうそういたしました故ゆゑ、内々人ないないひとを派はし、搜索そうさくいたしてをりまするが、未だ何なんの吉報きつぱうも得えませぬ。少時しばしの御猶豫ごいうよを願ねがひ奉たてまつりまする」

「汝なんぢの言げんにして間違まちがひなくば、大方おほかたジャンクが隠かくしてをるのだらう」

「いやいや決して決して、左様さやうな道理だうりはございませぬ。彼かれはキューバーを一時いちじも早はやく救すくはむと、私ひそかに相談さうだんいたしました。早速さつそくジャンクの願ねがひを許ゆるし、牢獄らうごくに人ひと

を派し査べ見れば、彼キューバーは早くも何者にかさらはれ、行方不明となつてをりました」

「あ、さうであらう。さうであらう、ヤ分つた分つた。この張本人は三五教の宣傳使照國別、照公の兩人に間違ひはなからう。一時も早く彼をふん縛り、キューバーを押込めありし牢獄へ、時を移さず打込めよ。これ決して肉體の千草姫が言葉でない。底津岩根の大「みろく」が神勅でござるぞや」

「御神勅は恐れ入りますが、何といつても、國家の危急を救ひ下された照國別の宣傳使を、何の科もなく牢屋に押込むなどいふことは情において出来ませぬ。

こればかりは御容赦を願ひます」

「オホホホホ、何馬鹿な事を申すか、三千世界一度に見えすく生神の目で一目睨んだならば、決して間違ひはござらぬぞ。汝頑強にも吾が神勅を拒むにおいては、立所に汝が生命をとるが、それでも可いか、返答聞かう」

「いや、少時お待ち下さいませ。然らば御神勅の通り、照國別、照公神司を、手段を以てふん縛り、牢獄へ投げ込んでお目にかかけませう」

「ウ、よしよし、それで神は満足いたしました。トルマン城は萬々歳、七千餘國の月の國は申すに及ばず、この地の上にとありとあらゆる國は、残らず汝の支配にしてやらう。わづか三十萬の人民の父として、あたらし一生を暮すも惜しいでないか。どうぞや合點がいつたか」

「ハイ、委細承知いたしましたましてございます」

「ヤ、満足々々。次に其方に申し渡すことがある。太子チウイン、王女チンレイを修行のため、一笠一蓑の旅人として一杖を與へ、一時も早く當城を出立せしめられよ」

「仰せにはございまするが、私も老年、太子がゐなくては、國家の中心人物を失ふ道理、また王女チンレイは少しばかり病身でございますれば、之ばかりは一度お考への上御猶豫を願ひたうございます」

「愚かなり、ガーデン王。日の出神の生宮が底津岩根の大「みろく」と現はれた以上は、三千世界を一つに丸め、汝が支配の下におかむとす。汝は已に老齡、後繼者の太子には廣く世間を見聞せしめおく必要あり。諺にも可愛い子には旅をさ

せと申すでないか。汝は子の愛に溺れて、大切な吾が子の幸福を抹殺せむと致すか、不届き至極の腰拔爺イ奴」

「イヤ分りましたでござります。太子は修行のため、神勅に従ひ、旅に出すことといたしませうが、病身なる妹に旅の苦勞を致させるのは親として忍びませぬ。どうぞこればかりは御猶豫をお願い申したうござります」

「ハテさて、分らぬ爺いな。神に絶対服従を誓つたでないか。王女チンレイはこの門を出づるや否や、病魔はたちまち退散し、金鐵のごとき壯健な肉體となるであらう。神の言葉に間違ひはないぞ。返答は何うだ」

「左様ならば御神勅に従ひ、兩人にその由を傳へませう」

「ガーデン王、天晴れ天晴れ、汝の改愼によつて、速やかに神政成就、ミロクの世が出現いたすであらうぞ」

「ハイ有難う存じまする」

「モ一つ其方に申し渡す事がある。これも絶対服従いたすであらうなア」

「ハイ」

「汝はジャンクをもつて、政治の樞機に任じてゐるが、彼がごとき田舎者、どうして神の創りしトルマン國の政治が出来やうぞ。彼は吾が國家の爆裂彈だ。八岐大蛇の靈だ。一時も早く當城を逐ひ出せ」

「こればかりは必要な人物でございますから、どうぞ御猶豫を願ひたうございませ」

千草「三日の猶豫を致すによつて、それまでに篤と言ひ聞かせ、城内を追つ拂ふべし。しかながら彼ジャンクにおいて、キューバー上人の在所を尋ね、城内にお迎ひ申し來たるにおいては、國政の一部をその褒美として任しても差支へなからう。イヤ刹帝利殿、御苦勞でござつた。居間へ下つて休息召され。最前から神の申し渡した一伍一什、必ず落度のなきやう、明日までに實行せよ」

と言ひながら、又もや兩手を一の字に開き、振り返つて床の間を下り、悠悠として吾が寢室指して歸り行く。

ガーデン王は千草姫に足の爪先から惡靈を注入され、にはかに心機一轉し、ほとんど邪神の神憑状態となつてしまつた。金毛九尾の惡狐は首尾よくトルマン城

を占領したのである。

太子と王女は父母兩親の嚴命を拒む術もなく、旅に出かけると稱し、數萬の金を用意し、遍路姿となつて、日の暮るる頃、レール、マークの住家を指して訪ね行き、門口に立つて、チリンチリンと鈴を振つてゐる。レール、マークは晝は互ひに岩窟の番人をやつてゐたが、丁度この時、男女四人食卓を共にしてゐる眞最中であつた。太子は門に立つて、鈴を振りながら「頼まう頼まう」とおとなへば、マークは戸の隙間より外面を窺ひて、

マ「ヤ、夫婦の巡禮さま、何用か知らないが、かやうな貧民窟へ來たところで、何一つ上げる物はない、トツトと歸つて下さい。かやうな狭い家へ、今頃に来たところで泊めてやる譯にも行かず、お斷り申します」

太「イヤ、愚僧は決して怪しき者でござらぬ。レール、マーク殿の知人でござれば、どうか此の戸を開けてもらひたい」

レ「ヤ、スパイの奴、化けて來やがつたな、コラ大變だ。姫さまを隠さねばなるまい。サア姫さま、濟みませぬが、この戸棚の中へちよつと入つてゐて下さいま

せ
□

テイ「ホホホホホ、さう慌あわてるには及びおよませぬよ。何か城内じやうないに急變きふへんが起つたと見え、太子様たいしさまが變裝へんさうしてお出いでになつたのでございますワ。あのお聲こゑは太子様たいしさまに間違まちがひございませぬ□

と言いひながら、テイラはガラガラと破戸やぶれどを開ひらき、

「ヤ、太子様たいしさま、ようお越こし下くださいました□

太子たいしは「ウン」と言いつたきり、チンレイと共ともに内うちに入はいる。

(大正一四・八・二四 舊七・五 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第三篇

理想新政りさうしんせい

第一六章 天降里（一七八三）

シグレ町の貧民窟の九尺二間にはレール、マークの兩人が、俄かにテイラ、ハリス、チウイン、チンレイの新しい四人の珍客を迎へ、どことはなく大活氣が漲つて來た。新來の珍客は何れも古ぼけた労働服を身に纏ひ、これが太子か、貴婦人かと思まがふばかり、服装を落としてしまつた。それゆゑ七軒長屋の隣の婆嬭連も、夢にも太子や王女の變装とは知る由もなかつた。

朝も早うから女議員が、カバンの代りに手桶をさげて、井戸端會議を燕の親方よろしく開催してゐる。

甲「これ、お梅さま、レールさま處へこの頃妙な、【落ちづれもの】が、やつて來てゐるぢやないか。あら、おほかた、乗馬下しの貴婦人も知れむが、長屋の規則を守つて、餛飩一杯づつ配りさうなものだのに、まだ挨拶にも出て來ぬぢやないかい」

乙「お竹さま、餛飩か蕎麥の一杯貰ふやうな事があつたら、それこそ大變ですよ。

あとが煩さいからな」

竹「それでも、私が去年の暮にこの長屋へ流れ込んで来た時、お前さま等が率先して、何かと世話をして下さった際に、長屋の規則だから、餛飩か蕎麥を一杯づつ向かふ三軒兩隣へ配れと言ひなしたものだから、親爺のハツピを質において餛飩を一杯づつ配りましたよ」

梅「そら、さうですとも、普通の人間なら、互ひに仲ようして、お交際をしてもらはなくちやなりません、あのレールさま、ま一人のマークさまの二人は、ラマ本山のブラツクリストとかいふものについてある人物で、いつも番僧さまが如意棒をブラ下げて調べに来るぢやないか。あの人は向上會員とか、黒い主義者とかいふぢやないか。そんな人と交際でもしようものなら、番僧さまにつけねられ、誰もいやがつて日傭者にも雇うてくれませぬワ。さうすりや忽ち親子の腮が乾上つてしまふぢやありませんか。親爺さまは毎日土方をやり、私たちはマツチの箱貼りをして會計を助けてはをるものの、雨が三日も降りや忽ち土方も出来ず、親子が飢ゑ死せねばならぬといふ境遇だもの、番僧さまなんかに睨まれちやたま

りませぬわな」

「何とマア怖ろしい人がこの路地へ這入つて来たものぢやないか。此頃はあんな人がうるつくので寺庵異持法だとか、國士團、……法とか、難かしい法律が發布され、三人寄つて話をしてをつても、すぐ引張られるさうだから、かう五人も六人も一緒に水汲みをやるのは劍呑ですぜ」

「タカが女ぢやありませんか。本來裏長屋の娼連が、何人寄つて雀會議をやつたところで何一つ出来やしないわ。なにほど盲の番僧さまだつて、女まで引張つて歸るやうな無茶な事はしますまいよ」

「なに、女でもなかなか手に合はぬ連中さまがありますよ。今時の女性はみな、高等淫賣教育とか、いふものを受けてゐる人だから、女權擴張とか女子參政論だとか、いろいろのオキヤンや、チャンピオンが現はれて、ラマ本山の頭を痛めるものだから、此頃は女でも容赦なく、番僧さま、ちよつと怪しいと見たら直ぐに引張つて行くさうだよ。あの向上會員さまの中にも、どうやら高等淫賣らしい、綺麗な女が三人まで、やつて来てゐるのだもの、何時番僧さまがやつて来るか知

れないわ。蕎麥の御馳走どころか、此方が側杖を喰はされちや堪りませぬな。サアサア歸りませう」
と五六人の婆嬪が手桶をヒツ下げて、各自小さい破れ戸をくぐつて姿を隠してしまつた。

チウインは共同井戸の側にある穢しい共同便所に這入つてをつたが、この女連の話を一伍一什聞き終り、そしらぬ顔をして歸り來たり、

チウ「オイ、レールの兄貴、僕は妙な事を聞いて來たよ。イヤ、もう大いに社會教育を得た。人間といふものはホんに生活上に大變な懸隔があるものだな」

レ「長屋の雀や燕が言ふことア大抵きまつてゐますよ。私を向上會員だといつて、いつも口をきはめて悪口をいひ、テンで怖がつて交際をせないのです。ずゐぶん、悪垂れ口を叩いたでせう」

「ハハハハなかなか面白いわ、イヤしかし面白いというては濟まぬ。このトルマシ國には一人も貧民のないやうに、何とかして骨を折らねばなるまい」

「タラハン國のスタルマン太子は、アリナ、バランスといふ賢明な棟梁の臣下を

得て、教政の改革を斷行されたといふ話ですが、屹度よく治まるでせう。まだ今々の事ですから、その結果は分りませぬが、今日の場合、アアするより外に道はござりますまい。トルマン國も今は改革の時期だと思ひます。どうか太子様の英斷をもつて、一日も早く教政の改革を斷行し、國民の信望をつなぎ、天下の名君と仰がれ玉ふやう、吾々は努力したいと思ひます」

「ヤ、實は僕もスダルマン太子のやり口には感服してゐる。どうしても思ひきつて決行せなくちや駄目だ。ともかく、やれるだけやりたいものだな」

「今度の宰相は餘程分つてゐるやうですが、淨行の古手や首陀の大將や毘沙頭の古手が、いくら頭を悩まし、教政内局を組織したところで、その壽命は長くて一年半、短い奴は三月くらゐで倒れてしまふのだから、吾々教徒はいい面の皮ですよ。今日は最早、人文發達して人民が皆自覺してをりますから、古疵物は信用しませぬ。ともかく、清淨無垢の民間から出たものでないと、大衆の信望をつなく事はむづかしいですな」

「そらさうだ。會衆の古手や首陀頭や淨行や金持會衆が、何遍出直したところで、

まるで子供が飯事をしてゐるやうなものだ。亡宗政治、骸骨政治、幽霊政治、日暮し政治、軟骨政治、章魚政治、壓搾宗政ばかりやられてをつちや、大衆は到底息をつく事は出来まい。僕もどうかして此際、かくれたる智者仁者を探し求め、善政を布いてみたいと思ふのだ。然しながらまだ自分は部屋住まゐるの事でもあり、兩親の頭が古くつて時代の趨勢が分らないものだから、實は困つてゐるのだ。何とか一つ大きな目覺しが來るといいのだけれどな」

「太子様、かならず心配して下さるな。吾々は王室中心向上主義ですが、現代の大衆は何時でも一撃の梵鐘の響と共に起つやうになつてをります。テイラさまや、ハリスさまの前で、こんな事を言ふのはチツとばかり言ひにくいけれど、今度の戦争がなかつたなら、吾々は已に已に左守、右守の兩人を斃し、宗政の改革を太子様にお願ひするところだつたのです。既にすでに矢は弓の弦につがへられてつたのです。左守、右守の淨行も戦争のために斃れたのだから、御本人にとつては非常に光榮だつたのでせう。さうでなくつても今日まで二つの首はつながれてゐない筈ですから」

テイラ、ハリスの兩人は平氣な顔して笑つてゐる。

レ「もしテイラさま、ハリスさま、あなたはお父さまの事を言はれても、何ともないのですか」

テイ「ハイ、子として父の死を悲しまぬものはありませぬ。然しながら大衆の怨府となり、非業の最後を遂げられやうなものなら、それこそ子として堪りませぬが、危機一髪の場合になつて、王家のため國教のために戦つて死んだのですもの、全くウラルの神さまの御恵みだと思つて有難う感じてをりますわ。ネー、ハリスさま、あなただつてさうお考へでせう」

ハリ「何事もみな、因縁事ですもの、仕方がありませぬわね」

レ「イヤお二人とも、立派なお心掛け、向上會の私も今日の上流に、こんな考への人があるかと思へば聊か心強くなつて來ました。オイ、マーク、トルマンの國家も心配は要らないよ、喜び給へ、この若君を頂き、この賢明な左守右守のお嬢さまが上にある以上は、國家は大磐石だ。俺たちも今まで十年の間、國事と改宗に奔走した曙光が現はれたやうなものだ」

マ「本當にさうだ。僕も何だか、死から甦つたやうな晴ればれした爽快な氣分になつて来たよ。何といつても年若き婦人の身として、駒に鞭うち砲煙彈雨の間を、三軍を指揮して奔走された女丈夫だもの。僕等のごとき瘦男は姫さまの前ではサツパリ顔色なしだ、ハツハハハハ」

かく話してゐるところへ、如意棒の音がガラガラと聞こえて来た。

レ「ヤ、また番僧がやつて来よつたな。チウインさま、どうか本名を言つちや、いけませぬよ。皆さま、そのつもりでみて下さい。きつと人員調査にやつて来たのでせうから」

チウ「よしよし、心配するな」

番僧「レールさま、ちよつと戸を開けて下さい」

レールは入口の破れ戸をガラリと押し開けニコニコしながら、

「ヤア、これはこれは、朝も早うから御苦勞でござります。何の御用か知りませぬが、トツトとお這入り下さい。拙宅も此頃はお客様が殖えまして大變賑やかうござります。にはかに六人家内となつたものですから、懷の寒いレールにとつては

聊か困つてをりますわい。貴方も此頃は物價騰貴で、さぞお困りでせうな」

番「君のいふ通り、僕も大變生活難に襲はれてゐるのだ。女房の内職で、どうな

りかうなり、「ひだるい」目はせず暮してゐるが、ずるぶん辛いものだよ。君

はこれといふ仕事もしてゐないやうだが、ずるぶん裕福な暮らしをしてゐるらしい

ね。鶏が叩いてあるぢやないか。然しこの四人の方は何處から來られたのだ。實

はこの長屋の嬪が本山へ密告して來たものだから、職務上調べぬわけにも行かず、

また君に苦い面をしられるのを知りながら、これも職務上やむを得ないのだから、

一應取調べに來たのだ。どうか悪く思はないやうにして下さい」

レ「久振りで郷里の友人や、私の女房や、マークの女房が尋ねて來てくれたので

すよ。明日はどうして喰はうかと兵糧がつかたので頭痛鉢巻をやつてみたところ、

郷里からこの通り鶏と米と酒を持つて來たものだから、久振りで御馳走にありつ

かうと思つて、朝から立働いてみたところですよ」

「成るほど、どうも田舎の人らしいね。然しながら田舎にしては、言ふと濟まぬ

が、垢抜けのした方ばかりだな」

「この友人はバクシーといつて、チツとばかり財産を持つてをります。吾々二人は國士として國家のため、身命を賭して活動してゐるものだから、妻子を養ふことが出来ないのです、このバクシーさまの家へお世話になり、下女奉公に使つてもらつてをつたところ、女房が一度夫の顔が見たい顔が見たいとせがむものだから、はるばると女房を連れて、バクシー夫婦が昨日来てくれたのです。マアお前さま、久振りだ、一杯やつたらどうですか。別に貴方の職掌にも影響するやうな事はありませんまい」

「イヤ、有難う。それでは一杯頂戴しやうかな。僕だつて同じトルマン國の人民だ。如意棒をブラ下げてゐるだけの違ひだ。一つ上司の機嫌を損じたが最後、たちまち丸腰になつて労働者の仲間へ入れてもらはなくちやならないのだから、今の間に君たちと懇親を結んでおかなくては、たちまち自分の前途が案じられて仕方がないからな。どうかレールさま、よろしく頼みますよ」

「今の高級僧侶などは、何奴も此奴も皆賄賂をとつたり、御用商人と結託して、甘い汁を【しこたま】吸うてゐやがる餓鬼ばかりだ。役僧の中でも比較的潔白な

のは君たち番僧仲間だ。それでも小ラマぐらゐになると、ずゐぶん豫算外の収入があるといふ事だ。君たちも労働者の前で如意棒を見せて威張り散らすくらゐが役得では詰らぬぢやないか。普選が間もなく實行される世の中だ。君も吾々仲間に這入つて向上運動の牛耳をとり、會衆にでも選出されて、國政と宗政の大改革を斷行し玉へ。月給の安い番僧なんかやつてをつたところ、つまらぬぢやないか。なにほど出世したところで、番僧の出世は小ラマが關の山だ。それも三十年くらゐ勤續せなくちや、そこまで漕ぎつけるわけにやゆかないからな、八八八八
「ウン、そらさうだな。會衆にでも出て、うまく立働けば伴食淨行くらゐはなれるかもしれない。悪くしたところで首陀頭の椅子ぐらゐにはありつけるかも知れぬ。生活の保證さへしてくれる者があつたら、僕は今日からでも辭職して君たちと一緒に活動するつもりだがな」
「そりや面白い、番僧の中でも、君はどつか違つたところがあると向上會員の仲間からも言はれてゐるのだ。思ひきつて番僧なんか棒にふり玉へ。君の生活は、このバクシーさまがきつと保證して下さるよ。さうしてバクシーさまに附いてさ

へをれば、もはや大磐石だ。寺庵異持法、國土團、……法も、何も、へつたくれ
も、あつたものぢやない」

チウ「こいつア面白い番僧さまだ。オイ君、僕は實のところ、打ち割つていふが
チウイン太子だ。教政を改革せむために向上會員の仲間へ偵察に變装して來て
るのだよ。君もどうぞや、今日限り番僧をやめて向上運動に没頭する氣はないか。
淨行ぐらゐにやきつと僕がしてやるよ」

番「本當ですか、腹の悪い、人を騷るのでせう。恐れ多くも太子様が、かやうな
處へおいでなされる道理はありますまい」

「因習に囚はれた現代人は、太子といへばどつか特種の權威でもあるやうに誤解
してゐるが、太子だつて神柱だつて、白い米を食つて黄いろい糞を垂れる代物だ、
ハツハハハハ」

「イヤ分りました、間違ひござりますまい。何だかどこともなしに氣品の高い人
と思つてゐましたが、さうするとこの御婦人達は何れも雲の上うへに生活せいくわつを遊あそばす貴
婦人でせう。私はテルマンと申す小本山の番僧でござります。どうか宜よろしう今後こんご

は御指導を願ひます。如何なる御用でも犬馬の勞を惜しみませぬ」

「ハ、よしよし、これで新人物を一人見つけた。早速の獲物があつた、ハハハハ
戸の隙間から太陽の光線が五條六條黒ずんだ畳の上落ち、煙のやうな埃がモ
ヤモヤと輪廓を描いて浮游してゐる。豆腐屋のリンがかすかに聞こえて来る。新
聞配達のリンが一入高く響く。

(大正一四・八・二五 舊七・六 於由良海岸秋田別荘 北村隆光録)

第十七章 春の光(一七八四)

千草姫は、戀しさ懐しさ、夢寐にも忘れぬキューバーの所在が分らぬので、精
神ますます混乱し、照國別、照公の神司を神勅と稱して、無念晴らしのため無理
やりに牢獄に王の命令を藉りて投ぜしめ、あらゆる殘虐の手を加ふべく獄卒に嚴
命を下した。またチウイン太子、チンレイを修行のためと稱して城内より放逐し、

テイラには、キューバーの所在を求むべく嚴命し、ハリスを好餌をもつて過たしめ、今までの舊臣系統を殲滅せむ事を計るなど、實に惡逆無道の魔王となつてしまつた。千草姫はたちまち金毛九尾の惡狐に精靈を占領され、ガーデン王は八岐大蛇の片割にその心魂を占領され、千草姫の願使に甘んじ、キューバーを救ひ出さむと八方に手を廻し、極力搜索に全力を注ぐ事となつた。されどもチウイン太子が、荒井ヶ獄の岩窟に閉ぢ込めておいた事は、さすがの日の出神の肉宮も悟る事を得なかつた。千草姫はハリマの森に、キューバーの一日も早く歸り來たらむ事を祈願するため、數多の從臣を從へ警戒嚴しく輿に乗つて、朝夕二回參拜を勵むこととなつた。

マーク、レールの兩人はチウイン太子から、千草姫の肉體は既に他界し、金毛九尾の惡靈と入り代つてゐることを懇々と説き聞かされ、且つまた新聞の號外によつて、照國別、照公が牢獄に投げ込まれ、日夜殘虐の手に見舞はれ、生命の危険を感じ、もはや立つてもゐてもをられなくなつたので、レール、マークの兩人に耳打ちし、千草姫が參拜の途中を待ち伏せ、石礫をもつて彼を亡ぼさむ事を命

じた。兩人は喜び勇み、一身を國家のために捨つるは今此の時と石礫を懷にし、千草姫の輿の通過を今や遅しと待つてゐた。千草姫は首尾よく參拜を終り、七八町ばかり、數多の番僧や徒士に守られ歸つて來ると、路地口より躍り出でたる二人の兇漢、たちまち輿を目がけて石礫を二個まで投げつけた。石礫はどうしたものか手が狂つて命中せず、輿は其まま城内さして悠然と歸り行く。二人はたちまち其の場で番僧に捕縛され、一應小本山で取調べの上、重大犯人として城外の牢獄に投げ込まれる事となつた。相當に廣い牢獄も満員賣切れの盛況で、定員二人の牢獄へ投ぜらるる事となつた。この監房には照國別、照公の兩人が手を縛られ、たまま收容されてゐる。レールは照國別を見て、
『ヤあなたは照國別の宣傳使様ぢやございませぬか。どうして又このやうな所へ入れられなかつたのです』
照國『別にこれといふ悪い事はした覚えがありませんが、國王の嚴命だといつて、吾々兩人は嚴しく手足を縛られた上、昨夜から投り込まれてをります。いづれ嫌疑が晴れ、晴天白日の身となつて近い中に出獄し得るだらうと思つてゐます』

レ「ハテ、怪しからぬ事をやるものだ。太子様に承れば、貴方は今度の軍を應援下さった殊勳の第一人者と聞いてをりますのに、姐己の千草姫、いよいよもつて怪しからぬ事をやりよつたのでせう」

「なに、チウイン太子に縁故のある方ですか」

「ハイ、實は私の宅に太子、王女様を初め左守、右守のお嬢さままで忍んでおられます。このごろは千草姫に金毛九尾の悪狐が憑依し、功臣を退けあらゆる暴虐の手を加へむと致しますので、城下の人気は鼎の湧くがごとく、いつ大騒動が勃発するか分らぬやうになつて來ました。チウイン太子様は非常に此の事を御心配遊ばし、教政の改革を斷行すべく、今や大衆の代表者を集め御計畫中でございます。やがて貴方も無事出獄が出来るでせう」

「なるほど、承ればチウイン太子様の聰明なる、きつと教政の改革を遊ばすでせう。あの千草姫は、決して本ものぢやございませぬ。御本人の靈は既にすでに脱殻となり、金毛九尾の悪狐が巢食つてゐるのですから、この儘にしておかうものならトルマン國は混亂の巷となり、刹帝利家の滅亡は免れますまい。てもさても

困つた事が出来たものですなあ。時に貴方は何の嫌疑によつてかやうな處へ入れられたのですか」

「吾々兩人は向上運動の主張者兼宗教改革運動の代表者でございますが、チウイン太子の内命により、姐己の千草姫をベツトすべく、石礫をもつて車の辻の路地にまちうけ、輿を目がけて石礫を二個まで投げつけたところ、不幸にして命中せず、残念ながら、目的が達成せないのみか、脆くも番僧にふん縛られ、重大犯人として此所へ送られたのです。いづれ吾々は助かりますまいが、運を天に委して刹那心を樂しんでをります。何れ人間は一度は死なねばならぬものですから、國士として大衆の代表として殺されるのは満足です」

「ヤア、御精神を承り、感服いたしました。どうです、これから歌でも謡つて、面白くもない時間を費やさうぢやありませんか」

「ヤ、それはいい所へ氣がつかしました。四人がかはるがはる歌ひませう。まづ宣傳使から口切りをお願ひ致しませうかな」

照國「然らばお先へ失禮」

と言ひながら四邊に目を配り、獄卒の近くに居ないのを見て、

照國「ここはいづこそ月の國　トルマン國の城外に

淋しく立てる牢獄ぞ　數多の罪人ひしひしと

いづれの牢獄も充滿し　トルマン國の滅亡を

叫びあるこそ歎けれ　そもそもこれのトルマンは

ウラルの神の開きたる　月第一の神國ぞ

物質文明の魔の風に　吹き立てられて大衆の

頭に立ちて御教を　布く神柱初めとし

それに随ふ從僧は　敬神尊祖愛國の

誠の道を忘却し　ただ自己愛に耽溺し

下大衆の平安を　残る隈なく脅かし

肉をばけずり骨をそぎ　國の力は日に月に

日向に氷と消えてゆく　かかる所へバラモンの

大足別の軍勢は 妖僧キユーバーを先頭に

この神國を奪はむと 三千餘騎を従へて

勢ひ猛く攻め來たる この國難を見るよりも

チウイン太子は逸早く 全國內の兵員を

一度に召集遊ばして 討伐軍を組織なし

在野の英雄ジャンクをば 拔擢なして重用し

照國別の神軍を 加へてここに堂々と

敵の後ろをつきければ 大足別は前後ろ

敵の砲火をあびながら 軍馬や武器を遺棄しつつ

あらゆる民家に火を放ち 雲を霞と逃げ散りぬ

この戦ひに左守司 右守も共に陣没し

トルマン城は柱石を 今や全く失ひて

教務の運用中絶し 國民不安の氣に打たれ

人心恟々たりしをり 千草の姫は忽ちに

天命盡きて他界され
その肉體に常世國

生れ出でたる惡狐奴が
巢ぐひて王を誑惑し

總ての智者や忠義もの
一人も残らず排斥し

この神國を魔の國と
亂さむものと企むこそ

實にも忌々しき次第なり
吾等は神の命をうけ

世界のあらゆる國々の
難みを救ひ助けむと

産土山の聖場を
立ちて漸く來て見れば

思ひもよらぬこの難み
實に口惜しき次第なり

さはさりながら吾々は
尊き神の守りあり

大空つとふ望の月
一たん黒雲包むとも

忽ち科戸の風吹かば
もろくも雲は散りはてて

再びもとの満月と
輝き渡り下界をば

隈なく照らさむ吾が御靈
必ず案じたまふまじ

汝も國家大衆の
危急を救ふその爲に

神かみに等ひとしき行かう動どうを

取とらせたまひしものならば

天地てんちの神かみは何なんとして

汝等なれらふたり二人を見捨みすてむや

一旦いつたん雲くもはかかれども

やがては天地あめつち晴明せいめいの

日月じつげつ下界げかいを照てらす如ごと

難なやみは晴はれて萬民ばんみんの

救すくひの主ぬしと仰あふがれて

時ときめきたまふは目まの前あたり

勇いさませ玉たまへ惟かむ神ながら

神かみに誓ちかひて神司かむつかさ

ここことあに言たて擧まつげ奉まつる

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

印度いんどの海うみはあすると

千草ちぐさの姫ひめは滅ほろぶとも

誠まこと一つの汝等なんぢらは

必かならず神かみの御み恵めぐみに

トルマン國こくの御柱みはしらと

輝かがやきたまふも近ちかからむ

吾等われらふたり二人も牢獄らうごくに

苦くるしき日にち夜やを送おくれども

恵めぐみの神かみは日ひならず

現あらはれたまひて速すみやかに

安やすく救すくはせたまふべし

ああ惟かむ神ながら々々ながら

御靈みたまの恩ふ頼ゆを願ねぎまつる

照公はまた歌ふ。

吾は照公神司 吾が師の君に従ひて

トルマン國に来て見れば 思ひもよらぬ大騒動

この國難を救はむと 大和心をふり起し

神の司は忽ちに 軍の司と早がはり

チウイン太子と諸共に 命を的に戦へば

神の守りは著く トルマン國を覆ひたる

醜の黒雲忽ちに 隈なく晴れて日月の

光も清く照りにけり 然るに何ぞ計らむや

神に等しき勳功を 樹てし吾々兩人を

金毛九尾の惡魔らの 千草の姫やガーデンの

王の御靈を誑惑し かかる汚き牢獄に

あらゆる恥辱を與へつつ 閉ぢ込めおくぞ歎てけれ

照公はたとへ死するとも

誠の道に盡すもの

すこしも厭ひはせぬけれど

一大使命を帯びたまふ

吾が師の君を苦しめます

この残念を如何にして

晴らさむよしもなきままに

心をこめて大神の

御救ひ祈り聲あげて

血をはく思ひの吾の胸

推量あれよ御兩人

神の救ひの一日も

早くあれよと願ぎまつる

救ひの神の一日も

早く現はれ玉へよと

畏み畏み願ぎまつる

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

レール 吾は今牢獄の内^{うち}にありながら

忘れざりけり國^{くに}の行末^{ゆくすゑ}

マークマクク 玉たまの緒をのよしや命いのちは捨すつるとも
如何いかで惜をしまむ國くにのためには

照國てるくに別わけ 梅公うめこうの珍うづの司つかさは今いまいづこ
聞きくにつけても涙なみだこぼるる

照國てるくに別わけ 梅公うめこうの珍うづの司つかさは今いまいづこ
聞きかま欲ほしやと朝夕あさゆふ祈いのるも

照國てるくに別わけ 梅公うめこうの珍うづの司つかさは吾々われわれを
救すくはむために近ちかく來きたらむ

かかる所へ一人の牢番、靴音高く入り來たり、四邊を見廻し人無きを見て安心せしものの如く、

「もし師の君様、私は春公でございます。葵の沼においてお姿を見失ひ、このトルマン城下へ参りましたところ、何の手掛りもなく、師の君一行の所在が分りませぬので、看守を出願し、やつと十日以前に合格し、かかる卑しき獄卒を勤めてをります。どうか御心配下さいますな。時期を考へ屹度お助けいたします。王様からの嚴命で、「湯も水も與へな、食料は日に一回にいたせ、彼らが自然に餓死するまで捨ておけ」との小ラマへの達しが参つたさうでございます。しかしながら私が當番に當つてをります以上、決して御心配下さいますな」

照國「ヤ、お前は春公だったか、これも全く神様が、かかる事の出で來たるべきを前知したまひ、お前を牢番にするやう取計らつて下さつたのだらう。春公、覺られないやうに氣をつけよ」

春「ハイ、心得ましてございます。どうか御一同様、御安心下さいませ」

ラマが巡視に來たと見え、靴音がギウギウと高く聞こえて來る。春公は、

「オイ、未決囚ども、静かにいたさねば厳しき懲戒を加へるぞ」
と言ひながら、ラマに最敬禮をやつてゐる。高壁の外には新聞號外の配達のリ
ンが耳騒がしく響いてゐる。デカタン高原の名物、大暴風は牢獄の桁をギクギク揺
すつて通る。

(大正一四・八・二五 舊七・六 於由良海岸秋田別荘 加藤明子録)

第一八章 鳳戀(一七八五)

千草姫は傲然と日の出神氣取りで、刹帝利を脚下に跪かせながら、
「三千世界の救世主、底津岩根の大【みるく】の太柱、第一靈國の天人、日の出
神の生宮が、汝ガーデンに申し渡す仔細がある。性根を据ゑてしつかり聞けよ」
王「ハイ、何事なりとも仰せ下さりませ。絶対服従を誓つてをりまするから」
千草「汝が言葉、日の出神、満足々々。汝は之より三千世界の覇者となり、世界

統一の神業に掛らねばならぬ大責任があるぞや。それについては、人間の分際としては何ともすることは出来ない。このたび天より天降りたる日の出神、千草姫の肉體を宿といたし、神變不思議の神力をもつて、まづ第一にトルマン國の足元を淨め、逆臣を排除し、水晶靈をよりぬいて神の御用に立て、神政成就の基礎を固むべき神界の經綸なれば、一言一句といへど、決して反いてはなりませんぞ。御承知であらうなア」

「ハイ、謹んで御神命を承りませう」

「汝は神の命を用ひず、八岐大蛇の靈の憑依せし、田舎育ちのジャンクを依然として、國政に當らしむるのは、神界の大命に反き叛逆の罪最も重し。一時も早く勇猛心を發揮し、かれジャンクを放逐せよ」

「ハイ、御神命は確かに承知いたしてをりますが、トルマン國切つての、彼は人望家。三十萬人の國民は彼一人を力といたし、三千騎の兵士は彼を大將軍と尊敬してをりますれば、いかに神命なればとて彼が頭上に斧鉞を加ふる事は、國家存立上いな刹帝利家存立上、最も危険至極かと存じます。なにとぞ此儀のみは少時

保留を願ひたう存じます」

「ホホホホホ、愚かなり、ガーデン王、彼がごとき野武士をもつて、トルマン神國を統理せしめむとするは、あたかも巨岩を抱いて海に投ずるより危ふからむ。神力無雙の日の出神、天降りたる以上は、何の躊躇逡巡するところあらむ。速やかに英斷をもつて彼ジャンクを放逐せよ」

「しからは是非に及びませぬ。しかしながら、彼を放逐すれば、教政を輔弼する重僧がござりませぬ。澤山の臣下はあれど、何れも大衆の信望をつなぐに足らず、國帑を私し、各々競うて金殿玉樓を造り、豪華の生活を送り、大衆の怨府となつてをりますれば、ジャンクに代るべき適當の人物なきに苦しみまする」

「ハルナの都の大黒主が信任厚きキューバーを召出だし、彼に國政を任せなば、國家はますます榮え、天下は太平、民は鼓腹擊壤の聖代を來たさむ事、鏡にかけて見るごとくであるぞや」

「そのキューバーを召出ださむにも、今において行方分らず、何とぞ何とぞ神様の御神眼にて、在所をお知らせ下さらば、速やかに彼を迎へ取り、御神慮に叶ふ

やう取計らうでござりませう』

『汝においてその覺悟がきまつた上は、何をか言はむ。神が引寄せるに仍つて、速やかにジャンクの職を解き、國許へ追ひ返すべし』

『ハハア、たしかに承知仕りました』

『さすがは汝は名君、神の心に叶ひし者、ヤ、満足々々』

かかる所へ恭うやしく現はれ來たのは、教務總監のジャンクであつた。

ジャンク『謹んでお伺ひいたします。お差支へはございませぬか』

千草『決して遠慮には及ばぬ。神が許す、何なりと申し上げて見よ』

ジャンク『恐れながら、殿下に申し上げます。トルマン國の危急を救ひ給ひし、三五

教の宣傳使照國別、照公の神柱を、何の罪もなきに、城外の牢獄に投げ込み給ひ

しは、教務總監のジャンク、合點が參り申しませぬ。いかなる事の間違ひかは存

じませぬが、彼二柱の神司においては、一點の疑ふべき言行もなく、全く冤罪で

ございます。何者が讒言いたしましたか存じませぬが、賢明なる殿下のお考へ

をもつて、速やかに解放遊ばされ、二柱の前にその無禮を陳謝遊ばさねば、この

國土は永遠に保たれますまい。この儀とくとお考へを願ひます」

王「……」

千草「愚かなり、ジャンク。汝は今日ただ今より、この日の出神の生宮が、教務總監を解職する。足元の明い内、旅装を整へ國許へ蟄居したがよからう」

ジャ「これは心得ぬ神様のお言葉、トルマン國の教政はガーデン王様の統治し給ふところ、その教政を内助遊ばすのは王妃の君。然るに何ぞや、王または王妃の名を用ひざる日の出神の命令に仍つて、國家を代表したる教務總監の解職が出来ませうか。ジャンク斷じて辭職は仕らぬ。なほなほ不審に堪へざるは、トルマンの國土を將來統治し給ふべき地位にあらせらるるチウイン太子様を始め、王女チンレイ様を、修行のためと稱し、あるひは神の命令と稱し、世界視察の名の下に放逐遊ばしたのは、いよいよ以て怪しからぬ次第ではござらぬか。教務總監ジャンクに一言のお答へもなく、かかる重大事を、勝手氣儘に斷行さるるは、自ら教國の綱紀を紊亂し、王家の滅亡を招くべき因ともなるでござりませう。どうか賢明なるお二方様、ジャンクのお言葉に耳を傾け、冷靜に御思案を願ひます」

千草「黙れジャンク、天地神柱の言葉に二言はないぞ。一時も早く職を去つて郷里へ歸れ」

「ハハハハハハ、これは怪しからぬ。未だ教王殿下より、歸國せよとの命令は受けてはをりませぬ。恐れながら、王妃の君にはこの重臣を任免黜陟遊ばす權能はございませぬ。又たとへ教王殿下より解職を嚴命さるるとも、國家危急の場合、このジャンク、一步も動きませぬ」

「左守、右守の重臣が他界し、邪魔者が無くなつたと思つての汝の暴言、もはや容赦は致さぬぞや、覺悟召され」

「容赦いたさぬとは、どうしようとして仰せらるのでござりますか」

「三千世界の救世主、底津岩根の大「みろく」の太柱、第一靈國の天人、日の出神の生宮が、立所に汝が生命を取り、その肉體を烏の餌食となし、その精靈を最低の地獄に墜してやるが何うぢや。それでも辭職をいたさぬか」

「アハハハハ、モウその長たらしい御神名は、ジャンク聞き飽きましてございませぬ。王妃には狂氣召されたか。狂氣とならば危険千萬、座敷牢を造つて、病氣本

復ぶくするまで閉とぢ込こめておきますぞ」

千草「汝なんぢ不忠不義ふちうふぎの曲者くせもの、肉體上にくたいじやうから言いへば、王妃わうひの君きみ、神界しんかいより申まをさば、三千さんぜん世界の救世主きうせいしゆ、底津岩根そこついはねの大おほ「みろく」……」

と言いひかけるのを、ジャンクは手てを振り面かほを擡しかめて、

「モウモウ結構けつこうでございます。第一だいいち靈國れいこくの天人日てんにんひの出神でのかみの生宮いきみやは、とづくに承知しやうちいたしてをります。しかしながら能よくお聞きき下くださいませ。大衆同盟會たいしうどうめいくわいなるものが

組織そしきされ、千草姫様ちくさひめさまにおいてこの際さい御改心ごかいしんなき時は、たちまちクーデターを行おこなひ、教政けうせいを根本こんぽん的てきより改革かいかくせむと、拙者せつしやの所ところまで擧宗きよしう一いつ致ちてき的に申まをし出いでてをります

ぞ。このジャンクは王妃わうひ様の御危難ごきなんを救すくふべく、大衆同盟會たいしうどうめいくわいの幹部連かんぶれんをいろいろと、口くちを極きはめて説とき諭さとし、宥なだめてゐる最中さいちゆうでござりますが、もはや拙職せつしよくの力ちからで

は及およばないとところまで、衆心しゆうしん激昂げきかうし、何時いつ大暴風大怒濤だいぼうふうだいにたうの襲來しふらいして、この殿堂でんだうを根底こんていより覆くつがへすやも計はかり知しられませぬ。實じつに危急存亡ききふそんぼうのこの場合ばあひ、何なにとぞ何なにとぞ

御熟考ごじゆかうを願ねがひたう存ぞんじます。もはや申まをし上あぐることはございませぬ。これにて教けう務所むしよに引下ひきさがります。左様さやうならば、御兩所ごりやうしよとも、よき御返詞ごへんじを下くださいますやう、

鶴首してお待ち申してをりまする」

と言ひ捨て、足音高く憤然として教務所指して出でて行く。後に千草姫、ガーデン王は少時無言の幕を下してゐた。

千草「ガーデン王殿、汝は今ジャンクの言葉を聞き、よほど心を悩ませてゐる様子に見えるが、彼がごとき悪魔をして、教政の樞機に參與せしむるは危険この上なし。教王家の一大事、天下の前途を思はば、神の命に従ひ、彼が命を奪る工夫を、一時も早くめぐらされよ」

王「ハイ、絶對的に教王家に危害を及ぼし、天下を轉覆する悪魔とならば、非常手段を用ひ、彼を亡ぼさねばなりませんまいが、苟くもウラルの神に仕ふる者、かかる暴虐の手を下すことは、私としては到底出来ませぬ。何とぞ何とぞ、最前仰せられた通り、神徳をもつて、彼が命を立所にお断ち下さらば、實に仕合せでござりまする。一國の教王が刺客を用ひて、重僧を亡ぼす如きは、殷の紂王にもまさる悪虐、かかる事が大衆の耳に入りますれば、到底大衆は承知いたしますまい。神様より命をおめしになる方法をお取りになれば、これに越したる良策はござい

ますまい」

「如何にも、汝の言一理あり。いざ之より日の出神の生宮、ハリマの森に参拜いたし、ウラル彦命と協議の上、彼が命を召取るであらう。ガーデン王殿、臣下に輿の用意申しつけられよ」

「早速申しつけ、準備に取りかかりませう」

その日の七つ時、またもや千草姫は輿に乗り、數多の番僧に護衛されながら、ハリマの宮に詣で、神殿にて何事か分らぬことをベチヤベチヤ囁り、狂態を演じながら、再び輿に乗つて行列いかめしく歸り來る。この行列の間は、大衆の通行を禁じ、一閒ごとに番僧を立たせ、物々しき警戒をやる事となつてゐる。そこへ、宣傳歌を聲高く歌ひながら、平然として現はれ來たり、輿の前方を横切らむとするや、警固の番僧は苦もなくこれを取押さへた。この物音に千草姫は、輿の簾を上げ眺むれば、眉目清秀の一美男子である。千草姫はたちまち戀慕の情おこり、いかにもして、この美男子を城内に連れ歸らむものと煩悶しながら、思ひ切つて、輿の簾を上げ、半身を外に現はし、

「ヤアヤア番僧ども、その犯人は妾において、自ら取調べたき仔細あれば、妾と共に城内へ引立て來たれよ」
と嚴命する。番僧は王妃の言葉、一も二もなく承諾し、この犯人を縛つたまま、輿の後に従ひ城内に送り届けることとなりぬ。

(大正一四・八・二五 舊七・六 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第十九章 梅花團(一七八六)

千草姫は意氣揚々として城中に歸り來たり、ガーデン王の居間に入り、
「日の出神の生宮、ガーデン王に申し渡す仔細がある。よつく承れ」
王「ハイ、首尾よう御下向になりました、お目出たうございます。御用の趣、慎んで承りませう」

千草「第一靈國の天人、日の出神はウラル彦命、盤古神王等とジャンクの處置に

ついで、長時間協議をこらせし結果、ここ一週間の間に彼が命をたち、教國の害毒を除くべく評定がきはまつたぞや。それまでは汝、必ず必ず、彼に暴虐の手を加ふる勿れ。自然に消滅いたす神の仕組を致しておいたから……」

「ハイ、その御神勅を承り、大いに安心しました。については教國の樞機に任ずべき重臣として採用すべきキューバーは、神界において、何時お召出し下さいまするか」

「否、心配は致すに及ばぬ。彼キューバーは神界において、眷族を使ひ、よくよく查べみれば、當城の牢獄を破り、逃げ行く途中、狼に追撃され、終にはもろくも全身を群狼のために喰ひつぶされ、非業の最後をとげたとの、眷族どもの復命止むを得ず、盤古神王と相談いたせしところ、第一天國の天人の靈を天より遣はすによつて、日の出神殿、その身靈を城中へ伴ひ歸り、教政を執らば、トルマン國は申すに及ばず、三千世界の支配者として、世界萬民に仰がるべし、とのお告げなれば、この日の出神心も勇み、役僧どもに守られて歸途につく其の途すがら、一介の男子と化し、吾が輿に近よらむとし玉ふや、心眼開けざる盲同様の

番僧どもは、輿に危害を加へ無禮を與ふる者となし、即座に捕縛してしまつたのである。てもさても譯の分らぬ俗物くらゐ困つた者はござらぬぞや。オホホホ

「その身靈の宿つた男子は如何なされましたか」

「ただ今玄關口に番僧付きそひ、待たせあれば、汝は最敬禮をもつてお迎へ申して來たれ。三千世界の救世主、日の出神の片腕ともなり、汝が教政を輔くる教務總監ともなるべき、現幽兩用の大神人であるぞよ。サ、早く早くお迎へなされ」

王は「ハアハア」と頭をさげながら、玄關口に自ら走り出た。警固の番僧はハツと驚き、最敬禮を施してゐる。ガーデン王は捉はれ人の前に兩手をつき、恐れ戦きながら、

「これはこれは、第一天國の天人の靈様、分らぬ臣下どもが、【いかい】御無禮を仕りました。何とぞ何とぞこちらへお上り下さいませ」

梅公は無言のままニコニコしてゐる。護送の番僧は驚いて、手早く繩目をとき、青くなり無禮を陳謝し、猫に追はれし鼠のごとく小さくなつて、スゴスゴと歸り行く。

梅「拙者は、天津御國より盤古神王の命をうけ、トルマン國を救はむため、人體を顯はし突然現はれし者、當家には日の出神の生宮、三千世界の救世主、大「みろく」の太柱、第一靈國の天人様が御降臨の筈、どうかその居間へ案内めされ」と應揚にいふ。ガーデン王は千草姫が、第一靈國の天人といふ事は、九分九厘まで信じてゐたが、今この神人の言葉を聞いて、一層確信を強め、ペコペコしながら、梅公の先に立ち、千草姫の居間を指して案内する。千草姫は梅公の姿を見て、ますます悦に入り、

「ヤ、これはこれは、高宮彦殿、よくマア妾が神業を助けむと、お越し下さいました。妾は神界においては、日の出神、又の名は高宮姫でございます。ヨモヤお忘れはございますまいなア」

梅「いかにも、某は高宮彦に間違ひない。しかしながら餘はその後天國に昇り、仙術をもつて若返り、今は斯くのごとく絶世の美男子となつて、衆生を濟度すべく再臨したのだ。日の出神の生宮殿、もはや安心あつて可からうぞ」

千草「いかにも、これにてトルマン國の基礎も定まり、教王家の祥兆、實に慶賀

に堪へませぬ。ガーデン王殿、神界秘密の用事あれば、暫く命令を下すまで、此の場をお外しなされ」

王「ハイ畏まりました。御用がございましたら、何時なりとも、お呼び出しを願ひます。左様ならば、高宮彦様、日の出神様、ゆつくりとお休み下さいませ」

と言ひながら、イソイソとして吾が居間に歸り行く。梅公は忽ち體を崩し、大胡坐をかきながら、

「オイ、君、千草君、いないな高姫君、よくもマア化けたものだな。どうだい、久振りでもた一芝居打たうぢやないか、僕ア時置師の空助だよ」

千草「如何にも、あなたは空チャンでしたかいな。何とまあ、立派な御容色だ」と。私、あまり變つてゐらつしやるので、外の方だと思つてゐましたよ」

梅「何とすごい腕前ぢやないか。あれほど僕に固い約束をしておきながら、美しい男が通つたといつて、其奴を喰へ込まうといふ了簡だから、本當に男はよい面の皮だ。その美貌で、なまめかしい言葉で、あやかされてしまや、どんな硬骨男

子でも一たまりもなく參つてしまふよ。幸ひ僕は時置師の本人だから可かつたものの、さう小口から男を喰はへられちや約らないからのう」

「ホホホホあれだけ、固う約束をしておいたものですもの……、貴方こそ、よい女をみつめて、妾をみすて、どつかへうろついてをつたのでせう。本當に苛いワ」

「馬鹿いふない。僕ア、お前の所在を捜し索ねて、ほとんど三年、彼方此方と苦勞をしてをつたが、お前がハリマの森の神殿で祈願をこめてる時、後ろ姿をチラツと見て、よくも似たりな似たりな、高チヤンに瓜二つ……だと思ひ、先へ廻つて、輿の中を覗かうとした時、番僧の奴に取つ捕まつてしまつたのだ。お前の靈は、どこまでも王妃の靈と見えて、偉いものだのう」

「そらさうです共、第一靈國の天人ぢやございませぬか。ヤツパリ上になる靈はどこまでも上にならねばなりませんからな」

「時にお前、これから何うする考へだ。俺と一緒に此處を逃げ出し、また曲輪城でも造つて仲よう暮す氣はないか、それが聞きたいのだ」

「そら、貴方のお言葉なら何うでも致しますけれど、これだけ立派なトルマン城

を扣えながら、別に曲輪城なんか拵へる必要はないぢやありませんか。これから貴方と私と、ここを根據としてウライナイ教の本山となし、三千世界の救世主と天晴れ現はれたら何うでせうかな

「あ、それも可からう。そんなら之から、お前と一つ内々相談をしようか」

「どうか、さう願ひませう」

「この室は何だか窮屈でたまらない。お前の寢所がないか。どうか其處へ案内してもらつて、久振りで寢物語りをやりたいものだがな」

「あ、さう願ひませう。ホホホ、何だか恥づかしいワ」

と言ひながら、目尻を下げ、梅公の手を曳いて己が居間へと伴ひゆき、ドアを固くとざし外から開かないやうにして、絹夜具を布いて二人は枕を竝べて横たはつてしまつた。

梅 「オイ、高チヤン、久振りだな」

千草 「本當にお久しぶりございます」

「お前が自惚鏡の前で、ウツトコを映寫してゐた時分もずるぶん綺麗だつたが、

その時に比べて見て、一人美しうなつたぢやないか」

「何だか知りませぬが、三十年も若くなつたやうな氣がいたしますワ。これ御覽なさい、肌の艶なんか、まるで白金の光のやうですわ。しかし空チャンも大變綺麗になつたぢやありませんか。まるでつ切り、ダイヤモンドのやうな、體から光が現はれるぢやありませんか」

「そらさうだらうかい。第一天國の天人の靈だもの、しかしこれから大神業を開始するについては、先づ第一に天下に向かつて、お前と私との信用を得るため、仁惠令を行はねばなるまい。思ひ切つて、牢獄の囚人を解放したらどうだ」

「ハイ、戀しき貴方のお言葉、否む譯には行きませぬ。仰せに従ひ、仁惠令を行ふやう、ガーデン王に申しつけませう。しかしながら特別の重大犯人だけは許すことは出来ませぬ。吾々の身邊を窺ひ、いつ危害を加へるか知れませぬからな」

「ハハハハ高チャン、やつぱりお前は女だ。そんな氣の弱い事をいふものぢやない。牢獄に一人の囚人もゐないやうにするこそ、仁惠といふものだ。お前は照國別、照公の兩宣傳使を非常に氣にかけてゐるやうだが、この際思ひ切つて放免し

た方が、何程お前の信用が上るか知れないよ。城下の噂を聞けば、大變な事になつてゐるよ。三五教の宣傳使を二人まで牢獄へ打ち込むなんて、怪しからぬ千草姫だ。今クーデターを行ひ、千草の首を取り、大衆の怨みを晴らさにやおかぬ……とそれはそれはエライ悪い人氣だよ。さうだから此際、お前がガーデン王に言ひつけ、仁惠を行ひ、大衆の疑ひをはらせ……といふのだ。これより可い方法は無いからなア」

「なるほど、それも一つの政策としては可いかも知れませぬな。時に空チヤンに折入つて願ひたいのは、あのジャンクといふ奴、なかなかの「したたか」者で、日の出神の生宮の神命でさへも拒むといふ剛腹者だから、一寸困つてゐるのよ。何とかして彼奴を放り出す工夫はありますまいかな」

「ハハハ吹いたら飛ぶやうなジャンクが何だ。しかしいま彼を放逐すると却つてお前の人氣が悪くなり、大望の邪魔になるから、あの儘にしておけ。今にこの空助が頭を上げたが最後、ジャンクなんか、谷底へ一けりに蹴り落としてしまふ考へだからな」

「ホホホホ、そらさうでせうな。貴方の御力量はとつくに承知してをります。廣いこの世界に貴方に優る豪傑はないんですもの」

「そらさうだ、さ、一時も早う王を呼び出して、仁惠令を行ふべく取計らせたが可からうぞ」

「空チヤン、さう急くにも及ばぬぢやありませんか。久振りで焦がれ焦がれた男が面會したのぢやありませんか。マア今晚はゆつくりと抱いて寝て下さいな。わたえモウ空チヤンの面みてから、勇氣も何もなくなり、ヤヤ子のやうになつてしまつたワ」

「人氣沸騰し、今やクーデターの勃發せむとする矢先だもの、一刻の猶豫も出来ないよ。早く教王を呼び出して仁惠令を行はしめなくちや、安心して寝るわけにもゆかぬぢやないか。それさへ濟めば、十日でも百日でも、三年でも五年でも、お前にひつついて放しやしないよ。厭といふところまで抱き締てやるからなア」

「ホホホホそんなら、教王に日の出神が命令を下しておきます。それさへ濟めば寝て下さるでせうな」

「そらさうだとも、サ、早くやつてくれ。特別急行で頼むよ」

千草「承知しました。飛行機でやつつけませう、ホホホホ」

と笑ひながら、教王の居間にソロリソロリと、両手を擴げ、三つ四つ羽搏きしながら進み入る。教王は一生懸命にウラル教の教典を、首をかたがて調べてゐた。

千草「ホホホホ、ガーデン王殿、えらい御勉強、日の出神、誠に感じ入ったぞや。只今お出で遊ばした神人は、天國にても名も高き時置師の神様であつたぞや。この神が現はれ玉うた上は、トルマン城は大磐石、御安心なされ」

王「ハイ、有難うございます」

千草「ついては、日の出神が其方に申し渡す仔細がある。よつく承れ」

王「ハイ」と俯むく。

千草「日の出神自ら教王の居間に現はれたのは、餘の儀ではない。まづ第一に五

六七神政開始のお祝ひとして、牢獄の囚人を、時を移さず、一人も残らず、仁恵

令を發布して放免せられよ。これぞ全く、三千世界の救世主、底津岩根の大「み

ろく」の靈體、第一靈國の天人、日の出神の生宮の神命でござるぞや」

ガーデン王は「ハイ」と答へて、直ちにジャンクを呼び、牢獄の囚人を一人も残らず解放してしまつた。千草姫はニコニコしながら、吾が居間に歸つてみれば、梅公はグウグウと高鼾をかいて、他愛もなく眠つてゐる。

千草「コレ、空チヤン、起きて下さらぬかいな。何ですか、タマタマお面みせておいて、本當にスゲナイ人だワ。もし、空チヤンつたら、目をあけて下さいな」
何ほど揺すつても、呼んでも、鱧のやうな高鼾をかいて一寸も氣がつかぬ。千草姫は止むを得ず、梅公の寢姿を少時打ち見守つてゐた。

千草「ホホホ何とマア、氣高いお面だこと。色あくまでも白く、搗立の餅のやうなお面の生地、眼許涼しく、鼻筋通り、口は大きくもなく、小さくもなく、お髭の具合といひ、お頭の髪といひ、肌の滑らかさ、お爪の光澤、どこに一つ、黠の打ち所のない、宇宙第一の美男子だワ。こんな美男子を男に持つこの高チヤンは、何といふ仕合せ者だらう。ホホホホ、お涎が知らぬ間に一合ばかり、お膝の上へこぼれよつたワ。ガーデン王のやうなド茶瓶頭や、キューバーさまのやうな、

【さいこ】槌頭をみてゐた目には、一人立派に見えてたまらないワ。味の悪い腐

つたドブ漬を食た口で、特製の羊羹を食た時のやうな氣がするのだもの、ホホホホ。てもさても愛らしい、凜々しい、男らしい、神さまらしいお姿だこと」
と面を撫でたり、目をあけて見たり、なぶり物にして楽しんでゐる。時しも城外の牢獄の囚人を解放したため、囚人が一齊に「萬歳萬歳」と叫ぶ聲、窓ガラスを通して響き來る。

千草「ホホホホ空チヤンの御發明によつて、牢獄の囚人が解放され、萬歳を叫んでゐるやうだ。囚人も萬歳だらうが、この高チヤンも天下無雙の英雄豪傑美男子に會うて萬々歳だワ、オホホホホ」

梅「あーあーあ」

と缺伸しながら、兩手を又ツと伸ばし、

「ヤア、高チヤン、お前そこにゐたのか」

千草「ハイ、ゐましたとも、貴方どうですか。何程ゆり起しても、喚いても起て下さらぬのだもの」

梅「オイ、金毛九尾の容物、千草姫の亡きがら、高姫の再來、しつかり聞け。俺

は時置師ときおかしの空助もくすけでも何なんでもない。三五教あななひけうを守護しゆごする第一靈國だいいちれいこくの天人てんにん、言靈別ことたまわけの工くンゼルだ」

といふより早くはや、大光團だいくわうだんとなつて、千草姫ちぐさひめの兩眼りやうがんを射いながら、窓まどの隙間すきまより、音おともなく出でてしまつた。依然いぜんとして老若男女らうにやくなんによの萬歳ばんざいの聲こゑ、間斷かんだんなく聞きこえ來くる。千草姫ちぐさひめは餘あまりの驚おどろきに暫しばしの間あひだは失心しつしんしてしまつた。

(大正一四・八・二五 舊七・六 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第二〇章 千代ちよの聲こゑ「一七八七」

シグレ町ちやつのレール、マークの留守宅るすたくには、チウイン太子たいし、チンレイ、テイラ、ハリスの四人よにんが淋さびしく頭あたまを鳩あつめて密談みつだんをやつてゐる。

テイラ「もし太子様たいしさま、レールさまやマークさまは、到頭たうとうやりそなたつて捕とらはれたさうぢやござりませぬか。妾わがはは水汲みづくみに參まゐりました際さい、そこに落おちてゐた號外がうぐわいを

見て吃驚しましたよ」

チウ「ナニ、やりそこなつたかな。ヤアこいつア困つたな。かうしては居られまい。ジャンクの處へでも行つて二人を救ひ出す工夫でもせなくてちやなるまい」

「およしなさいませ、劍呑ですよ。金毛九尾の悪狐の憑依した千草姫ですもの、どんな難題をつけて、又もや太子様を牢獄に投げこみ命をとるか知れませぬから」

「それだといつて、國家の志士を見殺しにするわけにはゆかぬぢやないか。餘はこれから、どうなつても構はぬ。二人の遭難を坐視するには忍びない。一つあらゆる手段を盡して助けて見ようと思ふのだ。どうか君たち三人は外に出ぬやうにして待つてゐてくれ」

チンレイ「お兄様、千金の御身をもつて輕擧妄動はお止しなさいませ。萬一お身の上に危険が迫り、お命でも失ひ遊ばすやうな事があつては、それこそトルマン國は常暗になつてしまひますわ。これだけ人心騒々しく、豺狼虎龍の跋扈跳梁する世の中、何ほど太子様の權威だつて、どうする事も出来ずまい。今の重僧どもは我利我欲の外に何も念はござりませぬ。千草姫の化物に誑惑され、金の轡を

はまされてゐる悪人ばかりでありますから、太子様だとして、吾が身の榮達のためには容赦はいたしませぬよ。教務總監のジャンクさまでも動かさうとしてゐるのですもの。そんな劍呑な所へ、お越しになつてはいけませぬ。こればかりは思ひ止つて下さい。』
と太子の袖に縋りつき涕泣する。

チウ『ヤ、困つたな。そんなら暫くお前の意見に任して待つ事としようかい』

かくいふ所へ二三人の男ドヤドヤと入り來たり、ソツと門口を覗きながら、

『ヤア、誰か來てゐるやうだ、オイ誰だい。レール、マークの大將は不幸にして

捕まつたやうだが、お前は誰だい』

チウ『ヤア兄弟か、マア這入り給へ。實は俺もなア、親分が捕まつたと聞いて、

向上會員と共に、様子を考へに來たところ、誰も連中が來てゐないので、留守師

團長をやつてゐたのだ。お前は誰だつたいな』

男『俺かい、俺やタールにハール、ケースの三人だ。號外を見てこいつは大變だ

と思ひ、誰か見舞ひに來てゐるに違ひないと、取るものも取り敢ず驅けつけて來

たのだが、お前は一體誰だつたいのう」

チウ「俺かい、俺はレールの兄貴の祕藏の弟だ。お前たちの名は常から聞いてゐたが、俺は特別の任務を預かつてゐたから、お前達に隠してゐたのだ。かうなれば黙つてをるわけにはゆかぬが、何とか運動をやつてるだらうね」

ター「ヤア實は號外を見るより、同志がクルスの森に集まり、親分を何とかして取返さうと相談してゐる最中に、數百の番僧隊がうせやがつて、十重二十重に取り圍んだものだから、どうする事も出来ず、同志は四方に散亂してしまつたのだ。本當に俺たちの運動に對しては、親分の入獄は泣き面に蜂だ。瘦兒に蓮根だ。どうにもかうにも、今のところ手のつけやうが無いわい。オイ、兄貴、何かいい考へはなからうかな」

チウ「待て待て、さう慌てたところで仕方がない。今は役僧どもの頭が非常に鋭敏になつてゐるから、大きな聲で物一つ言ふ事も出来ない。暫く成行に任し、時を得て奪ひ返すより外に方法はなからうぞ。マアゆつくりし給へ」

ター「オイ、ハール、ケース、兄貴がアア言ふから、ともかく一服しようぢやな

いか」

「ウン、よからう」

と二人はタールの後について狭い床「かばち」に腰を下した。

ター「ヤア、しかもナイスが三人もあつるぢやないか。オイ兄貴、うまい事してやがるな。一人寄つて三人も占領するとは、本當に凄腕前ぢやないか。吾々の主義からいつても、こんな不道理のことア出来ない。どうだ婦人國有論の實行をやらうぢやないか」

チウ「馬鹿いふな。この三人はみな婦人向上會員だ。婦人參政權獲得運動の張本人だよ。レール、マークの兩人が遭難を聞いて、親切に尋ねて来てくれたのだ」

ター「なるほど、そらさうだらう。これこれ御婦人、この際しつかり御活動願ひますぜ。しかし何時バラスパイが追跡して来るかも知れぬから、永居は恐れた。兄貴又ゆつくりお目にかからう。左様なら」

と足早に暗の路地に姿を消した。

その夜は積んだり崩したり、いろいろと小聲で話しながら眠つてしまひ、翌朝

早うから三人の女が炊事をしたり、そこらを掃いたりやつてゐると、乳飲兒を背に負うた二人の女が、相當な衣服を身に纏ひながら、門口に立ち、女「もし、一寸お尋ね申しますが、レール、マークの宅は當家ぢやござりませぬか」

テイ「ハイ、左様でござります。誰方が知りませぬが、先づお這入り下さいませ」女「妾はクロイの里のマサ子、カル子と申すものでござります。レールさまやマークさまが、小本山の役僧に捕まへられ、入獄をなさつたと聞きました、取るものも取り敢ず遙々と尋ねて参りました。どうでござりませうかな。早速には歸つてござるやうな事はありますまいか」

テイ「貴女は、さうすると、マサ子さま、カル子さまと仰有いましたが、レールさま、マークさまの奥さまぢやござりませぬか」

マサ子「ハイ、妾はレールの女房でござります。この方はマークさまの奥さまでござりますよ。向上運動とか何とかいつて奇妙な事を主人がやるものですから、妾の所まで番僧が張つてをりますの。本當に困つてしまひますわ」

チウ「ヤー奥さままでござりますか。サア、どうか此方へお掛け下さいませ。別に、さう御心配にも及びますまい。やがて許されて歸つて來られるでせう」

「ハイ、有難うございます。本當に妾二人は不運なものでござります。なにほど意見を致しまして、女の知る事でない、一言にはねつけ、一言も女房の言ふ事を聞いてくれないものですから、たうとうこんな災難にあつたのでござります。親類や兄弟からも喧しく申しまして、縁を切つて歸つて來い歸つて來いと勧めるのですけれど、二人の仲に、切つても切れぬ鎧が出來ましたので、可愛い子供を繼母の手に渡すのもいぢらしいと思ひ、泣きの涙で今日まで辛抱して來ましたが、もう堪へ切れませぬ。それでキツパリ縁を絶つてもらひたいと思ひまして尋ねて來たのでござります」

「女房が夫に離縁を請求するとは、如何なる事情があるにもせよ、不貞の甚しきものだ。今時の女性は、どれもこれも、我利しだから、困つたものだな」

「そりや一應ご尤もでござりますが、こんな夫に添うてをりましたは、此世の中で安心して暮すことが出來ませぬわ。貴方はやつぱりレールのお仲間でござりま

すか
』

「ハア、さうです。兄貴が【かまつた】ものだから、是非なく嬢と一緒に、この牙城を守つてをります。ずるぶん留守師團長も、いい加減なものですよ」

カル子「綺麗な御婦人が、しかも三人あつしやいますが、この二人はどうやら、レールさまとマークの愛してゐられる御婦人でせう。本當に妻子に對し、あるにあらぬ心配をかけておきながら、何といふ酷い人だらう。マサ子さま、もう駄目ですよ。スツパリと斷念しようぢやござりませぬか」

マサ子「本當にさうですな。こんな白首があるものですから妻子を顧みず、こんな所に好きすつぼうな暮しをやつてゐるのですよ。エーもう穢らはしうなつて來ました。サア歸りませう」

と早くも立去らむとする。

チウ「もしもし奥さま、そら違ひますよ。さう、誤解されちやレールさまや、マクさまに氣の毒ですわ。これには深い譯があります。さう怒らずに一應私の言ふ事をお聞き下さい」

マサ「エーエー何とおつしやつても、私の耳には這入りませぬ。現在白首を見せつけながら百萬遍の辨解をなさつても、私の耳へは到底這入りませぬ。こんな事だらうと思ひ、マサカの時の用意にと、カル子さまと相談の上、親兄弟の承諾を得て、ここに離縁状を持つて参りました。レール、マークの兩人は囚はれの身の上ですから、直接に渡すことは出来ませぬから、兄弟分の貴方に確かに渡しますから、どうか面會においでになつても、「マサ子やカル子の事はフツツリ思ひ切つて下さい。以後關係はありませぬから、兒は貴方の出獄まで預かつておきます」と、傳へて下さい。エー残念やな残念やな」

と二通の離縁状を投げつけ地團駄踏みながら、路地口を一生懸命雲を霞と歸り行く。

チウ「ハツハハハハ、テイラさま、ハリスさま、お目出たう。到頭レール、マークさまの奥さまにしてしまはれたぢやないか。満足でせうね」

二人は顔を眞赤に染め、

「太子様、腹の悪い、擲掬もいい加減にして下さいな。ホホホホホ」

チウ「ヤ、こいつは冗談だ。ハハハハハハ」
と笑ふをりしも、鈴の音けたたましく仁惠令の行はれ、囚人は全部解放されたといふ一葉の號外が舞ひ込んで来た。四人はこの號外を見るより思はず知らず手を拍つて、天地の神に感謝した。チウインにも三人の女の目にも嬉し涙が滲んでゐた。

そこへイソイソとしてレール、マークの二人が歸つて来た。

チウ「ヤア、兄貴、よう歸つて来てくれた。今も今とて大變に心配をしてゐたところだ。ずるぶん困つただらうな」

レ「ヤア有難う。おかげで解放されました」

マ「どうも御心配をかけて済みませぬ。ツイやり損じたものですから、あんな失敗をしたのですよ。時に珍しいお方を連つて歸りました。お目にかかせうか。

路地の入口に待つて居られますから」

チウ「珍しい方とは、オイ君、誰だい」

レ「貴方の神軍を助けられたといふ、三五教の宣傳使様ですよ。不思議の縁で同

じ牢獄へ打込まれて居つたのです」

チウ「なに、宣傳使、ヤアそりや、かうしてはをられぬ。ドレ、僕が御挨拶に行かう」

と言ひながら、レール、マークに案内させ、路地口に出て見れば、照國別、照公の二人がニコニコとして立つてゐる。

チウ「ヤア、宣傳使様、誠にお氣の毒な事でござりました。何分繼母に曲神が憑依してをりますものですから、清淨潔白な貴方様をあのやうな穢しい牢獄に投げ込んだものでござりませう。どうぞ私に免じ、了簡してやつて下さいませ」

照國「イヤ、貴方はチウイン太子様、國家のため、尊貴の御身を落とし御盡力の段、實に感謝に堪へませぬ。何事もみな神様の御經綸ですから、そんなお氣遣ひは御無用にして下さい」

照公「太子様、いよいよ教政改革の機運が廻つて来たやうでござりますわ。お喜び下さいませ。もはや、かやうな貧民窟にお暮し遊ばす時期は済みました。どうか堂々と名乗りをあげ、教政改革にお當り下さいませ。私は師の君と共に、有ら

む限りのお助けを致したい考へでござります」

チウ「ヤ、如何にも、お説の通りいよいよ時節が到来したやうに思ふ。サア、レー
ル、マーク兩人、ここで一つ臨時會議でも開いて、假内局を組織しようぢやない
か」

レ「ともかく、ここでは都合が悪うござりませう。九尺二間の御殿まで参りませ

う、アハハハハ」

と笑ひながら歸り來たり、ここに男女六人は頭を鳩めて、新内局組織の協議會を
開いた。雀の聲も今日は何となく勇ましく千代千代と聞こえ來る。

(大正一四・八・二五 舊七・六 於由良秋田別莊 北村隆光録)

第二章 三婚(一七八八)

シグレ町の九尺二間の臨時御殿には、主客八人膝をすり合して月の輪となり、

面白さうに笑ひながら内局組織の大会議が開かれてゐる。

チウイン「宣傳使の言はれた通り、もはや教政改革の時期が迫つて来たやうだ。

しかし此際教政改革に最もよき人物を採用せなくてはなるまい。どうぢやレール君は左守司となつて教政の重任に當つて呉れまいか」

レール「仰せとあらば喜んでお受けいたしませう。しかしながら左守、右守家は今日まで世襲となつてをりますが、もし私が左守とならばテイラさまのお家はど
うなるのですか」

「左守家、右守家世襲制度は此の際全廢せなくてはなるまい。何事も根本的の大改革だからな。ついてはテイラさまを君の妻君に餘が仲人しよう」

「太子様、一寸お待ち下さい。拙者にはマサ子といふ妻もあり子もございます。左様なことは到底出来ませんまい」

チウインはニコニコ笑ひながら、

「ア、そんな心配は要らないよ。これが證據だ」

と言ひながら、マサ子から預かつた離縁状を投げ出した。レールはつくづく封筒

の表を見、また裏をかへして見、

「チ工、山の神の奴、洒落た事をしをるな」

と封をおしきり見れば、水莖の跡鮮かに細々と長い手紙が記してある。

チウ「ハハハハハハ、どうだレール、一寸その文句を讀んで聞かして呉れたまへ」

レ「ハイ、しかたがありません。女房から離縁状をもらふなんて、男としては餘

り褒めた話ぢやありません。しかしもうかうなつちや破れかぶれです。サア聞い

て下さい、讀み上げますから」

前文御免……「何ぢや失敬な、挨拶もせず前文御免とけつかるわい。夫を馬鹿

にしてけつかる」……「エー、妾こと不思議の御縁によりまして、貴方様の妻とな

り子までなしたる間柄でございませぬ、貴方は萬民の忌み嫌ふ向上運動だと

か、免囚運動だとか反逆人のやうな行ひを遊ばすので、兄弟親類近所合壁より排

斥し、妻たる私までが非常な壓迫を受けますのみならず、日夜番僧どもの凄目

で睨めつけられ、かよわき女の身として到底耐へ切れませぬ。しかるに貴方は今

度、畏れ多くも王妃の御輿に對し不隱の御行動を遊ばし、重大事件を引き起し、囚はれ人とおなり遊ばしたのも、全く天地の神に見離され給ひしことと推察いたします。かかる重大事件を犯せし上は、もはや貴方は死刑は免れますまい。それゆゑ今の中にどうか妻子が可愛いと思召さるるなら、私を離縁して下さるであらうと、堅く堅く信じます。何事も因縁因果の廻り合ひとお締め下さいませ。そして此の子は幸ひに貴方が出獄されるやうな事がありましたらお返しいたします。また御不幸にして極刑におなり遊ばすやうな事があれば、是非なく貴方の忘れ形見として育てますから、御安心下さいませ。たとへ無罪になつてお歸り遊ばすとも、私は斷じて貴方と夫婦となる事はいたしません。よつて兄弟親族と相談の上離縁状を差上げますから、宿世の因縁とお締め下さいませ。

妻マサ子より

レール殿

レール「ハハハハハハ。このレールも最早駄目だ。マサ子列車がたうとうレール

を脱線しよつたわい。太子様、御命令に従ひ、左守司を奉職さして頂きませう。
テイラ様の縁談は別として、……たうてい私のやうな、女房に尻を振られるやう
な者に、テイラさまがどうしても婚姻して下さいませうや、覺束なうございますか
らなあ」

太子「なに、そんな心配は要らないよ。俺の天眼通でテイラさまの心中を鏡にテ
ラして見ておいたのだ。なあテイラさま、異存はありませんまい」
テイラは「ハイ」と言つたきり、顔を赤らめ袖を掩うて俯向く。

太「ハハハハハハ、これで一夫婦落着だ。サアこれからはマークさまだ。マーク
さま、君は右守司になるのだよ」

マ「思ひもよらぬ御恩命、實に有難うございます。たうてい私ごとき不徳者の身
をもつて、右守司などといふ重職には耐へ得られますまい。どうかもう少し軽い
御用にお使ひ下さいませまいか。沐猴にして冠するものと世の笑ひを受けますか
ら」

レ「オイ、マークそれや何を言ふのだ。太子様の御命令ぢやないか。そんな遠慮

はするに當らないよ。俺だつて二つ返事で左守司を頂いたぢやないか」

マ「サア暫く考へさしてもらひたいなあ」

レ「それや何を言ふのだ。考へも糞もあつたものかい。いつも言つてをつたぢやないか。「この運動が成功したら、君は左守になれ、僕は右守になる」と氣焰をあげてゐた癖に、なんだ、卑怯に、今になつて尻込みするといふ腰拔があるか」

マ「……………」

太「オイ、マークしつかりせないか、何だその面は」

マ「ハイ、謹んでお受けいたします。至らぬ吾々どうか宜しくお引立を……………」

太「アハハハハハハ、たうとう落城しよつたな。よしよし、それについては、ハ

リス女將軍を君の奥様にお世話しよう。ずるぶん美人だらうがな」

マ「私には妻がございます。こればかりは御容赦を……………」

太「それ、これを見る、これが證據だ」

と一通の封書をマークの前に投げ出した。マークは不思議さうにその書面を手に取りあげ、よくよく見れば妻の筆跡である。直ちに封押し切り見れば、

カル子より、マーク様に離縁状を差上げます。人間は締めが肝腎ですよ。貴方も男でせう、滅多に女々しい、未練たらしい事は決して言はない方と信じてみます

……

マ「ヤこいつは手厳しい。嬢の奴、大變なメートルを擧げてゐやがるな」

レ「アハハハハハハ。態を見い、オイ、マークその次を讀まないか」

マ「いやもう耐へてくれ。あまりひどい事が書いてあるので、讀むに忍びないわ」

とパリパリパリと引き破り、やにはに頬張り、クシヤクシヤクシヤと「かみたれ

こ」にし、灰の中に鐵の火箸で埋け込んでしまつた。

マ「エー、もう思ひ切りました。しかし嬢が離縁状を呉れるのも無理はございま

すまい。第一彼奴の兄弟や親が没分曉漢ですから、カル子の奴、一刀兩斷的の態

度に出よつたのですわい」

太「かうなる上はハリスさまを新夫人としても差支へないぢやないか」

マ「何事も太子様にお任せいたします。どうか宜しく【おとりなし】を……」

太「ヤアこれで二夫婦揃うた。ハリスさま、満足だらうな」

ハリ「ホホホホホ。仰有るまでもなく満足ですわ。私が始終求めてゐた理想の夫に出會つたのですもの」

レールは頭を叩きながら、

「ヤーこいつは猛烈だ。耐らぬ耐らぬ耐らぬ、アハハハハハハ」

ハリス「ホホホホホ」

マーク「エへへへへへ」

チンレイ「もし兄さま、甚いわ、私だつて女ですよ。どうして下さるのですか」

太「ほんにお前の事は忘れてをつた。まさか俺の女房にするわけにも行かず、困つたなあ。まあ待つとつてくれ。何とか適當な夫を探してやるから」

チン「兄さま、そんな事言つて何時までも引張るのはいやですよ。妾だつて、性の欲に囚はれ、日夜悩んでゐるのですもの」

太「アハハハハハハ。こいつは猛烈だ。今時の女性は總てかふいふ式だから困つてしまふわ」

照國「王女様に適當な夫をお世話いたしましたませうか、なかなか氣の利いた好人物ですよ。決してレールさま、マークさまに優つても劣らない人物です」

太「どうか世話をしつてやつて下さい」

照國「實は私の弟子に春公といふ立派な男がおります。今は城外の牢獄の看守を勤めてをりますが、どうでせうかなあ」

太「どうか宜しう願ひませう。サア、チンレイ、これでお前も安心だらう」

チンレイ「兄さま、否ですよ、なんぼなんでも牢獄の番人なんて殺生だわ」

照國「實のところは春公といふ男、神様の命令により吾々の入牢を前知し、臨時

牢番となつて、いろいろと便宜を與へてくれた義理堅い情深い神司です。きつと

人物は保證いたします。男前もなかなか捨てたものぢやありません。王女様に配

はずには負けず劣らずの器量をしてをります」

チン「そんなら兄さま、お世話になりませうかねえ、ホホホホ」

太「お氣に入りましたかなあ、やお目出たう。サアこれで一時に三夫婦結婚の約

が結ばれた。一つ祝杯を擧げて歌はふぢやないか」

チン「兄さま、貴方の奥さまはどうなさいますか」
太「そんな事は言はなくてもお前も豫てより聞いてゐるぢやないか。タラハン城のスタルマン太子の妹バンナ姫に定つてゐるぢやないか。親と親との許婚だもの」
チン「オホホホホホ、えらい失禮な事申し上げました。ずゐぶん兄さまも執念深い方ですな」
太子「馬鹿言ふな、俺の事はかまはいでもよいわ。」

千早振る神代のままに女と夫とが

嫁ぎの道を開く今日かな

三組まで夫婦揃うて杯を

擧ぐるは御代の瑞祥なるらむ

レール「吾が君の恵みの露を杯に

汲くみて嫁とらぎをなすぞ嬉うれしき』

テイラ 』世よに稀まれな男をのこ子を夫つまにもちながら
君きみに仕つかふる吾われぞ樂たのしき』

マーク 』有ありがた難たし世よ嗣つぎの君きみの媒とりもち介ちに
今け日ふ新あたしき妻つまをも持もちぬる』

ハリス 』求もとめてし理り想さうの夫をに添そひながら
世よをひら開ひらきゆく事ことの嬉うれしさ』

チンレイ「如何にせむ未だ見ぬ夫に身を任せ
神の宮居に仕ふる吾が身を」

太子「ヤ、目出たい目出たい、これで餘も安心した。モーシ宣傳使様、どうか祝歌を歌つて下さいませ」

照國別「億萬年の昔より 億萬年の末までも

人の情けは皆一つ 男子と女と相睦び

嫁ぎの道を開きつつ 神の依さしの神業に

仕へたまはむ人びとの 今日心の勇ましさ

仰ぎ見るさへ樂しけれ 尊き神の引き合せ

清き奇はしき女子と 男子がここに寄り集ひ

嫁ぎの道を始めつつ トルマン國の政事

常磐堅磐に末永く 固めたまひし今日こそは

天の岩戸のそれならで

十方世界も皎々と

輝くばかりの思ひなり

ああ惟神々々

神の恵みの彌深く

これの縁をどこまでも

互ひに睦び親しみて

大神業に仕ふべし

守らせたまへと主の神の

御前に祈り奉る

鶴は千年の松ケ枝に

御子を生みつつ君が代を

祝ぎまつりて緑毛の

龜は海より這ひ出でて

底津岩根の聖場に

萬世祝ひ舞ひ遊ぶ

實にもミロクの新政か

神政成就の暁か

實にも目出たき次第なり

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

誠の神の結びたる

六人の縁はどこまでも

解けざらまし惟神

神に誓ひて三五の

照國別の神司 喜び祝ぎ奉る

照公 目出たし目出たしお目出たし ここに三夫婦相並び

嫁ぎの道を始めまし トルマン國の柱石を

固めたまひし尊さよ この喜びを吾々は

言葉にかくる術もなし ただ何事も目出たしと

祝ぎまつる外はなし ああ惟神々々

御靈幸倍まませよ

かく互ひに謠ひ終り杯を汲みかはしてゐるところへ、如意棒をぶら下げてやつて來たのは、ラムのテルマンであつた。テルマンはニコニコしながら入り來たり、
「ヤア、レールさま、マークさまお目出たう。仁惠令が行はれ無事出獄せられたと聞き、取るものも取り敢ずお喜びに參りました。やチウイン太子様、お目出たうございます。どうか宜しくおとりなしを願ひ上げます」

(大正一四・八・二五 舊七・六 於由良海岸秋田別莊 加藤明子録)

第二章 優秀美（一七八九）

教務總監のジャンクは一室に立て籠り、千草姫の行動の常ならぬのに心を惱め、且つチウイン太子、王女、テイラ、ハリスの行方不明となりしこともまたジャンクが心配の種となつた。いつとはなく、うつらうつらと眠りにつく。時しもあれ、容色端麗なる異様の神人、何處ともなく現はれ來たり、「ジャンク ジャンク」と肩をゆすり玉ふ。ジャンクはハツと驚き目をさませば、夢にみしと同様の神人が嚴然として、吾が目の前の椅子に腰うちかけ、ニコニコしながら、神人「我は第一靈國の天人言靈別のエンゼルであるぞよ。汝はトルマン國の現状を憂慮し、心膽を惱ませる段、實に感服の至りだ。汝の至誠天に通じ、今やエンゼルとして汝の神業を輔くべく降り來たれり、ゆめゆめ疑ふな」

ジャンク「ハイ、何事も愚鈍の私、進退維谷まつて、憂愁に沈みをります際、尊き神様の御降臨、實に有難う存じます。何とぞ何とぞ御守護あらむ事を偏に希ひ上げ奉ります」

エンゼル「汝が心配いたしてをるチウイン太子を始め、王女チンレイ、テイラ、ハリスの面々は神の守護により、少時ある所に圍まひおきしが、いよいよ教政改革斷行の時期到來したれば、今に會はしてやらう。汝は飽くまでもトルマン國の教務總監となり、チウイン太子を輔けて、正しき教化を行へ。また左守、右守はチウイン太子、既に定めをれば、太子の意見に従ふべし。王女チンレイは照國別の弟子春公なる者を夫となし、ハリマの森の神殿に三五の大神とウラルの神と併せ祭り、春公を神主となし、チンレイと共に永遠に奉仕せしめよ」

ジャ「ハイ、何から何まで、御指導下さいまして有難う存じます。神様……エンゼル様に恐れながらお伺ひいたしまするが、ガーデン教王様は精神に御異状ありとみえ、言行頓に一變し、この老臣も實に困難いたしてをりまするが、教王様は元の正氣にお返り遊ばすでござりませうか」

エンゼル「彼は八岐大蛇の片割の惡靈に憑依され、精神惑亂しをれば、暫く閑地に靜養せしめよ。また千草姫はすでに此世を去り、その遺骸に高姫の靈憑依し、日の出神の生宮と稱し、あらゆる醜態を演じ、亂暴を働きゐるは、全く金

毛九尾の悪狐の靈の致すところ、ずるぶん注意すべし」

ジャ「ハイ、心得ましてございます。千草姫様でないとするれば、この老臣も大いに考ふるところがございます。何とぞ何とぞ過ちなきやう、御守護願ひ奉ります」

エン「かれ高姫の再来たる千草姫は常に特に氣を付けよ。さらば」

といふより早く、忽ちその神姿を消させ玉ふた。ジャンクは神恩を感謝し、讚美

歌を歌ふ。

歌を歌ふ。

ジャ「日はくれはてて道もなし 雪は野山に堆く

つもりて歩まむ由もなし 行手に悩む旅人の

頭上を照らし日の神は 暗をば晴らし積む雪を

解かせ玉ひて己が行く 大道を開かせ玉ひけり

アア有難や有難や 御國に盡す赤心を

神は諾なひ玉ひけむ 困り切つたる今日の宵

吾が枕邊におごそかに 現はれ玉ひ宣り玉ふ

その御言葉は夢ならず 誠の神の御出現

仰ぐも高し須彌の山 守らせ玉ふ木の花の

姫命にましますか ただしは言靈別神か

何れにますかは知らねども 姿雄々しき瑞御靈

乾ききつたる吾が靈を うるほし玉ひ清鮮の

血汐を吾が身に漲らし 救はせ玉ひし嬉しさよ

ああ惟神々々 主の大神の御前に

謹み感謝し奉る 喜び感謝し奉る

かく歌ひをる時しも、チウイン太子は照國別、照公、レール、マーク、テイラ、ハリス、および王女チンレイ、テルマン、春公の面々を引伴れ、意氣揚々と歸り来る。ジャンクは太子を見るより抱きつき、涙の聲を絞りながら、

「アア太子様、よくマアお歸り下さいました」

といったきり、後はあまりの感激に打たれて、一言も出し得なかつた。太子もこ

の老臣がただ一人、悪魔の中に孤城を守つてゐたかと思へば、そぞろ涙を催し嬉し涙にむせ返り、ハンカチにて兩眼を拭ひながら、少時言葉も得出ださず俯むいてしまつた。

照國「ジャンク様お喜びなさりませ。太子様はこの通り御壯健でゐらせられます。そして教政大改革の準備として、既に棟梁の臣をお定めになり、お歸りになつたのでございますから、どうか貴方様は、太子様を新教王と仰ぎ、教王様に退隱を願ひ、千草姫の悪靈を追ひ出し、教政に御盡瘁あらむ事を希望いたします」

ジャ「ハイ、何から何まで有難うございます。只今も尊きエンゼルが吾が枕邊に出現遊ばし、いろいろさまざまと教化の大本につき、お諭しを頂きました。何分よろしくお願ひ申します」

「この度、大英斷をもつて仁惠令を發布されましたのは、人心を新たにする上から見ても、誠に結構な事と存じます。ついては荒井ヶ嶽の岩窟に、チウイン教王様が押し込めおかれたる妖僧キューバーを、速やかに解放されむ事を希望します」

「なるほど、實のところはキューバーの所在が分りませぬので、何の處置も取つ

てをりませぬが、所在ありかが分わかりました以上いじやうは、速すみやかに解かい放ほういたしませう」

「チウイン教王けうわうさま様の御ご繼い職しよくについて、目め出でたくこれで、國內こくないの風塵ふうじんは掃はき淨きよめられました。サアこれから千草ちくさひめ姫ひめの審神さにはを致いたしませう。ジヤンク殿どの、御ご一いち同どう、拙者せつしゃと共に千草ちくさひめ姫ひめの居間ゐままでお越こしを願ねがひませう」

一同いちどうは頷うなづきながら照國てるくに別わけの後うしろより、足音あしおとを忍しのばせ、千草ちくさひめ姫ひめの居間ゐまにと進すすみ寄よつた。室内しつないには女をんなの聲こゑ、

「王妃わうひさま様、どうか、こればかりはお助たすけ下くださいませ」

千草ちくさ「何なんといつても、其方そなたは絶對ぜつたい服從ふくじうを誓ちかうたではないか。お前まへの乳房ちぶさをこの燒やき金かねで切きり取り、大神おほかみさま様にお供そなへいたし、キューバーの所在ありかを知らして頂いただかねばならぬのだ。モクレンともあらう者ものが、今いまはの際きはに卑怯ひけふ未練みれんな、命いのちが惜をしいか、テモさても悲かなしさうな面かほわいの。何なにほど逃にげても、走はしつても、この一室ひとまに閉とぢ込こめた上うへは助たすかりは致いたさぬぞや。サ、觀念くわんねんの眼まなこを閉とぢなさい。神かみの贄いけにへになるのだつたら、其方そなたも光榮くわうゑいだらう」

モク「いかなる御用ごようも承うけたまはりまするが、どうか娘むすめのテイラに一目會ひとめあはして下くださいま

せ。その上にて如何なる御用も勤めまする』

千草『ホホホそんな事を言つて、この場を逃げ出し、千草姫の悪口をふれ歩き、吾が神徳をおとさうと致す考へだらう。さやうな計略に乗る千草姫ではござらぬぞや』

と優しい面に殺氣を帯び、金火箸を白くなる所まで焼き、キヤアキヤアと泣き叫ぶモクレンの乳房に今やあてがはむとする時しも、照國別は力かぎり、外よりドアを打ち破り、「ウーン」と一聲、睨みつくれば、千草姫は慌てふためき、尻のあたりより狐の尻尾の八岐になつたのをブリンブリンと振りながら、天窗を傳ひ、何處ともなく姿をかくしける。

因にテルマンは新教王の見出しによつて、番僧頭に任せられ、新教王の神政を國民は謳歌し、今まで亂れ切つたるトルマン國も、小天國を現出するに至つた。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一四・八・二五 舊七・六 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・二四 王仁校正)

附 記念撮影

大正乙丑七月七日 於丹後由良港

ひろ 大き正しき乙丑

とをあまり 十餘り四つの年の秋

しちくわつなぬかたなばた 七月七日七夕の

いくひたるひ 生日足日を祝ぎて

につほんかい 日本海を枕とし

いそ なみ こゑき 磯うつ波の聲聞きつ

おと 音に名高き由良ヶ嶽

うしろ 背後になして口述の

きねんしやしん 記念寫眞を撮影し

あや 綾の聖地の家苞に

しる たふと 記す尊き物語

かみ みやづ 神の宮津の寫眞師が

さんぼんあし 三本脚のレンズをば

た かほ 立てて顔をば睨み合ひ

かみ 神のまにまに寫し行く

しちじふにくわん 七十二卷の物語

めで 目出たく茲に編み了へて

けふ たの ほねやす 今日 是は 樂しき骨休め

